
D D S ~竜殺しとパートナー~

MK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DDS → 竜殺しとパートナー

【NZコード】

N8672X

【作者名】

MK

【あらすじ】

この世界の人は卵を持って生まれてくる。その卵は十二歳を迎えた時に孵化し、己の『パートナー』と対面することになる。人と『パートナー』の関係は密接で特殊なもので、『パートナー』の能力が人生を左右するといつても過言ではない。

水城歩は、そんな『パートナー』の誕生をいまいまかと待っていた。そこから生まれるのは、世界最強の存在である竜か、それとも別なにかか 五年後、歩は知らぬ間に宿命に巻き込まれ始めた。

「Arcadia様にも投稿させていただいております」＊これが
「一回」一つ投稿していきます。予定では、29日、31つて感じ
です。追記、時間は21:00です、やきもきしてらした方、いら
したら謝り間ます。すみませんでした

0・1 パートナーと竜（前書き）

ファンタジーとは書かせていただきましたが、あまり雰囲気はないです。初投稿ということもあります、多々拙い部分が見受けられると思いますが、ご了承いただけたら幸いです。

序章

五年前

夜の病院で怪談が生まれるのも当然だ、と水城歩は思った。
照明は消され、手元のランタンだけが照らすほの暗い廊下。人の
生き血を浴びた数多の機器と、死という非日常を日常として過ごす
人が猥雑に存在している。

廊下から枝分かれした無数の部屋では、大小を問わず、なんらかの
疾患を持つた患者が夜を共にし、少し奥に入ると死体がいくつも並
んでいる。彼等の死の慟哭が刻まれている以上、墓よりも生の感情
が残されているのはこちらだろう。

巨大な入れ物の中に、そういうものが詰め込まれている。生者
と死者が力オスを描いているこの場に感じるものがない人は、どこ
かしか壊れているとしか思えない。

などと偉そうなことを考えながら、内心びくつきながら歩は歩
いていた。

自己陶酔と現実逃避でもしていないと、怖くて仕方がないからだ。
かといって急いでこの場を離れようと走ると、余計に何か追い掛け
てくる気がして、早足で歩くことしかできない。背中を軽く丸めて、
びくびくしながら目的地までカウントダウンをしていくしかなかっ
た。

歩はため息をついた。どうして十二歳の誕生日に、深夜の病院で
心臓の鼓動を聞かないとならないのか。

もうほとんど翻ゲームだ。十一歳になつたこの世界の人間は、皆こんな経験をしているのかと思うと、今まで馬鹿にしていた大人達を尊敬してしまいそうだ。

そうこう考へている内に、大きめの戸まで辿り着いた。戸を開け、目の前には渡り廊下が広がり、その先に目的の部屋がある。

夜の寒々しい風を感じつつ、早足で駆けこむ。風の音すらおどろおどろしく感じた。

入った先には、それぞれ独立した部屋に通じるドアが並んでいる。ドアの隙間から洩れる光を見て安堵しつつ、手前から数えて三つ目の部屋に入った。

「お、ちびらなかつたかい？　いや、ちびつたからトイレ行つてたのか。パンツの替え、とつてこようか？」

「つるせえクソババア」

迎えて第一声は、母親との心温まるやりとりだった。

肩にかかる位の黒髪を後ろで軽く縛つており、スーツと相まっていかにも活動的な印象を受ける。顔には、にやついた笑みを浮かべていた。

彼女の名前は、水城類。歩の母親だ。

「クソババアとは誰のこと？　ここには可愛らしい女の子が一人とクソガキしかいないんだけど」

「何が女の子だ。一児の母がきもいんだよ。三十過ぎればババアで十分だ」

「あら、年齢なんてのは田安に過ぎないのに、見た目でしか事を測れないなんて。お姉さん悲しいわ。そんなガキに育てた覚えはない

！」

「母親が女の子とか言つてんの流すほつが子供としては悲しいわ！
言つて悲しくなんねえのか？」

「全然。十代の子にナンパされる内は立派な女の子でしょ」

確かにクソババアの見た目はお化けの類だ。一緒に歩いていると、類のことを知らない友人から、どうやってこんなお姉さん捕まえた云々聞かれるのが定番化してしまっている。

だからといってクソババアはクソババアなのだが。

「年甲斐もねえな。それに十代の『子』って完全にババア目線じゃねえか」

「あら、そりや年季が違つからね。いい年のとり方をすると、女の子といい大人の両立はできるもんよ？ 覚えておきなさい」

「あの、もうそろそろ、やめた方が……」

声のほつを向くと、そこには歩と同年代の、正真正銘の女の子がいた。

つむきがちにこちらを覗つている彼女の名前は、能美みゆきといつりしこ。

昨日、こきなり紹介された。なんでもこれから類が彼女の親代わりになるらしく、仲良くするよつにと言わされてから二十四時間もたつていない。

長い黒髪は艶やかで、怯えた様子には似つかわしくないきりつとした眉が美しい。その下の瞳は薄めの茶色なのだが、左目はどこか灰色がかって見えた。

その華奢な両手には、大事そつに『卵』が抱えられている。

「あら、怖がらせちやつたか。』めんね、うちのガキ、しつけがな

つてなくて」

「みゅきさんがなんで怖がつてるかわかつてるか?」

「あんたが引けばいいのよ」

「あの、今までお邪魔しちゃつてよかつたんですか? 私いないほうが……」

「そんなことないよ。馬鹿息子と誕生日が同じってのもなんかの縁だしね。これから仲良くしてやつて」

「こんなクソババアと一人きりよりだいぶマシだから」

みゅきの怯える様子に、歩も声をかけずにほこられなかつたのが、なんとなく恥ずかしい。

「こんな口の悪い息子だけじ、みゅきくね。それにしても誰に似たのかしらね」

お前だ、とは思つたが、話しが混ぜ返すのもどうかと思つてまる。「ちりを一向に見ないみゅき」「ギマギしてこると、すねのあたりに何か柔らかいものが纏わりつく感触がした。

視線を下げて確認すると、白猫が身体をすりつけっていた。甘えるよつの動作で、愛らしさといつぱいの上ない。

「どうした、クソババアになんかされたか?」

「ひどいな。流石の私も『パートナー』にはしないって。なあミル」

ミルと呼ばれた猫はにゃーんと鳴いた。ビックリのここの聲音は、この場では異質だ。

「どうしてこんな落差あるかな。片や口うるさいババア、片や洗練された美しい猫。『パートナー』といふな差があるもんかね」

「それを今日あんたは知るんでしょう。さつさと済ませてくれないか

ね、仕事たまつてゐるのに

「俺にはどうしようもないんでね。つていうか、十一歳の誕生日に『パートナー』が孵るつてこいつのは良いけど、一十四時間も誤差あるのはなんでかねー」

歩はちらりと視線を移した。

そこにはつたのは、歩の『卵』だ。みゆきのものと何も違ひがなく見える。表面はなめらかで、傷一つなし。歩が生まれた時から傍に置いていた割に、まるで傷ついていないのは、いつ見ても不思議だ。

「早く孵つて欲しいね。ようやく解放されるかと思つと、嬉しくて仕方がない。持ち歩いてないと、こつちの氣分が悪くなるつてどんな呪いの品だよって感じだつたからな」

「不埒なやつめ。そんなこと言つてるとキメラ出ちゃうぞ」

「それは怖い。できれば童がいいなー」

「選り好みするなんて、ほんとにキメラ出ても知らないよ? 罰あたりめ」

「あ、あの」

突然、みゆきが話に入ってきた。こじんなしか先ほどよつも顔色が青ざめている気がする。

「キメラって、その、良くないんですか?」

すこしためらつてはいたが、質問内容はさつきりしてこる。どうもパートナーに関しては興味が躊躇に勝るよつだ。

類が笑いながら言つた。

「生まれる前から色々考えるのも、まあ不埒なことなんだけじね。

ただ、キメラは特殊な能力持つちゃつてるから」

「どなんですか？」

「他の人の『パートナー』を食べて、その能力を手に入れられる、つていう能力。狙つた能力、例えば翼だつたり、牙だつたり、炎吐く能力だつたりを自由に取れるわけじゃないけど、それでも忌避されるものではあるから」

「なるほど」

みゆきの顔が心なしか青くなつてゐるよう見える。嫌な想像が頭の中を駆け巡つてゐるのだろう。

それを見て、歩が笑つて付けくわえた。

「まあ竜になる可能性だつてあるんだし。考えても仕方がないよ」「あつ」

水をすぐつように両手を前に差し出していたその上の『卵』がぴくり、と動いた。

すぐにヒビが卵の表面に入り乱れる。時折揺れ、そのたびにヒビがひろがつてゆく。

「時間ね」

みゆきが彼女に近寄つて行つた。

「そのまま焦らず待つて。ゆうべ出でてくるから、何もしなくていいよ」

みゆきはこくつと頷くと、微動だにしなくなつた。

卵は少しずつヒビを広げていき、小気味良い音を立てながら細かな破片がこぼれていった。

教室の中には人間は固唾を呑んで見守つてゐる。歩も、類も、

みゆきも全く口を開かず、ヒビが割れる音だけが聞こえてくる。

一分とかからずヒビが卵全体にまんべんなく行き渡ったところで、しばし動きが止まった。何か問題が起きたのかと不安がよぎりはじめた矢先、急にヒビから光が漏れ始めた。

それが合図だったかのように、一気に卵が崩れた。

「つ

反射的に光を手で遮つたが、目がくらんでしまっていた。
ようやく視界が戻つたとき、みゆきの掌には卵がなくなっていた。
代わりに、『パートナー』がいた。

「あつ」
「精霊系かな？ 綺麗なパートナーだね～」

驚きに田を見張るみゆきに、類が声をかけていた。
みゆきの『パートナー』は、重力を失つた水のような姿だった。
無色透明で不純物が一切なく、奥が綺麗に透けて見える。掌の上で踊るように形を変えていくのが、幻想的で美しかった。

ひとつおりぐねぐねとくねらせた後、序々に形が定まり始める。
完成した形は、小柄な人そのものだ。人間ほどはつきりしたものではなく、輪郭は絶えず変化していたが、それは間違いなく人型だった。頭から髪が伸び、耳の辺りが気泡とともにぽこんと浮きあがるのが見えた。

最後に顔の部分が出てきた。鼻が伸び、口がへこみ、瞳のない目ができる。どことなくみゆきに似ていた。

歩は綺麗なパートナーだと思った。みゆきに似た造詣も、まじりけない透明な質感も、ただただ綺麗だ。

興奮した様子のみゆきに、類が声をかけた。

「いい感じのパートナーだね、おめでとう。そしてハッピーバース
デイ」

「あつがとつぱれこます」

みゆきは軽く頬を上気させていた。頬への感謝の言葉も、いつも
よりこころなしか感情がこもっているように見える。
歩は、ふと自分の卵を見てみた。部屋の中央に置かれた机の上に、
ぽつんと置かれた鶏のものより少し大きな卵。自分の脳みそが完成
する前の段階から手に握んでいた代物。

みゆきの嬉しそうな顔を見ていると、急に自分の卵が愛おしくな
った。いつ生まれるか分からぬからと、これまで二十時間近くじ
つと待っていたため、存外に扱っていた自分が恥ずかしい。
ゆっくり近付き、丁寧に掌で包む。

顔の近くまで持ち上げてから、卵の表面を軽く指で撫でた。一切
ヒビはなく、中から返りてくる反応もなかつた。

反応の無さに少し落胆し、卵への注意が薄くなつた瞬間、田の端に
母親の顔が映つた。母親は意地悪そうにやにやしている。

「現金だな～みゆきちゃんのが孵る姿見て、急に愛おしくなつたつ
て感じかな？　いや～見え見えすぎてお姉さん恥ずかしくなつちゃ
うわ～」

頬が急激に熱くなるのを感じた。

「つむせえよ、だれがお姉さんだ。三十も半ばを過ぎたおばさんが
何言ってんだよ」

「残念ながら見た目若いからさ」

「あり、生まれましたか？」

そう言い、入ってきたのは、見知らぬ二十代と思しき女性だった。白衣を着てのことから、おそらく病院の人だわ。

「はい、おかげさまで」

「それなら、書類に記入していただいていいですか？」

類が近付いて行き、なにやら書類を受け取った。

その時。

手のひらに、振動が伝わってきた。

離しかけていた手を戻し、大事なものをつかむように両手で抱える。

「どうした？ 始まった？」

母親の言葉もどこか遠くに聞こえた。

こつこつと殻が叩かれるのがわかる。初めは些細な力で、肌で触れていないとわからない程度だったのが、序々に力強くなつていき、卵を揺らし始めた。

ぴしりとヒビが入った。

「おっ」

「歩、動くなよ」

言われるまでもなかつた。掌に全神経が集中していて、瞬きひとつ自由にできる気がしない。

先ほどのみゆきの時のように、ヒビが序々に徐々に広がっていく先を想像したが、そこから一気に卵の全体にヒビが走った。

「大丈夫、落ち着いて。別におかしいことじやないから、落ち着いて」

卵の変化はなおも加速した。

あつという間に光り出す。

息を呑む暇もなく、部屋を光が包んだ。

目を閉じる反射が遅れたのか、目の端に鈍い痛みが走る。

光がやんだのがまぶた越しに伝わってくる光でわかつたが、すぐには目を開けられなかつた。

十秒程度たつと痛みもようやくおさまりはじめる。

心臓の音を聞きながら、思いきって目を開いた。

まだ視界は戻つていなかつた、目の前にいるはずのパートナーの姿が、あやふやにしか写らない。生殺しに、少しいらだちを覚えた。

仕方なく思考に集中すると、すぐに疑問が生まれた。

母親達の反応がないのだ。歩と同じく強烈な光に目をやられたのかとも思つたが、歩よりも距離が遠く、全員が全員目をつぶされたとは考えにくい。

だといつうのに反応がないのははどうしてか。口に出せないほどひどい姿なのだろうか。

しかし、まだ見えない。怖くて周りに聞くこともできない。

ただただ焦燥感だけが増していく。

視界がようやく像を結び始めたころ、声が聞こえてきた。

渋く、深い、威厳のある声だ。

「視界が戻らぬか」

その発言の後、すっと視界の靄が消えていった。急激に目の焦点が結び始める。

「我が生まれたことで貴公の身体は進化し始めた。視界の回復も速

くならう」

大雑把な輪郭が見え始めた。尖った口、やや前傾姿勢ながら一つの足で手のひらに立つてゐるよつだ。身体にしては大きな足に、ちよこんと前に出た腕。

そして……翼。

ぱさりといふ音とともに手のひらの感触が消え失せ、代わりに軽く風が流れてきた。

それは上昇し、歩の顔と水平位の位置まで飛び上がつた。このときに、視界は完全に戻つた。

「竜……」

みゆきのつぶやきが聞こえてきた。

続いたのは、先程の渋い声。

「私は竜である。それもただの竜ではない。言語を操り他を圧倒する能力を持つ、竜の中の竜だ。そして貴公のパートナーである」

一角獣のような額の上から真っ直ぐ伸びた角の下に、大きな目があつた。

透き通るようでいて深い緑の瞳と、黒真珠のような艶のある体が競うように強調し合い、それでいて協調のとれた姿。

翼をはためかせ、空中で静止しているその姿は、卵のときとさほど変わらない大きさだったが、霧囲気を持っていた。

『強者』の持つ、絶対的な霧囲気。

竜が言った。

「貴公と命を共にし、生を分かち合い、力を高め合つ。我がこの世に誕生したこの瞬間、貴公との契約が成立した」

歩の喉が鳴った。

インテリジェンスドラゴン。人語を自在に操る、竜の中でも最も格式の高い存在。人語をしゃべることのできるパートナーなど、竜以外のものも含めても、インテリジェンスドラゴンだけだ。

余りにも予想外な僥倖に何も言えないでいると、竜の雰囲気が柔らかいものに変わったのに気付いた。

続いて響いてきた声も、幾分碎けたものだ。

「ハッピーバースデイ」

歩の頬が咄嗟に歪んだ。現れたのは、すこしづかり意地のわるそ
うな笑顔だろうか。

「ハッピーバースデイ」

十五年前（歩の竜誕生から数えて十年前）

「おめでとうー！」
「ありがと」

×××は、のパートナーの誕生を祝福した。は全身で喜びを表しており、×××も人ごとながら嬉しく思った。とは同じ施設で暮らしており、友人と家族の間のよつたな関係での喜ぶ姿を見ると×××も嬉しくなる。

今二人が一緒にいるのは、来たことのない病院。誕生日が同じ日だからで、十一歳の儀式と一緒に迎えている。

それにして 驚いた。

「竜なんてすごいね」

「へへへへ」

友人のパートナーは竜だ。いわゆる宝くじに当たった感覚だろう。黄褐色の鱗に包まれた細長い竜は、の手のひらで穏やかに身を伏せている。大きめの翼はおさまりきらず、手のひらから外れで、だらりと垂れさせられていた。

×××は正直羨ましく思つた。パートナーが竜である人、竜使いともなれば後の人生は約束されたようなものだからだ。

ふと、自分の卵を見る。

全く動きは見えない。

「君、おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

知らない大人の人人がやつてきて に声をかけた。病院の人らしく、書類やらなにやらの記入を進めてきた。

「それにしても、竜とはね。すごいな
「ありがとうございます」

本当に

「ひらやましい。手のひらにねむめるぜびの竜を見て、

そう思った。

再び、自分の卵に視線を移すと、既にヒビが入っていた。

孵るのだ。

慌てて近寄り、両手で包むようにして持ち上げた。

「お、君もか」

病院の人気が興味深げに覗いてきた。

卵のヒビはすぐに広まっていく。ものの数秒で　生まれた。

「これは」

「おやおや

炎に燃えるたてがみに、獅子の勇壮な顔。身体もライオンのものだが、ところどころに鱗も見える。尻尾はヘビとなつており、尾の端には蛇の下が覗いていた。

その姿は、今まで思い描いてきた中でも最悪を想定したものと、余りにも似通っていた。それは多種多様な姿を持つパートナーの中でも、特に様々な姿を持っていると聞く。それが確実にそうだ、といふ証拠はない。

しかし。

しかし、余りにもテンプレートな姿だ。

この雑多なパートナーは。

「キメラだね」

最も忌避されるものだ。他のパートナーを糧に成長する、忌まわしいパートナー。

よりもよつてこれとは……

絶望感が押し寄せてくる。

うなだれていると、肩に手を置かれた。

「そんな肩を落とさなくていいよ。大丈夫、全部おじさんにまかせなさい」

病院の人の声がいやに優しい。声はすぐ後ろから発せられている。

「さあ、眠りなさい」

いきなり口に何かを当てられた。息が苦しくなり、必死であがくが、大人の力には叶うわけもない。

よくわからないまま、意識は消え失せた。

一章

現在

歩は盛大にため息をもらした。

セミの鳴き声が所構わぬ鳴り響いており、ただでさえ高い気温が五度は上がっているような気がする。寝汗を左腕で拭つたが、次から次へと沸いてきりがない。

諦めて黒板を見た。寝てからそれほど経っていないようで、ノートはまだ間に合いそうだ。

「では最後にまた基本に戻りましょう。何度も言いますが、魔物史？と召喚史？はそれぞれ細かい生態ばかりを問うているように見えますが、なにより基本部分をしつかり理解していないとけません。両者とも有機的に複雑に絡み合つており、根幹がしつかりしているとすぐに「じゅぢゅじゅ」になってしまいますからね」

担任の中村藤花が熱弁を振るつていた。凹凸の少ない華奢な身体からは想像できないほど、教師としての威厳に満ち溢れた授業をしている。出張から帰ってきたばかりだというのにまるで疲れを見せないのも、教育者として強固な意思をそなえていることを物語つている。

黒板に走らせていたチョークを止めるといぐりと振り返つてこちら側を見た。

「それでは、先程まで船をこいでいた歩君、『魔物』とはなんでしょうか？」

しつかり見られていたようだ。下の名前で呼ぶのがこの先生の癖だが、そのおかげか、皮肉も余り嫌みに聞こえない。

驚きつつも、周りの少し意地の悪い笑みを含んだ視線を無視してゆっくり立ちあがった。

「魔物とは、人と卵生生物を除いたC級以上の生物のことです。社会に害を為すことができるだけの能力を持ち、一般に人間とは相いれません。現在、人間のテリトリーの外でしか見ることはできませんが、時折、テリトリーを侵食してきては、大きな戦争となっています」

「正解です。ただ、授業はしつかり聞きましょう。座つてください」

ほつとすると同時に、妙な優越感を抱いて座つた。クラスメイトがどこかがっかりしている姿が見えた。

「ではみゆきさん、卵生生物はどういった存在でしょうか」

藤花が最前列中央の席に座つた生徒を当てた。
長い髪を散らしながら、彼女は立ち上がつた。五年前より随分大人びた姿が目に映つた。

「卵生生物とは、私達人間が生まれた時に手にしていた卵から生まれた存在です。生まれる際の状況から召喚獣とも呼ばれます。一般的にはパートナーという呼称が一般的です。姿かたちは魔物とほぼ変わりませんが、命が人とリンクしており、どちらかの命が尽きるともう片方も死ぬという点が大きく違います」

「はいそうですね。ありがとうございます。では、慎一君、それ以

外に魔物との相違点はありますか？」

みゆきが座り、代わりに指名された歩の右隣に座る男子生徒が頬をかきながら立ち上がった。うなりながら、なんとか答えをひねりだしあげた。

「え、と。パートナーの力が人間にファーデバックされるみたいな、パートナーが強ければ強いほど、人間も強くなるって感じで……」

俯きがちに担任を覗う男子生徒に、教師たる藤花は優しく座つてください、と声をかけた。

「大筋はあっています。もう少し丁寧に言うと。パートナーの能力と召喚者たる人の能力がリンクしています。たとえば、パートナーの腕力が優れていれば、人の腕力も大きなものになり、パートナーの視力が高ければ、人の視力もよくなります。それにより、同じ人間でも全く違つた性質を持つこともあります。このクラスにいる人のなかでも、かなり違ひがあることはみなさん知っていますよね？」

クラス全体がざつとうなずいたのを見て、藤花は続けた。

「三人が言つてくれたように、魔物とパートナーは非常に似通つていますが、人間にとつては全く違う存在です。そこを常に忘れないようにしてください。テストにおいて、そこを勘違いさせようとする問題が非常に多いので、相当重要です。テストの後も常に付きまとつ問題になるので、身にしみこませてください」

ちらつと腕時計を見た。歩も壁にかかつた時計を見ると、まだ終了まで五分ほど残っている。

「ここで終わないと行きたいところですが、残念なことに時間が余っています。何か質問ないですか？」

教室に微妙な空気が流れる。質問なんてないから早く終わって欲しいと言いたいところだが、それはできない。誰か手頃な質問をしてくれないかと、みんな思つてするのがわかる。歩もその一人だから。

「せんせー、自分いいですかー？」

声の主は先程の慎一と呼ばれた男子生徒だ。

「どうぞ」

「なら、テストに出でてくるとこのお願いしますー。今度、赤点とったら小遣いやばいんすよー。ほんと、なんでもいいんでよろしくお願ひしますー。」

どりと笑いが起きた。半分ネタなのだから、全く悲壮感のない調子に、藤花までも笑つている。

ひとしきり笑つたところで、不意に藤花が何かを思いついたように口を大きく広げた。

すぐににこままりという笑みを浮かべて、教卓の端を両手で掴んで前傾姿勢となる。

「じゃあ竜についていいわね」

クラスの空気が一瞬で変わった。やつしかつた、といった感じだ。

藤花は嬉々として話し始めた。

「やっぱ竜は最高よね。テストで最頻出科目の一つになっている

のが、注目度の高さを表してゐるわ。いわゆる『パートナー』の中でも別格の存在で、他の種族とは一線を画してゐる最強の生物。全てを踏み抜く膂力！ 压倒的なまでの威力を持つ多彩なブレス！ 巨体に似合わぬ俊敏さ！ なによりも大空を駆け抜けける飛行能力！ 飛べる種族は他にもたくさんあるけど、あの巨体で一、二を争う速度なことは流石の竜！ 格言の通り、『竜は飛んでこそ竜。その姿に並び立つものは無し！』

目をキラキラと輝かせながら、一人暴走する藤花だが、歩達にとつてみれば、面倒なことこの上ない。

出張が多いことと、ドラゴンに対する有り余る熱意を除けば理想的な教師、とは副担任の弁。

「社会的立場は貴族のように高く、竜使いなだけで一生を約束されたに近いわ！ その分、竜殺しに狙われる危険はあるけど、それも有名税として歸つて名誉なことだわ！」

竜使いの数あるあだ名の一につき、『貴族』というのが一般的だ。選民意識の高さとその同族意識の高さ、そして一般的な地位の高さがそのあだ名に説得力を持たせてゐる。事実、竜使いになるだけで、一生は約束されたものと同じと思つてゐるのは、人口全体の九割以上は確実だ。

ただその事実は、歩にとつては憂鬱にさせる。

うんざり、といった感じで聞き流していると、藤花がキッと歩に目線を合わせてきた。

叱られるかな、と思つているとすぐに教卓のすぐ前に座つてゐる少女に目線に移つた。その少女は堂々としており、いきなり話を振られても全くたじろがない。

「歩君、唯さん！ 私はほんとに嬉しい！ 私、竜使いの学生を受け持つたことって、担任どころか授業すらなかつたのよね！ なのにいきなり竜使いが担当のクラスに二人もいるなんて、最高の荣誉だわ！ 今度の学年末模擬戦も、楽しみにしてるからー。」

タイミング良くチャイムが鳴った。

丁度話しの切れ目で鳴ったのが功を奏して、藤花も気付いたようだ。以前、熱中しすぎて五分以上オーバーしたこと也有つた。

「あら、残念。じゃあ次の模擬戦授業も遅れないように、よろしくね」

そう言ひと、手早く荷物をまとめて出て行つた。

クラスに安堵のため息が木靈する。

歩もため息を漏らしたのだが、それは一段と重かつた。今の話は、歩にとってどこか皮肉に感じてしまう内容だったからだ。
机の上でうなだれていると、先程歯切れの悪い返答をした男子生徒の声が聞こえてきた。

「さつさと行けりやせ。相方のお迎えもあるし

「ああ、慎一」

彼の名前は岡田慎一。クラスの中では比較的仲のいい男友達だ。はあー、と再度重いため息をついて立ち上がる。
歩の様子を見たのか、慎一が苦笑まじりに言つた。

「まあ、おつかれ
「さんきゅ」

「でぐだぐだしても仕方がない。

パートナーを迎えて行くか。

歩達が向かつたのは、教室と対になるようにして建てられた校舎だ。デザインや色はほとんど変わらないのだが、高さも横幅は倍ほどもある。そこは学生達が授業を受けている間、パートナーの待機室はある。

二人は、二つの校舎を繋げるようになされた橋を渡っていた。歩達のクラスだけでなく、他のクラスの人達もいるため、かなり混雑している。

「あー面倒」

「そうだなーもうちよい広くつくれりやよかつたのにな

ぶつくさ言いつつも、流れに任せて進んで行く。

そう経たない内に入れた。

入口から横にだだつ広い廊下が広がっており、ところどころに巨大な横に引く形式のドアがある。人間用の体育館が横にいくつも連なっているような感じだ。

歩達は迷うことなくその中の一室に進んで行つた。

そこには、様々な生物の姿があつた。

犬、猫のような比較的シンプルな動物から、妖精、ユニコーンまで、外見の変化は多種多様。似たような犬型でも、目の色、数、尾の形など、ところどころの差異も多い。

目の端に、自分達に向かつてくる姿が写つた。心地よいリズムで駆け抜け、慎一の前で腰を下ろしたのは、少し大きめの狼型。青い目は一つ、毛並みのいい尾は一つ、健脚そのものといった四脚と、シンプルな造形だ。

「おひ、マオ」

慎一はそれだけ言いつと身をかがめ、マオと呼ばれた狼の首をわしわしと撫で始めた。

気持ちよさそうに皿を半皿にしているマオと、嬉しそうにそれを眺めている慎一の姿に、歩は微笑ましくと同時に羨ましさも感じてしまった。

一通り撫で終わると、マオは歩の方をふい、と向いた。
そして飛びかかってきた。

「おい、マオ！ あぶねえよー。舐めるな！」

体長一メートルはあるつかという狼を、危なげなく受け止めたのだが、顔は舐められっぱなし。歩の言葉などどこ吹く風という様子だ。手足をぱたつかせ、尻尾をはちきれんばかりに振り回している。一向に止める気配はない。

「おい、慎一！ いい加減やめさせろー！」

「そんなこと言つながら、内心喜んでるくせに」

確かにそうだ。多少不満は残るが、こいつで全身全霊で喜びを表現されるのはどこか嬉しい。

それでも口だけは不満げにしておく。

「いや、あぶねえから。普通こける」

「お前なら大丈夫だる。一応、体力だけは学年でも一、二争ってんだからさ」

「……その言い方、なんか気になるな、おい」

「氣のせいだ」

慎一がちらりと壁にかかつた大時計に目をやつた。

「マオ、やめ

掛け声と同時に、マオはびたつと舐めるのをやめ、お座りをする。相変わらずの忠犬っぷりだ。

「ほら、相方呼んで来い。時間もあんまないし」

誰のパートナーのせいで時間がなくなつたのかと言いたいところだが、時計を見ると、そんな時間ももつたいなく感じた。

マオの頭を軽く一撫でしてから、部屋を見回した。部屋の端当たりで、身体よりも大きなクッショוןに身体を埋める姿が見えた。

「おー、アーサー

「ここにある」

帰つてきたのは、渋い声。だが、そこには迎えに来いという感がひしひしと伝わってくる。

辟易しつつ、迎えに行つた。

迎えに行つた先にいたのは、黒い竜。角が鈍く光り、緑色の目が輝く、流麗な造りをした、藤花が絶えまなく愛情を注ぐ種族の竜だ。だが。

「ほり、肩を貸せ

「はいはー

アーサーは翼を二、三振つてから飛び上ると、歩の肩に乗つた。その小振りな身体は、歩の肩でも十分に止まる。

「お前を、いい加減自分で飛べよ」

「ふん、それほど重くもないのだからいいだろう?」

アーサーは五年前からほとんど成長していない。肩にのられても、歩の動きに支障はない。

この五年間で、同級生達のパートナーは大なり小なり身体を伸ばしていく、人の何倍もの速さで大きくなた。慎一のパートナーであるマオも、生まれた時は卵大だった。

歩のパートナーだけが時から取り残されているようだつた。

姿の変わらない小さな竜。

それがアーサーと言ひ名の、歩のパートナーだ。

「ほら、行くぞ」

「うむ」

ひとまず、走って慎一達のところまで戻ると、慎一が苦笑しながら話かけた。

「おう、相変わらず偉そつだな」

「私は偉大なる竜だからな。多少偉ぶるのも威厳故、仕方なからう

歩はため息をついた。

「そんなに竜のこと誇つてる癖に、なんで他の竜のこと苦手なのかな。これまで何度か見る機会があつたつてのに、全部拒否しやがつて」

「ふん、竜の高貴なる姿など、我を見ておればよい。お前のことを思つて」

「はいはい」

」のパートナーは、竜のくせに他の竜を苦手とするのだ。新聞やラジオでも、竜の話題となると途端に嫌がる。全くもって、変な竜だ。

アーサーが不満げに口からマッチのよつなさをやかな炎を吐いた。それを見て、慎一が苦笑しながら取り出した。

「そんなお前にプレゼント

慎一が取り出したのはジャーキー。真ん中を綺麗に裂くと、片方をアーサーに向かつて投げた。

小さな両手で器用に受け取ったアーサーは、途端にかじりはじめた。目を輝かせてただ目の前のジャーキーをかじる姿は、どこか可愛らしい。

その姿を満足そうに見つづ、慎一は残った片割れを自分のパートナーに差し出していた。こちらも大きな体で嬉しそうに噛みついた。

「あんまりあまやかすなよ。肩に乗せるいつかの身にもなってくれ」「まあまあ。こん位いいじゃん」

軽くたしなめたが、慎一はまるで聞いていない。

そういうしてこの内に、ジャーキーを堪能したアーサーが口を開いた。

「相変わらず気が利くな。歩も歩ひこいつとひ見習つたりどうつかの？」

「はいはい、そつと授業行こつか。着替えもあるしな」

ひとまずアーサーは無視し、マオが満足気に鼻を舐めてくるのを

横目に確認してから言った。慎一も「そうだな」と答えてから、足を外に向けた。

「午後は普通の模擬戦だったか。まあ我の出る幕もなかろう」
腹が満たされて、機嫌な相方を尻目に、歩は肩がいやに重く感じた。

一人と一体はグラウンドにやつてきていた。容易に巻きあがる砂を敷き詰めただけの、だだつ広い簡素な運動場だ。

周りを見渡すと、皆同じ服に似たような武器を手にした同期達が談笑している。ところどころに衝撃吸収用のパッドを埋め込んだ、黒一色の変わり映えのない戦闘服だ。

その隣で思い思いに過ごしているのはパートナー達。ただし、牙や爪といった先のとがったものには頑丈な革製のサポーターが被せられており、模擬戦に備えた準備がされていた。勿論、人の持つ剣なども、金属製のものは刃引きされたもので、歩が左手に握んでいる身長より長い棍棒も、本来なら穂先に刃が付いて槍となる代物だ。

時計を見ると、まだ開始時間には三分ほど残っていたのだが、秒針が三十回も刻まない内に担任の藤花の声が聞こえてきた。

「それでは、始めます。はーいそこ、始まつたよー」

藤花がぱんぱんと手を叩いて沈黙を促すと、あつという間に喧噪が止んだ。

「いつもどおり、クラス毎に分かれての模擬戦です。ウォーミングアップと柔軟が終わったら、各自の集合場所に集まること。では、外周を始めてください」

藤花が一度、パンと手を鳴らすと、それを合図にバラバラと走り始めた。歩もクラスメイト達の流れに任せて走り出した。

一周一キロになるように引かれた白線の円を淡々と進んで行く。歩の体力は学年でトップクラスなのだが、ウォーミングアップでやる気を出すほど感心な生徒ではなく、結局集団の最後尾の辺りから動くことなく走り終えた。それから屈伸、前屈など一通りのストレッチを手早く済ませた後、慎一と分かれて自分のクラスの集合場所に向かつた。

クラスといつても、授業を受けたりするクラスとは別るもので、一般に模擬戦における能力の差によるものだ。学年辺り四百名程の生徒を十クラスに分け、一クラスに四十人ほど配分される。授業の模擬戦では、数クラスまとめて行われるため、歩の前にいるのは十五名ほどだ。

ちなみに、歩が所属するのはAクラス。一番上のクラスだ。
ただし、成績はダントツの最下位だ。

そこにはいる面々のパートナーを見渡す。歩の何倍もの背丈を持つ剛腕の巨人型や、大きな翼を持ち、圧倒的に優位な上空から仕掛けてくるグリフォン型。身体能力はそれほど高くないが、伸縮自在の身体を持ち、相手を選ばないほどの応用力を持つ精靈型。どれも卓越した戦闘能力を持つものばかりだ。

一方の歩のパートナーはというと、間抜けに大口を開けて欠伸をしている小さな竜。一緒に鼻から出るかぼそい炎がせめてもの威厳なのかもしれないが、ぼそっと消えると、それもただ儂いだけだ。模擬戦において、この小竜が役に立つわけもない。

それなのに歩達がAクラスに在籍しているのは、歩が超絶な身体能力を持ち合わせて、怪物達と対等にやりあえるから、というわけで

はない。

アーサーが竜だからだ。

竜は基本的に圧倒的なまでの膂力を持ち、在籍するのはAクラスもしくは、特別クラスが用意される。実際、同じクラスのもう一人の竜は、模擬戦に参加していない。一般的の竜にはそれほど大きな威光があるのだ。

歩にとつては、裏目に出ているだけの憎たらしい制度でしかないが、実力でクラス分けされたらどのクラスに配属されるか、という疑問がしばしば頭に浮かんでくるが、考えてみようとも思わない。みじめになるだけだ。

歩は考えれば考えるほど、ドジボに嵌つていっていいる気がした。

ため息を吐いていると、藤花の声が聞こえてきた。模擬戦においてAクラスを受け持つており、ここでも歩の担当となっている。隣には彼女のパートナーである、ユウがいた。巨大な狼の輪郭に炎を纏つた姿は、周囲を圧倒して余りある。彼女達が戦闘にも長けているのはその姿だけでもわかつた。

「はい、皆さん揃いましたね。それでは始めましょう。ただ、明後日には学期末模擬戦が控えています。無理をしないようにお願ひしますね。いつにもまして、最後の一撃の寸止め等は気をつけよう」。どんどん回していくので、そちらも気を付けてくださいね」

そういうと、今日の対戦表を近くの壁に貼った。遠目に見ると、いくつかある第一試合の欄に自分の名前があった。

相手の名前は……前のやつの頭が邪魔で見えない。

隙間から見ようと、頭を軽くずらそうとした時、不意に肩をたたかれた。

「一戦目、私達みたいね。よろしく」

みゆきだった。

長い髪を頭の後ろで結わえ上げて、腰には一番扱う人の多い両刃の剣をさしている。無骨な戦闘服のはずなのに、妙に似合っていた。全く面白みのないデザインを書かされた人も、彼女の姿を見ればいい仕事をしたと思つかもしない。

「よろしく」

「アーサーも、よろしくね」

「ふむ、良き戦を」

「じゃあ、行こうつか」

みゆきは顔に冷たく感じさせない微笑を浮かべると、一番近くにあつた白線の中に入つて行つた。その姿は凜としており、出会つたころの氣弱な姿はあるでない。

後ろに従えているのは、歩も誕生の瞬間を見た精靈型のイレイネ。大きさはみゆきと同じ程度まで成長しており、形だけ見れば、もはやみゆきそのものという感じだ。流したままにした長髪に、月桂樹の葉をより束ねたような冠を付け、身に纏つてているように見えるのが、一枚布の縄をくりぬき、腰の帯で縛つた つまりこの、古代の女神のような装束なため、遠い先祖が隣にいるような、そんな錯覚を覚える。

「おい、歩。行かぬのか？」

アーサーに促され、慌てて歩も後に続く。

気を引き締めないといけない。みゆき達は、見た目とは裏腹に、学年で五指に入るほどの実力者だ。模擬戦ではいつもトップ争いをしている。

中央まで歩いていき、一本引かれた白線の片側に立った。

すぐに藤花も中に入ってきた。傍らにはパートナーを従えている。

「それでは、注意です。装備はちゃんと整えましたね？寸止めを心がけること、無理はしないこと、ちゃんと心得てますね？一応、危険を感じたら止めに来りますが、それでも十分に警戒してくださいね」

歩とみゆきが頷くと、藤花は少し後退した。アーサーが飛び上がったのを確認してから、歩は腰を落とし棍棒を構えた。

「それでは怪我に気を付けて。始め！」

開始の合図とほぼ同時に、イレイネが仕掛けってきた。

開幕の一撃は、左腕を伸ばしての突きだ。まるで、空手の演武のように、その場で突きだされた左腕は、そのまま細く、長く伸びていいくことで、歩に襲いかかってくる。先の部分のみを圧縮、硬化することで十分な威力を持たせており、シンプルに見えて凶悪な得物になっている。不定形であるが故の業だ。

歩は、棍棒を一閃。突くことが主眼ではあるが、棒部分を用いた扱いでも防御には十分だ。

飛んできた手首の辺りに衝突させ、呆気なく散らせた。地面にぼたぼたと飛散したのだが、地面で蠢いてイレイネの元へ戻つて行くのが目に入った。身体から離れた部分も操作できるため、いくら散らそうとキリがないのだ。

一応の警戒のため、地面にちらばるイレイネの破片を避けるよう

に動きつつ、次々と襲いかかってくる突きを避けていく。右に左に、身体をぶれさせ、的を絞らせないと同時に前へと進行。序々に距離を詰めようとするが、相手もそれに合わせて体を動かし、決して距離を詰めさせない。

イレイネが仕掛け、みゆきも寄り添う形で一緒に動き、なんとか離れまいと歩が追い掛ける、鬼ごっこの一様相を呈していた。

傍田には、鬼たる歩が劣勢に見えるが、それほどではない。幾度となく手合わせしてきた結果、歩は一撃を喰らうことだがほとんどない。伊達に一人で怪物達を相手にしてきたわけではないのだ。主導権は握られてはいたが、破局は全く見えない。

勝負が決するのは、みゆきがこのペースをいつ崩して来るかだ。お互に決め手を欠く今、主導権を握るみゆき達がどう仕掛けてくるか、その勝負だ。

いつもはイレイネの動きに合わせてみゆきも仕掛けてきて、すぐに勝負がつく。他の同級生はパートナー任せで、人間はほとんど参加しないことも多いのだが、みゆきは時を見て一斉にしかけてくるのだ。その時が勝負を決する時で、歩は如何にそのときに状態を安定させられるかが鍵なのだ。

「まかといまかとその時を待っていると、不意にみゆきが声をかけてきた。

「歩、新技試したいんだけど、いい？」

少し茶田つ氣のある笑顔を浮かべる。実戦にはそぐわない行動であることと、変に律儀なみゆきの言動が重なり、思わず苦笑してしまつ。

「どうぞと答えると、これまで退く一方だったみゆきが単独で仕掛

けてきた。

これまで後ずさりするようになりがっていたのが一転し、みゆきが前方に身体をはねさせてきた。一瞬で距離を縮めると、手にした剣を振るつてきた。

歩は余裕を持つて棍棒で受ける。人同士のタイマンであれば、歩はまず引けを取らない。

そのまま一度、三度と撃ち合つが、振るつてくる剣にはほど力が込められていなかつた。簡単に防げる。

四度まで受けたところで、歩は動いた。

大きく剣を払つた後、さつと穂先を向け、出来る限りの速度の突きを見舞う。

一度で決めようとせず、一度二度と突く。息もつかせないよう、余裕がなくなるよう、追い詰めるように突き、引き、また突きを繰り返す。

みゆきはなんとか避けるが、序々に剣で受けることが増えてくる。後退し始めるのに、そう時間はからなかつた。

みゆきが一度足を引いた時点で、歩は詰めず、その場で棍棒を振り被つた。

全身の筋肉を引き絞り、すこしだけ助走をつけ、渾身の横薙ぎ。足の浮いたみゆきに避けることはできなかつた。

剣越しに、衝撃が突きぬけたのがわかつた。そのまま力を込め、みゆきを吹き飛ばす。

みゆきの身体が砂地に線を描くのを傍目に、歩はイレイネを注視したが、突つ立つたままであるで動きが見られなかつた。みゆきとの剣戟の間も注意を払つていたのだが、新技はどこにも見られなかつた。みゆきと歩が端にタイムンするだけなら、歩の有利は搖るぎ

ない。一人で仕掛けってきたのだから、なんらかの仕込みをイレイネがしているのではと思ったのだが、そのまま一気に勝負をつけるべく、みゆきに向かつて地を蹴り、足に力を込めたとき、アーサーの声が響いてきた。

「歩、周囲警戒！」

見回すが、何も見えない。聞こえない。臭わない。ふと唇がべとつく感じがした。ここくなしか湿気が高いのか。

なにか違うと思い始めたころ、

ぽつり、なにかが浮かんでいる。

田を凝らする、空中に雨粒が浮いているのがわかった。

それは イレイネの新技か！？

「大分コントロールができるようになつたね」

身体から離れたパーティもコントロールはできることは知っていた。ただ、量が違う。目に見えぬほど薄い状態から、次々と生まれ、膨れ上がり、空間を満たしていく。

そこでイレイネの身体がいつも七割ほどまで縮んでしまっていたのに気付いた。気取られぬよう、ゆっくりと身体を細分化し、空中に仕込ませていたのだろうが、見事としかいじょうがなかつた。

「イレイネ、行きなさい」

みゆきの命図と共に、雨が降ってきた。

歩の身体向かつて収束するように、雨あられと降り注いでくる。

歩は反射的に両腕で顔を庇つたのだが、その上から絶え間なく叩き続けてきた。

威力はさほどでもない。小石を投げ付けられた位のもので、日々鍛えている歩にとつては、一つ一つはどうともなるレベルだが、量が違つた。身体の至る所を殴りつけられるような状況だ。少なくとも、目や鳩尾といった急所となる部分は晒せない。

ただ耐えていると、腹のあたりに重い衝撃が突きぬけた。地面の感触が消え、雨の感覚がなくなつたかと思うと、今度は背中ががりがりと削られる。ほこりの匂いがして、砂利を含んだ地面の上を滑っているのがわかつた。

身体が止まると同時に、すぐ起き上がる。見えたのは、足を振り上げたイレイネの姿。腹を蹴られたのだろう。と、首元に冷たいものが突きつけられた。

「降参？」

両手を上げると、すぐに冷たい感触が消えた。振り返つてみると、みゆきが剣を納めていた。素早く回り込んでいたようだ

「どう?」

「驚いたよ。一つ一つはそれほどじゃないけど、いきなりやられると頭が真っ白になるね」

「慣れるまでは、拘束できそうだね。感想、後でもつぶしあねがいしていい?」

「全身ねらうより、頭とか目とか一点集中で狙つた方がいいかもね。感想の件はいいけど、イレイネは大丈夫なのか?」

みゆきの隣にいるイレイネの身体はいつもの八割ほどまで縮まつたままだ。あの技は大分負担をかけるようだ。

「まあ水飲めば戻るしね。馴染むまでには時間がかかるけど、特に辛

「いつわけでもないみたいだし。まあ、感想考えとこで

歩が頷くと、藤花のおつかれさまでした、という声が聞こえてきた。

その場を離れ、次の人に受け渡す。そのまま、みゆきの隣に座りこんだ。

「ふむ、なかなかであつたな」

「ありがと」

空中から降りてきたアーサーがみゆきに囁いた。
歩がふ~っと息を吐くと、アーサーが声をかけてくる。

「それにしても情けない。あつせつせらりねおつて

少し頭に来た。

「つるさいな。そんな口叩くならお前も役立てよ

「技を見抜き、警戒を促したのは誰だ?」

「口動かしただけじゃねえか

「ふん、喉を動かしただけ有難いと思え。我的手をわざらわすなど、百年早いわ

「生後五年が何言つてんだ」

「年月などただの田安に過ぎぬよ。何より、お前には、だ

「それなら百年早いも意味ないだる。一体、お前は何様のつもりなんだよ

「アーサー様だ。竜の中の竜である」

「竜のこと苦手な癖になに言いやがる」

「はい、やつらつるさいですよ。なんなら、私達の個人授業受ける?」

藤花の声に反応し、隣で睨みを聞かせている彼女のパートナーを見た。ユウと言つ名の、燃える巨大な狼。その威圧感は、間違いなく一級。

歩とアーサーはあっさりと黙った。みゆきが吹き出すのが見えた。

1・3 無邪気な子供達と竜

夕日が田に染みる。田だけでなく、怪物達から受けた傷にも染まる気がした。

みゆき、イレイネとの模擬戦後、巨人、ユニコーン、グリフォンなど、大型のパートナー相手が続いてしまい、身体のふしふしが痛い。歩く振動で肌がひきつる感触がある。

「はあ」

「おつかれさまでした」

みゆきの慰めもなんだかむなし。ようやく一日の授業が終わつたといつのに、辛氣臭いため息をついてしまつ。苦笑いしているみゆきには申し訳ないが、自分の肩に乗つた馬鹿を見ると、泣きたくなる。

「我は空腹である。あれこの肉まんなどいいのう」

「よだれ垂らすなよ」

よだれを垂らしそうになつてゐるアーサーは、歩とは対照的に無傷だ。たまに口を出す程度で、ただ飛んでいただけだから当然だ。その能天気な姿を見ると、パートナーとはなんのかと今更ながら考え込んでしまう。みゆきの三歩後ろで蕭々と従つてゐるイレイネを見ると、余りの落差に本当に泣きたくなつてきた。

「家まで我慢しろよ」

「嫌じや」

「酒飲ませんべ」

「何の権限があつて左様な外道を…」

「五歳にやまだ早い」

「法律では我に飲酒制限はないぞ?」

「自分から飲みたがるパートナーなんて普通いねえだろ」

「まあまあ。私がおうひであげるからさ」

隣で歩こているみゆきが言った。

「みゆき、甘やかすなよ」

「まあまあ。私も小腹が空いたしね。分けてあげる位ならいいですよ?」

「本当か!? なら、あそこの肉まんがいいぞ!」

『あそこ』とは、アーサーお気に入りの駄菓子屋のことだ。風体は昔ながらの駄菓子屋ながら、中身はとこと、駄菓子は勿論、肉まんをはじめとした軽食類、野菜、酒、拳句の果てには花火や武器の類まで扱っている。営業時間も昼夜を問わず、寝静まった深夜でも、多少の色を付けければ店を開いてくれるとこり、よくわからない店なのだ。

丁度、学校から歩の家までの帰途にあり、今も五百メートル程先に見えてくる。

「ひのじゅやおれん! 早くいくぞ! 肉まんが我を心待ちにしておるわ」

「よく肉まんの気持ちがわかるな」

「早くいくぞ」

歩のジッコリもまるで反応せず、アーサーは飛んでしま

つた。

「追わないの?」

「あそこのおっちゃんも馴染みだから、勝手にしてくれるだろ

みゆきは少しだけ苦笑の混じった微笑を浮かべている。

「それにしても、無理しそぎだったね。そんなに傷一杯作っちゃつて、藤花先生怒つてたよ」

「……言つた。アーサーと一緒に震えあがらされたんだからや」

怒つた藤花は本気で怖い。もし学期末模擬戦が明後日でなかつたら、藤花とパートナーによる個人授業ことじごきが待つていただろう。

怖いものなしに見えるアーサーも彼女達は苦手なようで、積極的に関わるうとはしない。闘争心がかきたてられる己が怖いのだ、などとうそぶいていたが、半ば怯えている様子は消えなかつた。特に、藤花のパートナーに苦手意識があるようだ。

みゆきは笑つた。

「相変わらず仲のいいことだ

「どこがだよ」

「一人揃つて先生怖がつてた姿とか。それに言いあいできるのは仲が良い証拠でしょ？」

「お前らみたいな阿吽の呼吸の方が羨ましい」

本日、何度も目かわからぬため息をついた。藤花のドラゴン話からこつち、氣落ちすることばかりだったようと思えた。

なんとなく町を見回してみる。人間と多様なパートナー達の営み

が田についた。

足早に帰途につく学生、なめした竹で作った買い物袋をさげる主婦と思しき女性、威勢よく呼び込みをかける売り子の兄さん。

学生の足元では、ピンと背筋を伸ばした猫が寄り添つて歩いている。主婦の頭上では、四足の鳥が少し小さめの買い物袋をくわえている。売り子が威勢よく呼び込みをしている後ろで、サンタクロースのような可愛らしい小人が、陳列した野菜を丁寧に並べ直している。

歩達が今歩いている道を見ても、そこかしこにパートナーの存在が見えた。そもそも大型のパートナーも通れるように作られており、砂地の道路を見るだけで、パートナーの息吹を感じられる。

横を大型の牛車が通り抜けていった。巻き上がった砂に苛立ちはつも、角をそびえ立たせた巨大な牛が引きずる荷台には、『最大積載量十トン』と書かれているのが見えた。

本日何度田かわからぬため息をついていると、いきなり肩がもまれ始めた。振り返るとイレイネがすぐ後ろにいることに気付いた。歩がぼんやりしているのが心配なようで、眉を曇らせている。

それでようやくみゆきとイレイネほつたらかしで、もの思いにふけっていたのに気付いた。みゆきは、優しげだがイレイネとそつくりの顔をしており、表情が似ていると、双子を見ているようにしか見えなかつた。

自分の不明を恥じつつ、言った。

「それにしても、イレイネはいい子だな
「アーサーも可愛いと思うよ？」 素直で

素直というより、我がままでガキなのではないかと思ったが、そのことを口にはしない。

「性格は諦めてるけど、せめて模擬戦で少しでも役に立つてくれればな。どうも辛い」

「歩は一人でも十分戦てるじゃん。Aクラスのパートナー相手に人間だけで勝てるんだから、自身を持つていいんじゃない?」

「十回に一回も勝つてないんだけど」

「それだけでもすごいよ。今日だって、私、すぐにやられちゃったし」

確かに、人間相手のタイマンではまず負ける気がしない。模擬戦の度に強力なパートナーと張り合わないといけないということがあり、日々鍛えている。その成果もあってか、人間としての身体能力はそれなりの自負があった。

「先週は一撃で巨人倒したりしてたし。あれどうやってるの?」

「巨人とかは皮膚と筋肉ぶ厚いからな。避けながらだと大したダメージになんないから、一撃にかけるしかないとだけ。捨て身でやつてる分、うまくいかなかつた場合は反撃喰らつて即終了なんだよ。今日特に傷だらけのは、そばつかやつてたからつてのもあるしな」

思い返してみると、今日は少し自暴自棄になつていた部分があつた。少し頭が冷えてきたようだ。
みゆきが呆れたように言つた。

「十分すごいつて。捨て身の一撃なんて、よほどの度胸がないとできないよ」

「そうかねえ」

そうこうしている内に、アーサーが飛んで行つた駄菓子屋に着い

た。

中に入ると、すっかり馴染みになつてている店主の顔が見えた。少し白いものが混じり始めたおじさんで、気が良く、アーサーが勝手にツケても快く受けてくれる。

軽く会釈した後、声をかけた。

「アーサー、食べました？　どこに行きました？」

「いや、まだだ。とりあえずこれだろ？」

店主は首を振り、歩に肉まんの入った包みを渡してきた。慌てて代金を渡す。

代金を受け取った店主は、何も言わず店の奥の方で小山になつている学生達の人だかりをさした。制服から見るに、おそらく歩も通っていた小学校の生徒であろう。身体の大きさからして、小学五年生といったあたりか。

乱雑に積まれた菓子の山を脇に通り抜け、近寄つて行くと、小学生達の甲高い喧噪の間から、アーサーの声が聞こえてきた。いつも通りの尊大な口調ながら、どこか優しげに聞こえた。

「そんな無茶をするでない。我はモノではないのだぞ」

「うわ～すげ～」「本物の竜だぜ？ 角かつけー」「馬鹿、翼のほうがかつけえよ」

全身を無遠慮に触られている。角を撫でまわし、翼をぱかぱかと広げて閉じるを繰り返していたり、尻尾をひっぱつたりされているのだが、怒氣を發していないところを見ると、子供に対しても甘いようだ。意外だ。

小学生達の興奮は冷めやらない。目は爛々と輝いており、頬を上気させている姿を見ると、なんだか自分が年をとった実感が湧いた。

一番前で、最も興奮していた少年が言った。

「ねえねえアーサー、俺のパートナーも竜だつたりしないかな？」

「それよりも竜使いとなり何を望むかが重要だ」

「俺、軍に入りたいんだ。やっぱり軍隊つていつたら、パートナーが重要だろ？ ねえ、俺のパートナーが竜の可能性つてある？」

「皆もそうか？」

結構な人数の学生が頷いた。やはりパートナーと共に闘う、というのは男の夢の一つなのだらう。歩もなんとなくわかる。

アーサーはすこし考え込んだ後で答えた。

「可能性はあると思つた。実際、卵が孵つてみないことにはわからんからな」

「何言つてんだよ。竜が生まれるかなんてほとんど血筋だろ」

冷えた声が聞こえてきた。声の方を向くと、アーサーを取り囮む輪から、離れた場所に座っている少年がいた。ただ一人輪から外れ、群がる同級生達を小馬鹿にしているように見えた。

先程一番に質問をした少年が笑いながら言った。

「何言つてんだよ。アーサーは一般人のパートナーつて今さつき言つてただろ。普通にあり得るつて」

冷めた少年は、嘆息した。重く、どこか呆れた感のある、絶望感が伝わってくる声音だ。

「血筋じゃない竜使い、全国でどん位いるか知ってる？」

「百人位じゃない？」

冷めた少年はつぶやくように言った。

「五人

「えつ？」

「だから、五人。三世代さかのぼっても竜使いがいないのに、当人だけが竜使いの人。世界の人口一億人の中で、代々竜使いばかりを輩出する貴族の家系で千人、親戚に竜使いがいる人で一百人。全く関係がない突然変異は五人だけ」

場の空気が一気に冷えこんでいった。アーサーの回りで起こったいた熱気は昇華され、胡散霧消してしまっている。

「ざつと計算して、十年に一人位。まず無理だよ」

一番興奮していた少年は、なんとか反論しようとしていたが、何も浮かばないらしく口をもじもじさせるだけで、言葉が出てこない。それ以外の同級生も皆同様だった。

全員が押し黙り、背筋に流れる汗が感じられる空気が続いた。

その空気を裂いたのは、アーサーだ。

「貴公はそんなに竜が好きか？」

「へつ？」

突拍子のない問いに、少年の口からすつとんきょうな音が漏れた。アーサーは何も聞こえなかつたように、厳かに続けた。

「それほど詳しいということは、相応の熱意を持つて調べたということであろう？ つまりは、それだけ竜に対する思いを抱えていた

とことことだ。違つか？

冷めていた少年の顔が真っ赤になつた。図星なのだらう。続いて、アーサーが何を言つのかと全員が見守つてゐる中。いきなりアーサーは頭を下げた。

「感謝を言わせてくれ。それほどの愛情を注いでくれて、竜としてなにより頭が下がる思いがする。ありがとう」

意外だつた。あのアーサーが、心から人に頭を下げるところを見たのは初めてだ。歩が見ていないところでもなかつたのではなかろうか。

それに竜に対しこれほど愛着があるとは。他の竜と対面することはあらか話題さえも避けるのに、竜のことは好きなのか。わけがわからない。

アーサーが頭を、それも初対面であるつ少年に下げている。驚きだ。

誰も反応できないでいると、アーサーがすつと頭を戻した。その顔は、いつになく真剣なものだつた。

「ただ、竜にこだわることはやめよ。竜でなくとも、竜を超えることは可能であるう。確かに、我らが國の第一陸戦部隊隊長は竜使いではなかつたように覚えがある。困難は伴うが、竜でなくとも竜以上の力を得ることは可能だ。それを目指せ」

小学生達は黙りこんでしまつた。何を答えればいいのか、どう受け止めればいいのか、よくわからないのだろう。熱氣のあった少年も、冷めた少年も、等しく黙つてしまつてゐる。

そのまま一分ほどが過ぎたころ、アーサーが歩に気が付いて声をかけてきた。

「おう、来たか」

小学生達の視線が一斉に歩に向けられた。
驚きと羨望と、淡い嫉妬が入り乱れたが、すぐに別なものに変わった。

「ああ」

「では帰るか」

翼を上下に羽ばたかせ、歩のところまで飛んでくると、肩に乗つた。

ふと、一番の熱気を持っていた少年が怪訝そうに尋ねてきた。

「お兄さん、高校生？」

「ああ、高いだ」

「つてことは、アーサーこれで生後二年経つてること? なら、アーサーってE級?」

人間以外の生物は五段階にランク分けされている。

A級は竜。B級は天使族、魔族、機械族が振り分けられる。C級は上記以外で、社会にダメージを負わせることが可能とされるA級でもB級でもない生物。D級は、一般に食肉や卵、毛等を採取するための家畜のことだ。

そして、E級とは、生後五年経つても身体が三十センチ以上に成長しなかつた生物を指す。

一般に流布する俗称は失敗作。文字通りの意味だ。

一週間前、アーサーはE級と判定されていた。

場が一気に白けていくのがわかつた。「何だE級か」「竜じゅねえじゅん」「つまんね、帰ろ」など次々と聞こえはじめ、ぞろぞろと連れだって外に出て行つた。先程の少年一人が慰め合ひよつて一緒にいたのが、妙に目に残つた。

あつという間に、誰もいなくなつた。残つたのは、歩とアーサー、みゆきとイレイネ、そして店主だけだ。歩はなんと声をかけていいかわからない。自分が近寄らなかつたら、じうじうことにならなかつたのではないか、といつ思つもあり何をするのも躊躇われた。

「肉まんあるか?」

アーサーに言われて、手に持つた肉まんを思い出し、何も考えずに持ち上げた。持ちあげてから、冷めてしまつていて気付いた。

「あ、冷めてるから……」
「ふん、かまわん」

アーサーは掴むと猛然と食べ始め、すぐに平らげた。

アーサーが物足りなそうにしていると、横から温かい肉まんが差し出された。見ると、店主が傍までやつてきて手を伸ばしてくる。

「ほら、食え。俺のおじいだ
「いいのか?」

店主の首肯を見てから、アーサーは手を伸ばした。再び猛然と胃

に納める。

食べ終えたア サ がいつもの調子で言った。

「帰るぞ、歩。別にそこで呆けていても構わんがの」
いつものアーサーだ。へこんでいる様子は一切見られず、すこし
ほっとした。

「そうだな。帰るか」

「うむ、さつさと帰るぞ。時間ももう遅い。足早にな」

「なんだそれ。走れってこと?」

「当然」

「お前が飛んだら、その分楽になるんだが

「ふん、我が身を左様なことに使えるか

「俺をなんだと思ってんだよ」

「下僕だ」

「まあまあ一人とも

みゆきが間に入ってくれるのもいつも通り。

店主に礼を言い帰途についた。

空はもう真っ暗になっていた。

「ただいま」

「帰つたぞ」

歩とアーサーは家に帰りついた。

その後、アーサーといつものように軽口を叩き合つ続けた。途中でみゆきと別れてからもそれは続き、家に入る前まで結局やむことはなかつた。

「お帰り」

玄関を通り過ぎ、リビングに行くと、母親はグラスを既に傾けていた。テーブルの上には、半分ほど減ったウイスキーの瓶がある。

その母親が怪訝そうに言つた。

「あれ、みゆきは、帰つたの？」

「ああ」

半年ほど前まで、みゆきはこの家に住んでいた。事情は結局教えてもらつていながら、養子のよつな形にしていたらし。突然できた妹のよつな存在に戸惑つたが、一緒に暮らす内に逆に世話をやかれるようになり、最終的には姉のよつな妹のよつなよくわからない状況に落ち着いた。

ところが一年前、みゆきは突然独立する旨を言い、外に出て行つた。といっても仲違いしたわけではなく、ただ単に独立したかった

だけらしき。金銭はみゆきの親類からもうものがあつたらしく、特に苦労していないと言っていた。類は寂しがつたが、結局は快諾し、親子三人+三体の生活はそこで終わった。

「そうか、残念。いつぱい作つたんだけどね。来るんじゃないかなーと思つたんだけどな」

「まあ、そう言つなつて。週末一緒に飯食つてんじやん」

ただ、類は交換条件として、みゆきに週末は家に来てご飯を一緒にとるようになに言つつけた。それはみゆきも快く承諾し、週末になるとみゆきがこの家に来て泊まつていぐ。みゆきの部屋もずっとそのままにされており、家族の一員であることは変わりないよつに思えた。

そういうつた経緯も重なり、歩にとつてみゆきは、姉であり、妹であり、同級生である、といった感じだ。

「つてか、酒飲むのはええよ。まだ七時だぞ」「お困ここといいなさんなつて。飯はもう作つてあるから、着替えでこいや」

台所を見ると机の上にはもう準備がしてあつた。後はよそつて温めるだけ、といつた感じだ。

歩は急いで着替えてくることにした。

ちなみにアーサーはといつて、酒を見た瞬間、肩口から消えていた。

「これは母上殿。我が杯の用意はあるか?」

「もつちろ~ん、飲み友だもんね。ほれ、駆けつけ一杯」

「これはかたじけない」

早く戻つて来ないと、早々に飲兵衛ができあがつてしまいそうな気がして、自室に向かう足を速めた。

バッグを放り、楽な服に着替え、リビングに戻るまでの時間はおよそ一分。

それでも遅かつたらしく、歩が戻ると、アーサーは出来上がりていた。

「おーい、こっち来いよ歩。一緒に飲もうぜ~」

アーサーは酔いが回ると、口調がやけに若くなることがある。そういう時は、大抵潰れる直前だ。

嘆息しながら、アーサーに尋ねた。

「俺飲めねえから。飯食えるか?」

「あ~余裕つしょ。じゃあ飯食つか」

翼を広げ宙に浮こうとしたが、右へ左へふらふらするばかりで、まるで移動できていない。

それでもなんとか歩には近付いていたが、いつどこかにぶつかって墜落するか、見れたものではなかつた。

「あーもひ、そんな無理すんなよ」

慌てて迎えに行き、両手でアーサーを受けた。

五年前とほとんど変わらない身体が、手の中に綺麗に収まつた。

「あー、あんがと」

「おい、アーサー?」

そのまま言葉にならない言葉を一、二度き、アーサーは眠つてしまつた。

まつた。

ひとまず、ソファの隣にあるマーサー用の籠に乗せて、毛布を被せた。

その様子を見て、丁度台所からてきた母親がくすくす笑った。

「相変わらず弱いわね。さつ飯食おうか」

「わかつてんなら飲ますなよ」

リビングに着くと、もう既に用意はできていた。献立は、アジの塩焼きにすき焼き。どうもミスマッチに思えて、考えを巡らした。おそらく

「アジはつまみ?」

「ハハハ、作り過ぎちゃってさ」

文句は言いつつ、いただきます、と言つてからアジを摘まんでみる。脂が乗つていて美味しかった。

おとなしく食べ続けることにした。足元では、類のパートナーである白猫のミルが歩のものと同じ焼き魚をもらっている。随分先に焼いていたのであらう、既に冷えているようで、猫のミルでも勢いよく食べている。

歩はすき焼きに手を伸ばした。すき焼きにしては甘さが薄めなのだが、それで育った歩にとっては逆にこれ以上甘いと美味しく感じられない。外で食べるすき焼きは逆に食べられない位だ。

黙々と箸を進めていく。お腹が減っていたのもあり、今日の夕食は格別だった。隣で張り合つ相手がいないのが、寂しいといえば寂しいが。

鍋の中身が七割ほどまで減つたところで、類が言った。

「あ、今大人気の隊長さん出てるね」

類に振られ、ラジオに耳を傾ける。

内容は、国軍の第一陸戦部隊隊長のインタビュー。第一陸戦部隊隊長といえば、国で最強のパートナーを持つている人が選ばれるものだ。竜使い以外がなることは少ないのだが、今の隊長のパートナーは機械型のペガサスであり、その親近感から、民衆に人気がある。

「竜使いでないものが、今の地位にまで上り詰めた秘訣は何かあるでしょうか？ 卓越したレーダー機能によるところも大きい、と言われていますが、そこについてもお願ひします」

「レーダー機能は、確かに有效なものです。敵味方の場所を捕捉、識別できるというのは、戦場においてかなりのアドバンテージです。ですが、機械型の中にはレーダーを無効化できるものもあります。事実、私のパートナーも無効化できますしね。ですので、一概に優れていふとは言えませんね。やはり日々の鍛錬と自己の克己、それに尽きます。竜使いに及ばないことは確かですが、象と蟻ではなく、象と猪位までならることは可能だ、と思います」

「なるほど。少しきな臭い質問をさせていただいてよろしいですか？」

「プライベートはできるだけオフレコで」

〔冗談まじりに答える隊長は随分な美丈夫だ。俳優といつても通用しそうな柔らかい雰囲気をもつてゐる。

「以前、所属しておられた第一後方支援部隊の隊員について、第一

陸戦部隊に一切引き抜くことはしなかった、ところのはざみしてでしょうか？

通例では、腹心の部下も三名までなら連れていくこと聞いたことがあるのですが。第一部隊は隊長を除いて全隊員が竜使いですが、やりづらさなどありませんでしょうか？」

「また随分ときついことを。部下を連れていかなかつたのは、やはり実力の問題です。やはり竜の足手まといになつてしまふ。私自身、なんとかついていつている、というレベルですので、難しいのではないかと謹んで遠慮させていただきました。

また、第一部隊の隊員のみなさんについてですが、よくしてもらつててるので、逆にこちらが申し訳なくなる位です。私自身、時折ふさわしくないのではないか、という疑問を持つことも多いですし」

「また御謙遜を。では……」

これ以上聞く気はなくなつてきた。過剰なまでの竜に対する謙遜と卑下は、歩にとつてはこそばゆい感じの皮膚をがしがし削られている感覚すらあるのだ。

だが、伝わってくる民衆の反応は熱気に包まれており、そういうた部分を疑問に思う人は少ないようだ。

「消していく？」

「どうぞ」

立ち上がり、ラジオの電源を落とした。そこから再び席に戻り、振りかえったところで、母親が嬉しそうに自分をみつめてくるのに気付いた。恥ずかしくなつてくる。

「なんだよ」

「いや、なんでもない」

半分程残っていたウイスキーを喉に押し込み、更にグラスに注いだ。

「みゆきやアーサーがいるのもいいけど、こいつしてあんたと二人つきりつてのもいいね」

「なんだそれ」

水城家の家族構成は母親に息子にそれぞれのパートナーを加えた、二人+一體。みゆきが加わる以前と以後は、ずっとこうだ。父親はおらず、俗に言つ母子家庭であり、母親たる類は日頃忙しく働いている。そのため、週に三回ほどは、歩とアーサーの一人だけで夕食を済ませることになっている。

父親のことは聞いたことがない。なんとなくいまになつても聞けなかつた。

手元のグラスの中でウイスキーと氷をくぐくぐと回しながら、類が言つた。

「ねえ、今日何があつたか話してよ」

たまにこんな風に大雑把に話を振られることがあるのだが、歩が嫌がつても大抵押し切られてしまうことになる。

歩は丁度一時間前にあつた出来事を話すことにした。

甘みの少ないすき焼きを堪能しつつ、思いつく限り駄々漏れで口に出していくつた。

全て話終わると、それまで聞き役に徹していた類が口を開いた。

「そんなことあつたんだ」

「ああ。案外アーサーの態度が変わらなかつたけど」

類は、ずっと手のひらで弄んでいたグラスをタン、と置いた。

「あんたはどう思った？」

「え？」

「アーサーが受け取る扱いと、そんなアーサー自身について」

少し考えてみて、答える。

「しようがないんじゃないかな。くやしいし、どうにかしたいという思いはあるけど、どうしようもないし。アーサー自身も特に変わった様子はないしな。小憎たらしいまんま」

豆腐を卵にからませてから口に入れた。すき焼き特有の甘辛い味から、肉や野菜のうまみが広がった後、微妙な甘さが口に残る。それでお腹いっぱいになった。

母が唐突に言った。

「アーサー酔つの早かつたよね」
「そうだな、相変わらず弱い」

氷がからり、と音を立てた。

「いや、今日は特に早かつたよ。いくらなんでも一分はないでしょ。いつもまだ持つし、酒量をコントロールしてできるだけ長く楽しもうとするしね。何より、食いしん坊のあの子がご飯を忘れて酔い潰れる、なんてことは滅多にないよね」

思い返してみると、確かにそうだ。食い意地の張るアーサーが夜飯前に酔いつぶれたのはそうなかつたように思う。

いや、最近あつた。

「あいつ、E級判定受けた時もこんな感じだったかな」

「そうね」

「内心、ショックだつたのか」

「表には出すまいと振る舞つていたんだらうけどね。どうしてだと
思う?」

類がグラスの中によくとくとくと注ぎ始めた。

その音が妙に小気味よい。

「氣を使つたのかな?」

「そうだね。あの子はなんだかんだで優しいし、空氣読むからね」

「なんでわかるの?」

「飲み友だからねー」

ハハハと乾いた笑いを吐きながら、琥珀色の液体を喉に押し込んだ。

「意外だらうけど、あの子もなんだかんだで内面は普通だつたりするからね。竜で、言葉をしゃべつて、大きくならないで、それでも傲慢に振る舞つて。特別に思えるけど、普通に傷つくし、普通に他人を思いやれる。あんたと変わらないさ」

歩はふと考えてみた。

今までアーサーは別格に思つていた気がする。生まれながらにあんな古臭い言葉づかいで、傲慢で、無邪氣で、竜のことが好きなくせに、他の竜との交流を避ける、特殊な竜。

だがその心の内はそれほど特殊なものなのだろうか?

田の端に、食事を終えて満足そうに顔を洗つてゐるミルの姿が入つてきた。食後の洗顔を終えると、のびをする。

「ミル、美味しかったか？」

類の質問に、ミルは「しゃー」と鳴いて答える。

「あんたももうここなの？」

「あ、ああ」

「そうか。ならミル頼む」

ミルが再びニャーと鳴くと、背筋をピンと伸ばした。田の色が、濁つた青から金色に変わる。そのままどこか遠くを見て、全身を震わせはじめた。

テーブルの上の食器が震えたかと思つと、浮いた。力チャカチャと音をたててぶつかりながら、次々と洗い場に飛んで行く。

ミルの能力である念力だ。なにげない日常生活に使える程、ミルのそれは洗練されている。

「おつかれさま」

全て運び終えると、ミルの目が戻った。

類はミルの首を撫で始めたが、ふと何かに気付いたようで、口を開けさせて歯の間に指を突つ込み、何かを取り出した。どうも、魚の骨がひつかかっていたようだ。

何も言わずにお互いを理解しあえている姿は、歩の心に残つた。自分とアーサーもこんな風になれるのだろうか？

類は洗い物を始めていたのだが、ふと何か思い出したように振り返り、聞いてきた。

「今日のすき焼きどうだった？ 甘さどう？」

「あ、ああ美味しかったよ」

「なら良かつた」

類のパートナーは猫のミルであり、その影響を受けている。それは身体能力、敏捷性の上昇といった面もあるが、味覚などにも影響してしまうのだ。猫は甘さをほとんど感じられないため、類もまた甘さがよくわからぬようだ。

まさに一心同体である。

歩とみゆきの好物というのもあり、すき焼きを作ったのだろうが、本来ならば苦手な料理に属している。

歩はリビングに戻り、寝ているアーサーの顔を見た。のんきに鼻ちゅうちんを膨らませており、見事に間抜けな姿があった。

とりえず、この間抜けの味方でいよう、とは思った。

風呂に入りと、風呂場に足を向けようとしたとき、再度類が声をかけてきた。

「歩、こっち来てラジオ聞いて」

台所に向かい、耳を傾けた。

通る声で、アナウンサーがニュースを読んでいる。

「本日、竜使いの死体が発見されました。被害者は、十九歳の学生とそのパートナー。警察による発表では、十年前に起こった『首都幼竜殺し事件』の犯人である『竜殺し』の仕業であるとのことです。長い沈黙を破つての犯行ということですが、犯行現場から……」

十五年前

×××は田を覚ました。

周囲を見渡そうと頭を振った瞬間、めまいがして再び倒れ込みかけてしまった。少し様子を見ながら身体を起こし、ゆっくりと周囲を覗う。

真っ白で何もない部屋だ。軽く身体を動かせる位の広さがあるが、何もない。

ふと下に田をやると、自分が真っ白なベッドの上に寝ていたことに気付いた。

ベッドの隣には小さめの籠があり、そこを見ると

「キメラ?」

意識を失う直前に見た、自分のパートナーの姿があった。少し手持ちぶたさなようで、あくびをしている。その姿に、他のパートナーを捕食して強くなる生物の面影はない。

しかし、なにがどうなっているのだろう。

自分を氣絶させたのは、おそらく病院の人　おじさんだらう。
なんであんなことをしたのか?

意識がはつきりし始め、危機感が増大していく中、声が聞こえてきた。

「起きたね？」

おじさんの中だ。

「あの、どうこうことですか？　iji jijiですか？　なんで私がここにいるんですか？」

「×××君、君のパートナーは何かわかっているかね？」

自分の質問は無視されてしまった以上、答えるしかない。

「キメラですか？」

「その通り。君はキメラ使いになつたわけだ。だからここにいる」「どうしてですか？」

「君は、キメラ使いと会つたことはこれまであつたかね？　話を聞いたり、ラジオや新聞で見たことでもいい。キメラ使いの実在を聞いたことはあるかね？」

いざ考えてみると、都市伝説としてはよく聞くが一度も実在する話を聞いた覚えはない。

「ないです」

「それは、キメラ使いは生まれてすぐ隣離されるからだ。いまの君のようだ」

意味がわからない。人権やら法律やらがまるで考慮されていない。

「それって違法じゃないんですか？」

「そうだね。でも、実際は起こっていることだよ」

そこで、いきなり声音が変わった。なつとりした猫撫で声に、怖

気が走った。

「しかし私は大変残念に思つてゐる。同情もしている。だから、君にチャンスを上げよう」「チャンス？」

突然、ガコ、という音がした。音の方を向くと、真っ白な壁の一部がずれている。隠し扉みたいになつてゐるようで、そこからが乗つてゐるベッドと似たようなものが押されてくる。上にはシーツがかけられており、中央がこんもりと盛り上がつていた。それを運んできた真っ白い服を着た人は、すぐに元の戸に戻つて行つた。再び、ただの壁に戻り、自分が逃亡の機を失つたことに気付いた。

「×××君、中身を見たまえ」

従つしかなく、ベッドから降りたつて運ばれてきたものに近付いた。なにか感づいたのか、キメラも隣によつてきた。
シーツに手をかけられる位まで近寄ると、生臭さを感じた。それになにか息使いのようなものが聞こえてくる。その発生源は、シーツの中のように思えた。

「どうした？ 早くしたまえ」

覚悟を決めて、勢いよくシーツをはぎ取つた。
息を呑んだ。反射的に後ずさつた。

そこにあつたのは、全身ぼろぼろの狼だ。
身を横たえ、口から血を流し、腹からは何か黒い物が覗いている。ベッドの上は一面血の海なのだが、それだけでは飽き足らず、地面にもぽたぽたとこぼれ落ちはじめた。

田を見ると、敵意が伝わってきたが、身体を動かす気力もないらしい。虫の息だ。

「さあ、そいつを食べたまえ」

意味がわからない。食べる？ 何を？

×××が戸惑っている間に、隣にいたキメラがベッドの上に飛び上がった。その姿に先程までののんきさはなく、完全に『キメラ』になっている。

制止することもできず、キメラが狼のはらわたに突っ込むのをただ見ていた。

狼は最後の力を振り絞り、精一杯の慟哭を吠えたが、まるで意味がない。

キメラが嚥下する音が聞こえはじめる。

それを聞いて、なぜか　　の口の中に唾液が溢れた。次から次へと湧き、こりえきれずに一度ごくり、と呑みこんだ。
おじさんの声が再び木霊した。

「どうした？ 君も食べないのか？」

驚愕の言葉だった。自分も食えど？

だが、なぜか腑に落ちる。田の前の狼が、『ちそうにしか見えない。

「人はパートナーの影響を受ける。ならばキメラの食欲もまた人に影響を与えるのだよ。もつ一度言おう。食べないのかい？」

夢遊病患者のような足取りで、ベッドに一步近寄った。

狼の半死体を見る。まだ息があるのか、それとももう死んだのか。手を伸ばし、狼の瞳を抉った。

ぐりゅうと音がして、目玉と赤い紐のようなものが持ち上がる。

それを口に含んだ。
キメラがどういった存在か、ようやくわかった。

2・1 クラスマイトの竜と竜殺し

「えへ、今月で一年生も終わらへ来月から二年生になるわけですが」

歩達は学年主任の有難いお言葉を拝聴していた。

場所は屋外のグラウンド。初春の日差しがほのかに身体を温めてくれて気持ちがいい。学年主任の間延びした声は耳触りるのが欠点だ。

「パートナーとはへ、人生のへ友でありへ、唯一無二のへ友人でありますへ、生涯のへ親友でありますへ」

歩にとつては特に放置すればいいだけで、立つたままなのが面倒だなどしか思わなかつたが、隣のパートナーはそう思わなかつたらしい。

三白眼で話しかけてくる。

「歩、似たような表現を臆面なしに連発できるのは、最早才能だとは思わぬか？ 恥という概念を自覚した者にはできない所業だろう「少なくとも、俺にはできないな」

肩に乗ったアーサーは、不満げに鼻から炎を噴出させていく。

早々に酔いつぶれた日の翌朝、起きてきたアーサーは普段と変わらないように見えた。開口一番に夕食を逃したことを嘆き、歩に起

「さなかつたことを責め立て、類がアーサーの分を残していくといつとひとつといなくなる姿は、傲慢で身勝手な、らしい姿であった。ただ、歩の中で反感が減つた。対応も自然と緩やかになつていてのが自覚できた。

アーサーは続けた。

「時は金なりとも言ひが、時を無意味に過ぐさせるかような蛮行は、文字通りの暴挙である。何故あのような行為を許すのだ？」
「気持ちはわかるけどな。こういう慣習も重要なことだつてあるさ」「そういうなあなあで済ませよつとする姿勢こそ、あやつのような者をのせざらせる要因である。人のそつした悪習を直視せねば、いかなる問題も解決には至らぬ」
「かもしれないな」

アーサーは更にヒートアップし始める。声も大きくなり、周りにいる生徒の中に、じちらをちらりと覗う人が現れ始めた。

「そういう部分だ。我的言葉にかもしれない、などと答えるからしてダメなのだ」
「すまんな」

ため息をつくアーサーの姿は、いつになく皮肉に満ちていた。

「すまんな？　その言葉は不敬の極みである。我的言葉の深奥を何一つ理解しておらぬ。その言葉に何の意味があるのか？　軽々しく返答するなど、至宝を赤ん坊の玩具にするが如き愚行。不敬の意味すらわかつていないのでないのではないか？」

「ここまで来ると流石にうざい。」

「不敬不敬つてそんな言ひつなよ。一応パートナーだろうが」

アーサーがふんと鼻で笑つた。

「パートナー面したければ、もつ少しどうにかしてからいい。その貧相な身体をどうにかするか、頭を人並みにしてくるか。竜の叡智までは求めんぞ？ 簡易いことであろう」

「ちつこい身体して何言つてんだ」

「田に見えるものでしか判断できぬとは、浅慮にも程がある。だからお前はダメなのだ」

キレた。

「そうこうお前は何できんだよ」

「我にできぬことなどあるわけあるまい？」

「そんな大口叩くなら、たまには眞面目に戦えや！ 今度の実技試験とかいい機会じゃねえか。お前なら簡単だろう？」

「ほざいたな！？ なら我がもし相應の役目を果たしたなら、何かしてもらおうか」

「なんでもやってやるよ。やれるもんならいつてみな」

「つねれことよ」

鐘を思わせる甲高い声がした。

声の方を向くと、そこには少女がいた。その少女を見て、アーサーがびくっと肩を震わせた。

「今、一応授業中なんだけど」

見覚えのある顔だった。

整った眉を不機嫌そうにひそめ、小さな口をとがらせていた。燃えるような暗赤色の髪をうなじの辺りで一つに流しており、腰ほどまで伸びている。どこか幼さの残る風体に、吸い込むような漆黒で大きめの瞳が可愛らしい。居並ぶ同級生より一つは年下に見える。

しかし、その実態は大きく違う。

彼女は歩とアーサー双方から返答がなかつたからか、再び口を開いた。

「別に聞きたいと思っている人もいないだろ？けどさ、万が一聞いている人の邪魔にはならぬよ！」すべきでしょ」

「『めん、平さん』

「同じ竜使いとして、節度ある行動をおねがい」

彼女の名前は平唯。

歩とは違う、本物の竜使いだ。今は傍にいないようだが、彼女のパートナーは歴とした竜である。余り見かける機会はないのだが、彼女の竜は紛うことなきAランク生物だ。

ちらりと相方の姿を見ると、何やら複雑な態度だった。怯えているところには堂々としており、嫌悪感をむき出しつけているかというと、それもまた違う。

ただ避けているようだった。

他の竜を苦手とするアーサーにとって、竜使いである誰もまた苦手な存在なのかもしれない。

唯は、すねるように口をとがらせたまま続けた。

「本当、迷惑よ。パートナーの躾がなつてないんじゃない？」

その言葉に、アーサーがぴく、と反応したのがわかつた。先程まで唯に対して避けるような態度だったというのに、表情を一変させ

た。

手を伸ばして抑えようとしたが既に遅く、アーサーは飛び立つた。
唯と田線の高さを合わせて、アーサーが言った。

「なんだ小娘？ 賢とは我を馬鹿にしておるのか？」
「しゃべれるだけのちつこいなりした竜未満はペットみたいなもん
じゃん」

唯の言葉は疑問ではなく断定だった。アーサーの鼻から炎が漏れ
だすのが見えた。意識して出して居るのではなく、完全に忘我した
ときの癖だ。

「ちつこいなりとはどっちのことか？ 中学生の分際で何故ここに
いる？ 帰れ」
「は？ 立派な十七歳なんだけど
「年齢詐称もほどほどにしろ。狼少年の末路は知つておる？ も
しや童話も読んだことがない位の年か？」
「決めつけないでくれない！？ そんな口叩くのは私の頭より大き
くなつてからにして！」
「お前でのかい顔の話はしていい！
「私の顔はそんなでかくないよ！」

むしろ小顔に分類されるであろう少女は、顔ともども真っ赤に燃
えあがつており、止まりそうにない。アーサーを止めようにも、そ
の剣幕が自分に向かつてきたら余計面倒になることが分かり
切つてしているので、手が出せない。周りの喧噪はどんどん大きくなつ
てきていたが、一人は気に留めそうになかった。

「つるせえ小娘！ わつわと幼稚園に戻れ！」
「黙れチビ竜！」

「黙るのはお前らだ」

一人と一緒に拳骨が見舞われた。

「コツ、という良い音がして、思わず自分も頭を押さえたくなる。アーサーはふらふらとし始め、唯は頭を抱え込んだ。唯は涙目で言つた。

「つ長田先生！ 私はこの竜を止めただけです！」

「何にしろ結果的に騒いだなら同罪だ」

「ふん」

「偉そうにしてるがお前が主犯なのは変わらないぞ」

拳の主は歩達の副担任である長田雨竜だった。まだ二十代なのだが、黒髪の中に白髪が混じっている。百八十センチを超える長身から振り下ろされた拳には迫力があった。

年代の近いのもあり、他の教師よりは考え方や感覚が生徒に近いのだが、それでもこいつって締めるとこには締めてくる。

「水城、お前もパートナーを止めろ。一番扱いなれてるのはお前だろ？」「元気！」

「すみません」

矛先が歩にも向いてきて、ほとんど反射的に謝った。

雨竜は謝る歩を見た後、未だにいがみ合ひの唯とアーサーを斜め見して言つた。

「とりあえずお前ら。退場」

連れて行かれた先は、グラウンドから入ってすぐのところにある校舎の一室だつた。

入つてすぐに、直立するように言われた。並びは、唯、歩、そして置かれた机の上にアーサー。

「お前らで、高一にもなつたんだから自制しろ。分別つつもんを理解してくれ」

「すみません」「ふん」

鼻を鳴らしただけのアーサーに視線を合させたが、雨竜は何も言わなかつた。

「色々理不尽な無駄があるのはわかる。確かに無意味で退屈な演説聞くのは面倒だが、それに無駄に抵抗するよりさつと流した方がいいことがあるのを学んでくれ。説教するのは苦手なんだから、私にもうこんなんことさせんな。わかつた?」

「はい」「ふん」

「アーサー。ふん、は返事にならない」

「わかつた」

雨竜はざつくばらんな口調に似合わず、一人称は私だ。一時期男好きなのではといつ噂が出回つたが、林間学校での深夜の野郎トーグを披露した結果、少なくとも男子生徒が同性愛者扱いすることはなくなつた。

唯の様子を覗うと、無駄に抵抗するアーサーを睨んでいた。雨竜が疲れたよつにため息をついた。

「お前らで、明日の学期末模擬戦のトリ務めんだから、仲良くしろとは言わないが喧嘩腰はやめてくれ。醜態さらすのは学校側とし

ても痛いが一番はお前らだぞ？」

「私は相手に応じてです」

「相手によつて対応を変えるなど低俗に過ぎぬ」

唯のアーサーを見る視線が更に鋭くなつた。雨竜の眉間にしわがあるのが見え、歩がアーサーを抑えようと手を伸ばすか迷つていると、コンコン、とドアがノックされた。

雨竜にどうぞ、と促されてから入つてきたのは担任の藤花だつた。その姿を認めて、アーサーが一瞬びくりと身体を震わせた。本当に苦手なようだ。

その後ろにも、巨大な姿が見えた。あれは

「キヨモリー」

竜だつた。唯が途端に顔をほこりばせ、その名を呼ぶ。隣でアーサーが更に身体を震わせたのが分かつた。

「長田先生、一人とも連れ出されたと聞いたのですが、何をしたんです？」

「いえ、少し言い合いをしていて、迷惑になつてていたので。私が説教しておいたので大丈夫ですよ。な、お前ら」

じろりとこちらを見ながら、雨竜が言った。歩はこくへくと頷いて返す。

返答せよこくへく、唯が藤花に尋ねた。

「先生、キヨモリ大丈夫でしたか？」

「ええ。軽い風邪でしおつて。明日の模擬戦にも出でていことのことです」

「本当ですか！？ よかつた」

「ええ、保健室の先生は大丈夫、と言つていましたから

どうやらキヨモリこと彼女の竜は保健室に行つていたようだ。唯がほつとしている様子を見て、アーサーに絡んできたのは、苛立つていたからではなかろうか。

キヨモリは、藤花の後ろからのしのしと唯のところまで歩いてきていた。アーサーとは比べ物にならない巨躯はこの教室にはおさまりきらぬようで、天井で頭を擦りそうになつていた。

唯の隣まで行くと、ぼう、と鼻から炎を漏らした。アーサーと似たような癖だが、まるでスケールが違う。

「寝惚けてるなー、身体の調子は大丈夫？」

唯が嬉しそうに言葉をかけると、キヨモリは大きな首を下に伸ばし、唯の肩口あたりで制止させた。

それを見て、唯はキヨモリの喉元と額に手を伸ばし、上下からさすり始めた。途端にキヨモリは目を閉じ、リラックスした様子で頭を委ねていた。尻尾が時折左右に振られ、地面を強烈に叩いている。それを見た歩はといふと、地面を叩いた時の力強さと、鈍く光る爪と大木のようなふともも、そして今は折りたたまれてはいたが、広げるとこの部屋が占領されてしまうような翼をじっと見ていた。今まで幾度か見たことはあったのだが、いざ模擬戦が近付くと印象が変わつてくる。

この竜が学期末のお披露目会を兼ねた模擬戦の相手になることを知ったのは、一週間前のこと。それ以来、この竜を目の当たりにすると気が重くなってしまう。

だが、隣のアーサーは気が重くなるどころの話ではないのだろうか。あれほど避けてきた竜が隣にいるのだ。先程も身体を震わせて

いるのが見えた。

ちらり、と相方の様子を覗いた。どこか拳動不審だつた。背筋を伸ばし、前を向いて立つたが、時折ぴくぴくと震えているのが見える。時折電流を流されているような感じだ。

早くこの場を去つたほうがよそうだ。

歩の内心の葛藤をよそへ、雨竜が言つた。

「ま、そういうことだから。お前ら、明日は分かつてゐるな?」
「はい」「はい」
「……ならいい。教室に戻つていいくぞ」
「いえ、少し待つてください」

「」で、藤花が割り込むよつて言つた。歩としては、早くこの場から離れたいといつたのに、もどかしい。

「一度良いですし、『竜殺し』について言つておいた方がいいでしょ?」

『竜殺し』

歩にとつては非常に遠く感じるが、実は身に迫つた危険極まりない話だ。アーサーの急変のことほきがかりながら、これも捨て置けない。

「コースで見ましたか? 『竜殺し』については勿論知つていますよね?」

歩は「べつと頷いた。

『竜殺し』とは、意図的に竜を殺した人、魔物、パートナーのことを指す。竜の身体はその強力さ故に様々な素材となる。牙や爪はそのまま刃として使うことができるし、皮膚を加工し身に纏えば、その堅牢さは折り紙つきだ。血液や内臓にしても、最高級の滋養強壮剤として使われるなど、竜の死体一つの価値は公務員の生涯収入を上回るとさえ言われている。月に一回は闇取引の摘発がニュースとして流れる位だ。

また、竜使いが憎悪の対象になることが多い。『貴族』とまで言われる公私問わぬ特権の数々と、その増長はひんしゅくを買つこともなくない。

つまり、竜を狙つものはない。

だといふのに、実際竜使いに被害が出ることは余りない。

それは竜の常軌を逸した強さにある。殺せるものが少ないので、竜を殺した者には憎悪と憧憬が入り混じつたあだ名、『竜殺し』が与えられる。

「報道の通り、『首都幼竜殺し』が出来きました。十年前から未成年の竜を対象として犯行を続けている竜殺しです。つまり、キヨモリさん、アーサー君、両方が対象となっている可能性がある、ということです」

「『幼竜殺し』の件は学校にも、伝わってきてる。私達教師陣も氣を配つておくから、お前達も気を付けておいてくれ。じゃあ、帰つていいく。もづ終わつてるだろ？』、教室に戻つてくれ

『雨竜の声がやむのと同時に、重苦しい声が聞こえてきた。

「それだけか？」

アーサーだ。顔を横に向けてみると、いつになく真剣な表情をしているアーサーが言った。先程までのじやれあつていた様子も、キヨモリの姿を見ての震えもない。

アーサーがもう一度言った。

「それだけか？自分達を狙う馬鹿者がいるけど、各自自分で気を付けておけ。一応教師も見ているから、とは間の抜けた話ではないか？ やる気があるのか？」

アーサーの強い口調というのは聞き慣れたものだが、これほどまことに真剣味に溢れるものは余り聞いたことがないようになつた。

雨竜が答えた。

「それだけだ。今回の『竜殺し』の特徴とか、被害者の共通点とか、全く情報はない。ただ気を付ける、とだけだ」

「お粗末だな」

「大丈夫です！ 私とキヨモリは『竜殺し』のときには負けませんから！ むしろ捕まえてやりますよ！」

唯は勢いよく言つた。隣にいるパートナーの絶対的な力を考へると、歩には虚勢には聞こえなかつた。むしろ、例え竜殺しだろうと、この竜を倒せるものがいるのかと考えてしまつ。

「まあ、そんな感じだ。いつもできるだけお前らから田を離れなさいから。アーサー、頼む」

それだけ言い、その場は終わつた。ふと隣に田を向ける。

『竜殺し』のことなど気にも留めず、パートナーの無事を確かめて顔をほころばせている唯の隣で、アーサーは何か深刻に考え込むように顔をしかめていた。

『竜殺し』といえば、アーサーの天敵であり、ひいては歩の命を脅かす存在ではあるのだが、歩には妙に実感がわかない。ニュースで聞いた程度の存在でしかない『竜殺し』に実感を持つのが難しいのだ。

それはアーサーも同じはずだ。

何故これほどまでにこだわるのだろうか？

「お前もわー。あんな煽ること言つくなよ」

あの後、歩達は明日に備えて軽い運動をした後、家に返された。運悪く類は残業を承つたらしく、夕食は適当に買つてきたもので済ませた。アーサーは少し物足りなそうではあつたが、料理をするのは面倒だ。

後片付けも終え、風呂に入り、後は寝るまでだべるだけ、といったところだ。歩はソファのせもたれにだらしなくもたらかかり、アーサーは専用の籠で横になっていた。

「明日の対戦相手だぜ？ それもあんなバカでかい竜の。無駄に敵意ぶつけられるこっちの身にもなつてくれ」

「身体の大きさで言えば、幾度もやり合つてきた巨人と変わらぬであろう？」

「相手竜だもん。一度もやりあつたことないしな」

キヨモリは規格外なため、一度も模擬戦に出たことはない。実際に戦っているところを見たこともないのだ。嫌な想像ばかりが膨らむ。

「ふん、まだ戦つたことのない相手に臆するなど軟弱者の思考である

「こぞ相手の巨にするときつこつて。巨大な竜だぜ？」

それに、アーサーをあの竜の前に置くことは躊躇われる。口にはしないが。

「我もまた竜であるぞ」

「……どうするかねー」

「我を無視するとはい一度胸だ」

アーサーは身体をむぐりと起き上らせ、歩を非難の由で見てきた。そのまま何も返さないでいると、アーサーは語氣を強めて言つた。

「なんと霸氣のない」とよ。もう少し欲を持つて臨まぬから万夫と呼ばれるのだ

「俺初めて聞いたぞ」

「将来を左右する岐路にて、己を賭けようともしないものは万夫と言つほかなかろ」

明日の学期末模擬戦は、ただの模擬戦ではない。教育委員会、企業、大学などから多くのお偉いさんがやってきて観戦しに来て、由に止まつた人物をスカウトするのが目的だ。ここでの印象はそれこそ一生を左右する可能性が高く、皆一様に気合が入っている。

ただ、歩は余り興味が持てなかつた。

いきり立つアーサーに対して、歩はため息すら混ざつていた。

「どちらにしろ、お前が意欲をまるで持たないことは確かであろう

「俺は日々過ごすだけで精一杯なの」

アーサーが生まれたばかりのころは、歩も人並みかそれ以上に将来に期待を持っていた。なにしろ竜使いになつたのだ。しかもアーサーはインテリジェンスドラマゴンと呼ばれる知恵のある竜であり、世界のヒエラルキーの頂点に君臨できる可能性すらあつた。

しかし、半年がたつ頃には消えた。アーサーはほとんど成長せず、竜としての脅力を発揮できそうにもなかつた。となると、後に残るのは周囲の失笑の視線と、竜使いとしての歩にとつては有難く無い特権の数々だ。逆効果にしかなつていない。模擬戦での特別扱いなどはそれの最たるものだ。今度の模擬戦でなまじ種族が竜であるからと、本物の竜であるキヨモリの相手をさせられるようになつたのなど泣きたくなる出来事だ。

そうなると、一度期待を抱いた分、逆に消えさつた後に残る失望感は尋常ではない。下手な希望など思い浮かべるだけ馬鹿らしい。

アーサーは大仰にため息をついた。

「折角、我も力を貸そうといふのに。それではやりがいがないわ」「あれ？ 本当になんかやってくれるの？」
「ああ。賭けもあるからな。忘れてはならないだろうな？」

確かに今日の集会で、唯にどがめられる直前にそんなことを言った覚えがある。

「本気にしてたんだ」

「無論。我的智謀の前に、かよつたな雜種の竜など敵ではないわ

根拠のない自信を語らせると、アーサーに勝てるものはないのではないかろうか。強がりもそこまでくれば立派なものだ。

そこでふと竜殺しのことを思い出した。

藤花と雨竜から聞かされた時、歩も、唯も、キヨモリも余り実感がわかなつたのだが、アーサーだけは反応していたように覚えがある。キヨモリにあれだけ拒絶反応があつたのに、その場で質問し

た位だ。

「そういうや、竜殺しに興味示してたけ、どうして？　いや、自分が狙われてるかもって言わると、確かに気にはなるけどさ」

アーサーは不意に表情を引き締めた。本当に表情が豊かなやつだ。

「気になつて当然であろう？　竜殺しなど、この世にあつてはならぬものだ。むしろ尊ぶべき竜を狙う不届きものに憤りを感じぬ方が愚かである」

「まあそりゃ そらなんだけビタ」

「そんなことより、明日のことだ」

不意に、アーサーが飛び上がった。必要に迫られていないのに飛びるのは珍しい。

そのまま歩の顔の辺りまで飛んできた。

「明日はあの小生意氣なチビと雌雄を決するときである。何としても勝つぞ」

「つつてもねえ」

相手を思い浮かべる。

本物の竜とそのパートナー、キヨモリと雌。
勝てる見込みは少ない。

「何を情けない顔を。我が本氣を出すといつておるのだ。歓喜にむせび泣き、ひれ伏すといひあつ」

「何を偉そうに」

アーサーの小さな手を掴み、人差し指と中指の間に力を入れる。

そこは竜の急所の一つだ。小さな力であっても、じびれるような痛みが全身を駆け巡る。

口から氣の抜けた音を漏らし、ソファの上にぽとっと落ちた。顔が面白いことになっている。

転がり落ちたアーサーを放置して、歩は歯磨きをしに洗面所に向かつた。

鏡を見ると、苦笑を浮かべている自分の顔が写る。少し気楽そうに見える。

無駄なアーサーの飛行も、歩の緊張を紛らわせる意味はあったのかもしれない。

「そ、それじゃ私は移動するね。先生達も、色々接待をせられて大変なんだ！ そ、それじゃ
「ありがとうございました」

別の学年担当の女教師が慌てた様子で去っていった。どうも竜である歩とアーサーの扱いに困っていたらしく、何度もどもっていた。歩はそうした対応は慣れたものだから、得にどう思つこともないが。

歩は、一息ついた。

場所は控室。大きな円形の建物の中の一室で、教室程度の広さがある。無造作にベンチが置かれ、数人が思い思いに過ごしていた。共通していることはその服装と武器を持っていること、そして緊張で顔を強張らせていることだ。向かって反対側右端の漆黒の戦闘服の具合を確かめようと、生地を伸び縮みさせている。その脇には、緊張を紛らわせようとなにやらパートナーに話しかけている女生徒がいたのだが、そのパートナーたる一角獣も緊張しているのか、神経質そうに鼻をぶるぶる言わせていた。今にも後ろ足を蹴りあげそうで、近寄りたくない。

歩はというと、身体にぴったりと張り付いた真新しい戦闘服になじめず、居心地の悪さを感じていた。というのも、歩の戦闘服は少し系統が違うのだ。竜使い専用の礼服も兼ねているものであり、妙に仰々しい。金糸がところどころにあしらわれ、肩にはそんなに必要ないろいろうといふほど、突き出た肩パットが入っている。触った

感じはなめらかで、ものすくべ上質なのはわかるのだが、どうも馴染めない。

これは模擬戦のトリを務めるため、強引に藤花に渡されたものだ。『お偉いさんが来るから着てください』と言われ渋々袖を通したのだが、竜使いであるが故の特別扱いは、どうしても気恥ずかしさを感じてしまう。

「アーサー、これどう?」

「ふむ、馬子にも衣装と豚に真珠の中間だな」

「つまり似合つてないと」

「そもそも服が悪趣味だ。素材としてはいいものだろうがな

相変わらず容赦がない。周りの目も心なしか冷たく移り、居心地の悪さは増す一方だ。槍が使ainれたものが許可されただけ、まだマシなのかもしれない。身長よりも長い代物だが、手足のように扱うためにはやはり手に馴染むものがいい。やはり穂先は外され、棍棒と化してはいたが、それでも頼りがいのあるもう一つの相棒だ。

近くにあつたベンチに腰を下ろした。隣には田を閉じ身体をゆつたりと伏せているアーサーがいる。

「落ち着いてるな」

「お前こそ。相手は団体ばかりでかい若い竜であるぞ? 気になつていたのではない?」

そう言われてみると、確かにそうだ。いざ明日の朝を迎えた時、妙に胃のふちが納まつた感触があつた。腹をくくるとはこういうことだらうか。

「なんか諦めがついたのかな」

「ふん、なんにしろ下手な緊張が抜けたのであれば、それに越した

」ではない。戦に臨む者をして、気楽すぎるのも下策だが、身体をしゃうほこばらせるのはそれ以上に下策」

「お前戦の経験あつたか？」

「我の想像力はお前には理解できん」

軽口を叩いていると、妙に意識がはつきりしてくる。手元の棍棒をころころころがすと、それがいつもよりスローモーションに感じられた。

軽く振るおうかと立ち上がった時、声をかけられた。

「あら案外落ち着いてるのね」

唯だった。後ろにはキヨモリの姿もあり、周囲にいた同級生の顔に動搖が走っていた。キヨモリには専用の部屋が与えられており、模擬戦でも出てくることはないので、こうして近くでお由にかかる機会は少ない。初めて見た由の前の巨大な竜に圧倒されているのだろう。

当のキヨモリは「う」と、大人しく唯の後に従っていた。大きな身体を器用にあやつり、物をひっかけないように丁寧に振る舞っているのも、以前見た姿と同じだ。竜ということを抜きにしたら、意外と穏やかな性格をしていそうだ。

キヨモリから視線を外し唯の方を見ると、丁度唯も歩に視線を向けているところだった。しげしげと観察するように眺めてきており、あまりが悪い。

「キヨモリを由の前にしているのに、随分な余裕ね」

「ふん、我を見慣れておるこやつがそんな殊勝なタマか」

「ちびつことはいえ、曲がりなりにも竜つてことかな？ なるほど。」

そのチビ竜 자체は苦手みたいだけだ

「これは武者震いというやつだ」

唯もまた歩と似た衣装だ。違うのはスリットの入った短めのズボンに、長めのハイソックスをはいているところ位だろう。脇には、模擬戦でみゆきが使っていたものと似た常寸の剣が差さっている。それにも様々な意匠がこしらえられており、唯はどうやら武器に関する改まつたものを使うようだ。

視線が自分の腰辺りに向かつてることを察したのか、唯は口を開いた。

「ああ、どうせ私がメインで戦うことはないだろしね。別にいつかなーと」

「自分は戦力外であることには自覚があったのか」

「キヨモリの前に、あなた達二人がどうこうできるとは思つてないだけ」

唯はキヨモリの首に手を伸ばし、誇らしそうに撫で始める。アーサーの挑発にも乗つてこない辺り、強い自信が覗われた

そのまま唯がパートナーを撫でる姿をぼうつと眺めていると、部屋の中にどよめきが走ったのに気付いた。

「ふむ、なかなか立派な竜であるな」

声はキヨモリの後の方から聞こえてきた。唯に促され、キヨモリがすっと身体を動かすと、姿も見えてくる。

声の堅苦しさとは対照的に、意外と若い男の姿だった。歩達と違う変わらないのではと思うが、歩には見覚えがない。身につけているのは、フォーマルなスーツであり、磨き上げられた皮靴が眩しい。このままパーティーにも出られそうな服装だ。

男はキラリと視線を合わせたまま言った。

「なかなかに素晴らしい。主にも忠実。翼も大きい。『竜は飛んでこそ竜』というが、十分にその役目を果たしそうだ。市井にありしあとは思えぬ格式高さだ」

「あの、どなたですか？」

唯がきょとんとして尋ねた。唯の知り合い、といふわけでもないらしい。

そこで男の視線が唯に移った。驚きに口を開いてくる。

「私を知らぬというか？」

「ごめんなさい、知りません」

男が顔をしかめながら、隣に控えていたものに向かって唇を尖らせた。よく見ると、それは歩達の副担任である雨竜だった。隣の男のものとは比べるまでもなかろうが、なかなか綺麗なスーツを身に纏っている。

「おい」

「すみません、説明しておきましたでした」

雨竜はしつと答えた。慇懃ながら、それ以上しゃべる気がないようだ。

男は不満そうにながらも、皿の紹介を始めた。

「私は中央第一竜学校に籍を置く、ハンス＝バー＝レである。先の高校生全国大会にて飛翔部門第七位になりしパートナーを所有するのですが、知らぬのか？」

「ごめんなさい、知りません」

そんな細かいこと知らなくて当然だと思つたが、『竜』といつ単語は気になつた。

つまりこいつも竜使いで、おそれく貴族と呼ばれる連中なのだろう。

う。

唐突に「ぱさばさ」という音が耳に入つてきた。ハンスの後方から聞こえてきたそれは、すぐに近付いてきたかと思つと、強烈な風をもたらしながら地面に着地した。

翼が大きく、キヨモリと比べれば幾分貧相な身体をしており、前足がなく、後ろ足はそれなりに発達したものがある。いわゆる翼竜に分類される竜だ。

アーサーをちらりと見る。やはり辛そうだ。早く御退去願いたいものだが、それはできやうにない。

「これが我的パートナーである。ナリマシヒ。全国七位の竜であるので、相応の礼を持つて見るよつ」

はあ、としか言いようがなかつた。

「それで、何故ここにいらしたのですか？」

唯の声にいくらか苛立たしさが混じつていたが、ハンスはおお、と思いついたように言つた。

「我もそなたらの戦を見るに、予め知らせておつた方がいいのではと思つてな。そう思つだらう? 感謝しましたまえ」

意味がわからない。割と本氣で。

戸惑つていると、雨竜が補足した。

「Jの方は、来年から中央第一大学に行くことが決まっています」

中央第一大学とは、世界で最も優れた人材の集まる最高の大学と言われている。いわば、エリート中のエリートである。入学方法は、倍率百倍を超える試験を受けることだ。

ただ、別の方法もある。在籍者の推薦を受け、なおかつ竜使いであれば、面接試験だけで入学できるのだ。その倍率は一、一倍でほとんど通ると言われている。

つまり、彼は推薦してやつてもいい、と言っているのだろう。

「貴公ら一人は竜使いであると聞く。故に我的に止まることが重要なのはとと思ってこうして足を運んでやつたというわけだ。貴公らのような一般人であろうと、我は優秀な人材は相応の評価と栄華をもらう権利があると思っているのでな。無論、引き換えとして我への感謝と敬意は誓つてもらうのだが。当然であろう?」

先程から、はあ、としか返答のしようがない。なんといふか、全く別の生き物を見ている気がした。

と、脇にいたアーサーが飛び上がった。ぱたぱたと翼を振り、ハンスの正面の辺りまで飛んでいき、言った。辛そうではあったが、それでも威厳を含んだ面持ちだ。

「ハンスとやら、随分偉そうだが、貴様は何を成したのだ? 何を持つて自分を貴き者としているのだ?」

ハンスは目をこれ以上ないほど見開くと、アーサーの問いに答えず雨竜の方を見た。

「おい、これがもう一匹の竜か?」

「はい」

ハンスは眉根を寄せた。両手で頭をつかみ、世界の嘆き全てを背負つたかのように大袈裟に嘆いて見せる。演劇でも見せられているかのような感覚だ。

「貴様は無知か？　このよくなものを竜とは呼ばぬ。区分もE級であろう？」

「しかし、これから成長する可能性もありますので」

「はっ。初めから血は出るものだ。我ら貴族と一般人に差があるようには、竜とそれ以外には比べるまでもないものがある。そんなことを知らぬのか？　こやつはもはや竜などではない。ただのまがいもののカスだ。E級などといつ、この世でも最も低俗な存在の一つだ」

歩はぎゅっと強く拳を握った。いますぐ殴りつけたい衝動にかられるが、そんなことをしても意味がないし、誰も望まない。ハンスはため息をついた後、唯に言った。

「このよくなもの相手に何が見せられるか、かすかに期待させてもらおう。まあ、何も見せずとも、竜であることが確認できればそれでよい。では雨竜いくぞ。このようなまがいものは見ていいだけで穢れる」

ハンスは出ていった。ミシヒといふ名の翼竜も足を交互に出しながら後に続いた。

残されたのは、重苦しい雰囲気。一日前の駄菓子屋と、夜に母親から聞いたアーサーの内面を思い出す。

何をいいついかわからず、とりあえずアーサーをちらりと見た。

「ふん、つまらんやつめ

アーサーは、意外と大丈夫そうだった。引き続きどこか辛そうにしているのだが、ハンスに手荒な扱いを受けたこと自体にはまるで堪えてないよう見えた。口を開く余裕も残っている。駄菓子屋の時のように、無理をしているのかと様子を覗つてみたが、歩の眼にはわからない。

探りを入れてみる。

「アーサー？ 大丈夫か？」

アーサーはこちらを振り返り見た。不思議そうな表情を浮かべている。

「何が大丈夫か？ まさかあの馬鹿の言葉を真に受けたとでも思うのか？」

「いや、前の駄菓子屋のときはショック受けてたんじやないか、と思つて」

ふん、と鼻を鳴らした。

「純真な子どもらの言葉は多少重かつたが、あのような馬鹿の戯言、初めから聞くに値しない。我的言もまるで耳に入つておらぬようであつたからな。取り入れるべきものを選別できてこそやの竜である」「そうか」

正直なところ、歩には駄菓子屋の時と今のアーサーの差が分からなかつたのだが、それでもなんとなく大丈夫そうだ、とは思えた。唯が少し躊躇しながら、言った。

「そ、それなら、いいわ！ では、いい戦をしましょう」

「小娘には負けてやらんからな？ 負けた時の言い訳を考えとおけ

唯は鼻で笑いながら出でていった。キヨモリは唯が出口に近付いたあたりで気付き、慌てて出でていった。途中、尾でベンチをひっかけてしまい、盛大な音をたてたが、そのまま出でていった。

そそつかしく可愛らしい一面ではあつたが、少しひっかけた程度でベンチを転がしてしまつその膂力は、脅威だ。

これから、その竜と戦う
一段と氣を引き締めた。

2・4 竜との模擬戦

歩は薄暗い廊下を歩いていた。闘技場へと繋がる道の先から、光と熱狂が伝わってくる。

石床と靴がコツコツと音を立てている。一音奏でる度に、奥から届く光と歓声が強くなつていき、嫌が応にも緊張感を高まらせた。

肩口には、鼻から炎をもらしながら田をギラつかせているパートナーの姿。手垢のしみでいる棍棒を左手で握りしめ、鼓動の昂りを慰めるように息を吐いた。

「緊張しているのか？」

「少しね」

「良い塩梅だ。相応の張りを持たせて己を律せよ」

偉ふつた言葉だが、アーサーにとつてはこれが激励なのだけれど。これから苦手な竜と戦うというのに、アーサーには田頃との差異は見えない。いつものように胸を張つている。

頼もしく思いながらも、苦笑と共に返答した。

「お前も働けよ」

「応」

左足が、出口から差し込んでくる光の影を踏んだ。

一度息をすつてから、一步外に踏み出す。

踏み出た瞬間、全身を眩い光と怒号が包んだ。大気を震わせる振

動は腹の底まで伝わり、内臓から気分を高まらせていく。ちゃんと握りこんだ棍棒から、自分の鼓動が伝わってきた。

周囲を見渡すと、三百六十度観客がひしめきあつていた。ほとんどは学生だったが、一部ゆつたりと座席が配置されたところで、見慣れぬ姿がある。おそらく貴賓席であろう席には、スーツやドレスといった、歩には馴染みのない服装ばかりが見えた。その中に先程の馬鹿貴族、ハンスの姿もあった。おそらくキヨモリの品定めが目的だろう。だれも、アーサーのことなど見ていないように思えた。

すつと正面を見据えると、そこには対戦相手の姿。

「少し遅いんじゃない？」

「主役は遅れるもんぞ」

「覚悟を決める暇になつたであらう？ 負け惜しみの準備はできたか？」

「笑止ね」

アーサーは竜と対面しているといつのに、余り変わりはない。それでアーサーが相当の覚悟を持ってここに挑んでいるのだとわかり、歩は負けられないと思つた。

対戦相手を見る。

唯の姿は直前にあつた時と変わりない。歩のものと似た戦闘服を身にまとい、装飾過多氣味の剣を左手にだらりと垂らしていた。

その隣のキヨモリはといふと、少し変わった姿だ。

四肢の爪に黒革のサポーターを付けるまではいいのだが、何故か身体をぐるぐる巻きにするように拘束具が付けられている。特に、翼はその下で折りたたまれ、それのせいかキヨモリは心なしか苛立つてゐるように見えた。

歩の疑問を察してか、唯が説明を始めた。

「爪は勿論のこと、空を飛ぶことも禁止されたけど、ま、いいハンデじゃない？」

キヨモリを見やつた。

これほどの巨躯が高速で空を駆け抜け、その力をぶつけたら、歩などミンチ状になつてしまつだらう。それは確かに必要な措置だが、すこし悔しさも残る。

だが、気が楽になつたのは事実だった。

じくり、と唾を飲み込んだとき、拡声されて少しひび割れた担任の声が聞こえてきた。

「本日の最終戦を始めます。且、金的等急所は不可。悪質といひちらが判断した場合、没収試合となるので注意してください。時間は無制限、気絶、降参により勝敗を決します」

ルールは模擬戦とほぼ同じだ。

「両者、礼」

軽く頭を下げてから、すぐに上げた。

唯が数歩下がり、キヨモリが前に出てきた。苛立ちの混じった双眸が歩を捕えている。歩はそれを真っ向から受け止めるべく、腰を落とし両手で棍棒を構えた。

観客席との間に、膜のようなものが広がつていぐ。おそらく観客を守るためにもので、みゆきのパートナーである、イレイネと同タイプの能力持ちがやつているのだらう。

これで場が整つた。

一息深く吸い込み、一気に吐いた。

アーサーが飛び上がる。

「それでは、始め！」

「キヨモリ、行け！」

先手はキヨモリ。巨体で地面を揺らし咆哮を上げながら、驚くべきほどの速度で迫つてくる。前傾姿勢で突っ込んでくると、黒革で包まれた右腕を単純に突き出してきた。勢いはすさまじく、正面から受け止めると、棍棒のほうが折れてしまいそうだ。

軽く屈みながら、歩もまた前進した。相手の左脇の横すれすれを通りよに身体を流し、キヨモリの右腕だけでなく身体からも全身を避けさせる。さながら闘牛士のようにキヨモリをやり過ごし前に出ると、後方からはキヨモリがたてた轟音が響いてきた。

身体を半回転させて、キヨモリの様子を見る。

黒革を付けたはずの爪が地面に溝を掘りつけ、粉じんが巻き上がつていた。地面についた傷は、模擬戦で見たことがない深さだ。

やはり 竜。

段違いの力だ。

竜がこちらを向いた。ゆつたりと身体を回転させるその姿は、思つたよりも鈍い。

十分、つけ込む隙はある。

歩は、キヨモリが加速を付ける前に仕掛けた。勢いに乗られると、あの体重ではどうやっても力負けしてしまうし、歩の棍棒など弾か

れてしまいそうだからだ。

ただし、逆に考えると速度がなければ、キヨモリの巨躯は重りとしてのデメリットが強い。

案の定、突っ込んだ歩への迎撃は遅かつた。振るわれた左の爪を屈んで避け、柄の部分で全靈の一撃を差し込んだが。

まるで成果は上がらない。柄の先はほんの数ミリ程度しか入りこまず、キヨモリはただ苛立つていてるだけで、なんら痛痒に感じていない。ぶ厚い皮膚と筋肉が歩の棍棒を完全に上回っているのだ。

何事もなかつたように、キヨモリはぐるりとその場で回転を始めた。

一瞬戸惑つたが、すぐに狙いがわかり棍棒を左半身に添えるように構えたのだが、その上から襲ってきた衝撃は予想以上だった。振るわれたのは極太の尾。その太さ、しなやかさ、そして自重を使つた遠心力による一撃は、四肢での一撃よりも上かもしれない。

なんとか棍棒を間にさし込んだのだが、威力は尋常ではなかつた。耐える間もないほど一瞬で、真横に弾き飛ばされてしまった。すぐさま観客席との間に敷かれた膜に激突。膜が柔らかい分、衝撃は吸収されたのだが、それでも痛みで身体が動かせない。

わっと観客が湧くのが聞こえてきた。見世物になつてゐる氣分だ。

膜の上をずるりとすべりおち、全身で砂の味を分からされた。くらくらしつつも身体を起こすと、仁王立ちするキヨモリの姿が見えた。向かつて右には勝ち誇る唯の姿。

「降参しない？ キヨモリはこれ以上手加減できないうわよ

つまり、精一杯の手加減をしてこれか。

舐められている。

口に砂が入っているのも構わず、ギリと歯を噛んだ。

目前に刃、前傾視線のキヨモリ。目は真っ赤に燃えあがつてあり、今にもこちらに突っ込んできそうだ。

そんなパートナーに対し、唯はふとももの辺りを撫でながらなだめるように言った。

「飛べないのがそんなにストレス？」「めんね、我慢して」

キヨモリの苛立ちは飛べないのが原因か。自分はまるで関係ないのか。

歩は気合を入れるかのように腹から大声を出した。

「行くぞ」

「懲りないね」

すっと両足に力を込め、地を這いつぶしに駆ける。

応じるようにキヨモリが前に出てきた。唯は手を引き、後方に下がつて行つた。

歩の狙いはそこだ。

正面からキヨモリが迫り、歩もまた一直線に駆けるといつ、剣豪

同士の真っ向勝負のような形。

それを歩はただのワンステップで変えた。

愚直なまでに真上から振り下ろされた爪をあっさり避けると、そのまま脇を駆け抜けた。

視線の先は、だらりと剣を下げたままの唯。驚きで目を見開いている。キヨモリに比べ、彼女のほうがまだやりやすいに決まっている。不意を突けば、勝負をつけられるかもしれない。それが狙いだ。そのまま息をつかせぬよう、神速で棍棒を振るつた。

あっさり受け止められた。

両腕でしつかりと構えた剣で、真っ向から防がれたのだ。力を込めるが、唯の持つ剣はすこしづれるだけで、一方的には程遠い状態だ。歩と唯の力は拮抗していた。

「私も竜使いですから」

そうだ。人はパートナーとリンクしている。竜のパートナーたる唯に、相応の力が備わっていて当然なのだ。歩からしたら、戦闘に参加しないのが不思議なほどだ。

驚愕してしまったためか、意表をつかれ、さつと棍棒をいなされる。そのままたらを踏んでしまい、隙を晒してしまったのだが、唯は仕掛けで「ず」一歩引いていった。

ただ、一言告げてきた。

「キヨモリ、ブレス」

咄嗟に身体を投げ出そうとしたが、遅かった。

「がつ」

背中の中央辺りを、強烈になにかが突き抜けた。再度宙の人となり、今度は地面に鋭角に突っ込む。右肩から突っ込んだのだが、砂利でがりがりと削られるのが伝わってくる。

勢いがおさまり身体を動かせるようになると、よろめきながら立ち上がる。手をついたときに、右肩から腕にかけてみえたのだが、手首の部分からだけ出血していた。戦闘服の堅牢さが有難かつたが、晒されていた手首部分の皮は大部分がはげており、肉が見えていた。

ふつと視線を正面に向ける。キヨモリは大口を開けた態勢のまま固まっており、唯はその隣まで移動しているところだった。キヨモリの口からは薄く煙のよつなものが立ち上り、そこからなにかが放たれたのがわかる。

「空気の圧縮弾はどうだった？」

答えられない。なんとか立ち上がりはしたのだが、息がうまくできないのだ。肺を衝撃が突き抜けたせいだろう、ヒュー・ヒューとかされた音しか出てこない。

これが竜。

十分戦力になりうる唯は最小限しか動かず、あくまで基本は竜任せ。圧倒的な力を持つものはリスクを背負う必要はなく、ただ相手を受け止め、捻り潰すだけ。

最強であるが故にできる、最も安定して実力の差を決する戦い方だ。

片膝をついたままの歩に対し、唯が言った。

「降参は？」

歩は首を振る。

「仕方ない。キヨモリ、決めて」

再度キヨモリの突進。
再度同じ技。腕を振り上げ、振り下ろすだけのシンプルな一撃。
故に最強。

足が詰つじとをきかず、避けられそうにない。なんとか頭上で腕を交差し、せめてものクッシュョンと化した。

肉がわなないた。受け止めた力はあつさり突き抜け、頭に、首に、腰に、足に、そして地面へと次々と伝播。地面が陥没した。

額より少し上の辺りが切れ、目の間をつうと血が流れしていく。

なんとかその状態で持ちこたえた。竜の臂力を考えれば、それだけでも考えられない成果だ。

だがその状態から、竜が口を開けるのが見えた。

先のブレスを思い浮かべたが、避けようにも上から押さえつけられた形でなかなか動けそうにない。その上、なんとか真横にずれたところで、今の状態ではまともにバランスが取れるはずもなく、倒れ込んだところにキヨモリが迫つて終了。

絶望が頭をよぎったとき、アーサーの声が聞こえてきた。

「歩、突っ込め！」

頭上からパートナーの声。

ほぼ反射で上へ張り詰めた力を抜き、身体を屈ませながらキヨモリ側に身体を倒す。

避けるのではなく、捨て身で己の全力を込める。

「ああああああああああ！」

全身を振り絞り、ただ前へ。上から身体を抑えつけていた圧力がなくなつた瞬間、今まで経験したことがないほど、身体が加速した。歩を抑えつけていた力が、弦を引き絞つた弓のように作用したのだ。

矢たる歩はただ前に突き抜けるだけ。

棍棒の先をキヨモリの腹につきたてる。先程の一撃はまるで効果がなかつたが、今度はかなり奥まで入つた。様々な要因が重なつての、会心の一撃だからだろう。

プレスを放とうとしていたキヨモリの顎が上がるのが見えた。無防備に喉元が晒された。

この機を逃しては、歩に勝ち田などない。

キヨモリが後ずさつたため、棍棒を支えているだけで腹から得物が抜けて、それをそのまま上に跳ね上げた。丁度喉の辺りにぶち当たつた。

キヨモリの口を強制的に閉じられる。すると中で収縮していく暴風が荒れ狂い、口の中から目に見えるほどの風が漏れだした。

「ギヤアアオオオオオオ！」

「キヨモリ！」

唯がはつきりとつるたえていた。こんなことは初めての経験な
かもしない。なにしろ、この学校で唯一かつ特別の存在だったの
だから。

更に追撃をかけようと、かなり無理をさせた全身にせりに鞭打と
うとしたそのとき。

はつきりと、空気が凍るのがわかった。

「歩ー」

アーサーの声が聞こえてきたのは、歩が弾き飛ばされて行くのと
ほぼ同時だった。

爪の先が腹にめり込み、会場を覆う膜に再び叩きつけられる。柔
軟性のあるはずの膜が悲鳴をあげ、観客席に座った女子学生の皿と
鼻の先まで持つて行かれた。

腹には相当の鈍痛。骨にヒビでも入っているのではないかという
錯覚すら覚えた。今までのキヨモリとはまるで違う。

膜が序々に収縮し、会場内に押し戻されて行く。砂地に滑り落ち
ていった。鈍痛がやまない腹に手を当てながらビリビリと着地した。

前を向くと、そこには怒り狂ったキヨモリの姿。

その目には燃えあがるもののが見え、ギラつき、明確な意思を歩に
叩きつけてくる。

ぱちん、と音がした。

その身体を拘束していた黒革が次々と弾かれて行く。バチバチバ
チバチと加速度的に音は増し、最後の一音が響いた後。
ぱさ、と翼が広がった。

一気に会場が狭く感じてしまつよになつた。

まさか、飛ぶ気か！？

「キヨモリ！　だめ！」

唯の叫びは、キヨモリの羽音で消された。

一度、二度はばたくと、足が地を離れ、一気に飛び上がった。

上空で何度も旋回し、飛び回る。飛ぶ姿は、先程までのどこか鈍重な姿とは似つかわしくないほど、優雅でなめらかだ。膨大な質量を持つ生き物が自由自在に空を飛びまわるその姿は、種族の頂点にふさわしい。

これが……竜。

『竜は飛んでこそ竜』といひ、担任の言葉が脳裏をよぎつた。

「歩ー！」

少しづつとしていると、アーサーの声が響いてきた。

そういえば、アーサーは大丈夫なのか？　勇壮なキヨモリの姿を見て、竜を苦手とするアーサーは気が気がしないのではなかろうか。そう思い、アーサーを見る。

「馬鹿者！　我でなく、やつを見ろー！」

むしろ闘志が燃え上がっているようだ。竜が苦手ではなかつたのか。

だが、考えている暇はない。

疑問をよそに置きひとまず氣を取り直すと、キヨモリの姿が近付いているのがわかる。

咄嗟に身体を転がしその場を離れると、数瞬前に自分がいたところから暴風が襲いかかってきた。

一度身体を回転させ、片膝をついて起き上り、自分のいたところを見ると、そこには三本の大きな溝が走っていた。溝だけではなく、表面の土が削り取られているのは、指が完全に地面をもぐりこみ、手のひらがじきじきまで抉ったが故だろう。

背筋が凍った。

羽音を探る。音は上空からで、キヨモリはふたたび飛びまわっているのだろう。

先程から唯が叫んでいたが、聞こえていないのかまるで降りてくる気配がない。

上空で飛びまわるキレたキヨモリに、歩に何ができるのか。

「歩！ 唯！ 退け！」

雨竜の声が聞こえてきた。

同時に、キヨモリの身体に何かが巻きつくるのが見えた。

「中止だ！ ここは俺にまかせて退け！ もつそこで着く！」

まきついている半透明の綱の先は、観客を守っていた膜。そこから伸びた綱はキヨモリの身体を次々と拘束していく、飛行に支障をきたし始めたキヨモリが墜落し始めた。

指示に従い歩は逃げようとした。その前にパートナーの姿を確認しようとしたところ、逃げ始める姿が確認できたのだが、地面上に茫然と佇む唯の姿が見えた。

駆けよって腕を手に取る。唯は無抵抗で、完全に我を失っていた。そのまま入口へと引っ張つて行こうとしたとき。

咆哮が鳴り響いた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！」

キヨモリが咆哮と共に、全身の筋肉を振動させるのが見えた。翼を展開せようとしているようだ。拘束していたはずの綱は一息で無残に散らばされ、ぼたぼたと砂地に水たまりのようなものを作った。

キヨモリは、そのまま滑空。進む先は歩の方。

「つー」

咄嗟に喉を弾き飛ばし、巻き添えにせずにすんだのだが、歩はキヨモリの手に掴まれてしまつた。

そのまま地面を削りながら、キヨモリは着地。背中で地面を抉りながら、歩は必死でこらえていた。

止まつた時、完全に歩は磔にされていた。脇の下からしつかり掴まれており、びくともしない。

キヨモリの顔を見ると、瞳は自分に集中していた。口の中ではブレスの気泡。

完全に狙いは歩。

背中は地面で衝撃を抜けさせる」こともできず、拘束されたままでも満足に動けない。

受けられるはずも、避けられるはずもない。

あきらめるしかないのか。

唐突に響いたのは、アーサーの声。

「歩！　呆けるな！　前を見ろ！」

声がした方を向くと、アーサーが唯の顔の辺りで留まっていた。唯はなにがなんだかわかつていよいよ、眼が虚ろだ。アーサーは彼女を正面から見据えている。

何をしようとしているのか。

目端で、もう極大まで大きくなっているキヨモリのブレスが見えた。

もう時間はない。

アーサーは、いつものように響く低音の声で、いつになく慈愛の口もつた口調で言った。

「平唯。耐えろ」

ぼわ、と炎が巻き起こった。

それはアーサーの口から出でおり、それほどの力があつたのかと驚いたが、それが唯に向かってのものだとわかると驚愕した。唯の悲鳴が会場に響いた。

「きやああ！」

キヨモリの力が緩んだ。これまでいくら唯が叫ぼつとも、届かなかつたキヨモリが聞いたのか？

しかし、悲鳴が特別大きいわけではない。むしろキヨモリに向かつて叫んでいたときのほうが、声量としては大きい。

そこで気付いた。

パートナーだ。唯の危機はキヨモリにつながり、キヨモリの危険は唯に繋がる。命が繋がつてゐるからこそ、何よりも優先して届く声なのだ。

それで、キヨモリの注意が歩から消えた。

この機を逃してはならない。

棍棒を両手で握り、不自由な態勢から竜の手に見舞う。人差し指と中指の中間辺りには竜の急所がある。竜使いたる歩はそれを熟知していた。これ位密着して、じっくり狙えるのであれば、そこを正確に突くのが可能となる。

突いた途端、歩を拘束する力が抜けた。
すかさず棍棒を支点に抜けだすと、身体を起こし、態勢を立て直す。

腰を低く構え、両腕で棍棒を持ち、相手との間合いを測る。
万全の状態。

狙いは竜の首元。そこもまた急所だ。

「ウエアアアアアアアアアアア！」

的確に捉えた。

歩の巨人をも倒す一撃が正確に入った。竜の強固さは巨人を大きく上回るが、どうなるか。

ぼん、と何かが弾けるような音がした。

キヨモリの口にあつた圧縮空気が抜けた音だった。
竜は声にならぬ声を上げ、倒れた。

十一年前

「×××君、本日の食事だ」

「はい。食べるよ」

隣にいた自分のパートナーに許可を出した。×××の脇のあたりまで背丈が伸びたキメラは、牙をむき出しにする。

田の前には本田の生贊。翼の折れまがつた鳥型のパートナー。生贊を前にして、やる」とは一つ。

ぱりぱりぐぢやぐぢや「ぐぐぐ。

骨を碎き、肉を咀嚼し、血を嚥下する。

もう手慣れたもので、この程度の大きさなら、私とキメラの二人で十分もかからない。

今回は七分で済ませられた。

予め用意してあつたタオルでキメラの口をぬぐつた後、自分の口元と手を綺麗にする。

汚れたタオルをどうしようか迷つていると、キメラに変化が訪れた。

背中がばきばきと音を立てながら割れ田を作る。中からは血みどろの肉の塊が出てきて、二つに広がった。

そのまま大きく伸びていき、扇のよつな形を描きだす。それは今食べたばかりの鳥の翼に似ていた。食べた相手の能力を奪つたのだ。質量すら変化させる驚愕の能力だが、もう見慣れたもので、ただの

日常と化していく。

「それでは、これで終了でいいですね」

「ああ」

キメラの背中に再び割れ目ができる、中に翼が戻っていく。バキバキバキと音をたててはいるが、その顔に苦痛の様子はなく、もう慣れきったものという感じだ。最初の十度目まではキメラの能力に戸惑つたが、今はもうどうとも思わない。ただそうあるだけだ。

あいつさつと翼は背中に収納され、割れ目が閉じる。手にしたタオルで軽く拭うと、そこにはもう傷口すらなかつた。キメラは、手に入れた能力をこいつして収納し、自由にコントロールできるのだ。タオルを手にしたまま出口に向かつたといふ、『おじさん』の声が聞こえてきた。

「おつかれさま」

『おじさん』の声は、嘲笑の色を帯びていた。

初めてこの施設に連れてこられたから、三年が経っていた。

キメラは勿論のこと、心なしか×××の背丈も伸び、年月は順調に経過しているのが実感できる。二年間、全く施設外に出たことのないキメラでも年をとつてこるようつだ。

『食事』を終え、殺風景な施設の廊下を歩いていると、『おじさん』から声をかけられた。

「×××君、今日の講義はまた後日でいいかね？ 少し用事があつ

てな

作り笑いを浮かべて答える。

「いつも教えていただけているだけ有難いです。正直なところ、私も丁度仕事が溜まつておりましたし」

×××はこの施設内で、他の『実験動物』の一部を任せられるようになっていた。従順に従いつづけてきた結果、ある程度の信頼を得ることができたからだ。同じ『実験動物』の身ながら、×××はそれなりの自由と教育を受けられており、言つくなれば、牢名主といった扱いだ。

どうやら今日の講義はないらしい。知識を得るのは食事の次の楽しみなのだが、仕方がない。

あらがつても何も好転しない。それなら尻尾を振った方がマシだ。『おじさん』は、形だけ取り繕つた謝罪を述べた後、走つて正面の大きい出口から出ていった。

×××もそちらに用があるので向かつと、出口のドアをあけたところで『おじさん』と同僚が話しているのが聞こえてきた。直角に曲がった角の先にいるのか、姿は見えない。

「そういうや、×××に色々教えるみたいだけど、大丈夫?」

『おじさん』は豪快に笑いながら言った。

「ああ。でも大丈夫。パートナー喰いにまともな生活ができると思うか? あいつらは外に出てもいずれ耐えきれなくなり、襲いだすさ。そんな自覚もあるのか、抵抗する素振りもない」

「けど、闇討ちの方法だったり、戦術とか教えたりするのは流石に

危なくないか？ お前が被害者になつても知らんぞ

「大丈夫だつた。それにな」

見えなかつたが、『おじさん』の醜悪な笑みが頭に浮かんだ。なんとなくわかる。

「無抵抗なのも面白みがないだろ？ 希望を持たせた方が、絶望も深くなるつてもんだ。色々な事を知れば知るほど、自分の境遇に自覚が出る。そうした姿は、どうしようもなくみじめだと思わないか？ ただ淡々と動くモルモットより、苦悩する姿の方がそぞるもんがあるだろ？ 不死鳥を食つて臓腑を燃えあがらせていた時の顔なんて、最高だつたぞ」

「相変わらずの悪趣味だな」

ガハハという笑いが遠のいていく。その場を離れていつたのだろう。

そのままその場に立つていると、角の先から若い男が歩いてきた。おそらく、おじさんの話相手であつた彼は、×××の姿を見ると、ぎょっと身体を強張らせたのが見えた。

×××は作り笑いを浮かべ会釈した。顔を上げると、若い男の表情は凍つたままだつたが、何も言わずに隣を通り過ぎていいく。

先の角を曲がり、先程まで『おじさん』達がいたであろう廊下を歩く。

途中で が身体を擦りつけたが、軽く首元を撫でるだけで済ませた。

こんなことは驚くまでもないし、悲しむことではない。

この場から逃げられるとも、キメラの宿命を避けられるとも、自分達がまともな扱いを受けられるとも、思っていない。自分達は実験動物であり、キメラなのだから。

今日は『新入生』が来るらしい。

時折、新たな『実験動物』が増えることがあるのだが、×××はそうした新入生の世話を任せられている。

『おじさん』からの情報によると、新たな新入生のパートナーは×××と同じキメラだとのこと。パートナーが生まれた瞬間、捕まってきたのも同じ境遇だと言われた。名前は　　といいうらしい。

ただ、それを聞いたところで×××のやるべきことは何も変わらない。

時間の五分前になり、指定された部屋に向かう。真っ白な廊下をいくつか過ぎて着いた先は×××が二年前に連れてこられた部屋だった。

一分前に到着、そのままその場で待つ。廊下を挟んだ先にはシャワー室があり、そこには着替えや大量のタオルが置いてある。×××の役目は、血まみれになることも少なくない『新入生』の身づくろいを補助することだ。

突然、ドアが開いた。廊下側からはドアが付いているが、中からは隠しドアになっているのを経験からわかつていた。

出でてきたのは、ぱつと見少年か少女かわからないが、十一歳にしては大人びて見えた。

全身血まみれで、顔の表情もどこか虚ろだ。

足元にはパートナーと思しきキメラ。犬をベースに、背中に二つもりのような羽、尾が二股の身なりだった。とりあえず、話かけてみる。

「大丈夫？ とつあえず、身体綺麗にしようか。そしシャワー室だから、中に入る！」

反応がない。足元にいる のキメラはなにやらひがひを睨み、唸りはじめ、敵対心を露わにしていた。脇に控えていた×××のキメラも、威嚇するように唸り始める。

が、動いた。

いきなり飛びかかってきたのだ。

奇声を上げながら×××に迫り、足元のキメラも狙つてきている。×××はキメラを無視して、するりと身をくねらして避けた。

が反対側の壁に頭から突つ込み、鈍い音を立てたところに、首筋に手刀。おじさんの講義の一貫として武道も習つており、その中でこれも教わったのだが、×××の成功率はそれほど高くない。それでもなんとかなつたらしく、壁からずるりと落ちて行き、地面に突つ伏した。

ふつと息をついたといふ、悲鳴のよつなものが聞こえてきた。音のした方をむくと、×××のキメラがもう一体のキメラを締めあげているところだった。尻尾の蛇が身体にまきつき拘束していた。蛇の部分から赤く長い舌のようなものが出し入れされている。

とそのパートナーの無様な姿を見て、×××はため息をついた。

「はー、ロロアによかつた？」
「すみません」

温かいココアを手渡すと、
は申し訳なさそうに身を縮めて受け取った。

あの後、まだ氣を失つたままの をシャワーにぶしこみ、服を脱がせ、綺麗にした。同性なのが幸いした。

その後、氣を失つたままの の身体の湿り氣を拭いとり、多少てこすりながらも服を着せ、談話室に連れていった。

その間、 の小さなキメラは×××の大きなキメラが拘束したままだった。

談話室に寝かせて数分たつたころ、 は目を覚ました。再度襲い掛かつてはこなかつたが、警戒しているのは明らかだった。当然だ。狼狽しているようにも見えた。

それが無くなつたのは、 が×××のキメラに気付いたときだ。そこからは割と素直に応対し始めたのは、ある種の仲間意識が芽生えたからだろう。同じ『キメラ使い』に。

そこで、小さなキメラを解放し、 に渡した後、一通り状況を説明した。説明を終えて、ふと飲み物を出していないことに気付き、買って渡した、というわけだ。

は黙つてココアを飲んでいる。心なしかほつとしているようになつた。

「何か質問ある? できることなら答えるけど」

「あの、なんでもいいですか?」

「答えられることなら」

「あの、その、貴方の生き立ちを聞きたいんですけど」

意表を突かれた質問だったが、別にいいと思い、なんでも答えた。微妙に忘れている部分もあつたが、 はまあ満足したよつだつた。

×××が語り終えると、代わつて が話し始めた。

の場合は、孤児だつたらしく、一人で十二歳の誕生日を迎

えたとのこと。そこで生まれたのがキメラで、すぐに倒せられて今に至ると。

それだけでなく、自身の生き立ちに関しても話は及んだ。五歳の時に両親を亡くし、施設へ。施設の暮らしは随分辛いものだつたらしいが、明るく語った。

「通り話終えたところで、」は言った。

「僕達、仲間ですよね？」境遇も似てますし、パートナーも同じで

「そうだね、と×××は答えた。確かに少し親近感が湧いてきたところだ。自分の境遇を話したのも、仲間意識を強化したかったからかもしだれない、と思い始めた。

「僕、この後どうなるんですか？」

「多分、私と同じだろうね。色々な魔物やらパートナー喰わされて、能力手に入れて、データ取られて。おとなしくしてれば手荒くされないし、それなりに自由も『えられるから、そう悲観することもないよ。ここを出ることはできないけど。私の場合だとそんな感じ』

は尋ね込んだ後、尋ねてきた。

「外に出る可能性はないんですか？」

「できない。私の場合、戸籍も死亡扱いにされてるしね。」は

まだなつてないだらうけど、それも手続きだけの問題だから

「そうですか……」

「この施設内でその手続きの一端が行われることを×××は知っていた。流石にその仕事が回つてくることはなかつたが、『おじさん』に聞いたことがある。なんでも、その書類を提出したら、属してい

る組織が手続きしてくれるらしい。その書類の提出は、週末にまとめてやるとも言っていた。

は再び考え込みはじめた。×××が手にしたココアを飲み終えたところになって、ようやく口を開いた。

「あの、僕の服どうしました?」

「ここにあるよ。はこ」

血まみれになつた服を渡す。

自分の起じした惨劇を思い出したのか、身体をビクつかせながら受け取ると、中を探り始めた。上着の内ポケットに手を突っ込み、そこからなにやら取り出す。

それは のIDカードだった。本人の名前と性別、生年月日、そしてパートナーの名前が書かれており、自分の戸籍を証明するものだ。

「これ、持つてもらえないませんか? もう何の役割も果たせませんが、それでも持つていてほしいんです」

象徴みたいなものだらう。相手に自分が存在した証明を持つてもらつことで、相手との絆を深めると同時に、仲間意識も強固なものにする。

会つたばかりの自分にそこまで仲間意識を持つのはどうかと思つたが、これから的生活が不安で、仲間を作りたいのだらう。同じキメラ使いであることも、それを助長している。

まあ、落ち着いたところに返せばいいかと思い、受けとつてポケットの中に突っ込んだ。 は嬉しそうに顔をほころばせた。

「そういえば、まだ名前つけてありませんでしたね。×××さんのキメラは、なんて名前なんですか?」

「そういえば、まだ名前つけてありませんでしたね。×××さんの

「付けてない」

今に至つても、自分のパートナーに名前を付けていないのは自己位だろう。なんとなく付けるのが面倒で、それを求められることもなかつたため、なあなあで済ませてきた結果、×××のパートナーは無名のまになつている。

それを聞いて、　　は憤慨した。

「そんなのかわいそうですよ！　付けてあげましょ！」　僕なんて生まれる前から決めていたのに」「生まれる前から決めてたの？」

えへへ、と照れながら、　　は言つてきた。

「はい！　実はHDDカードにもつ書きちやつてるんです。待ちきれなくて」

呆れたが、自分が淡泊なだけか、とも思った。
これを機に名前をつけるのもいいかもしない。
自分のパートナーを見る。

キメラだ。

キメラに、名前などいるのだろうか？

その時、突然怒号が鳴り響いた。

同時に警報。電灯が赤い緊急用のものに変わった。

「あれ！？　なんですかこれ！？」

の困惑する声が聞こえてきたが、それは×××も同じだ。
避難経路がぱっと思いつかず、壁にかかった案内板に目をやつた

瞬間。

何かが崩れる音がした。

首筋に衝撃が走り、続いて全身が叩かれる。

意識はあっさりと無くなつた。

頬に冷たい感触がして、手を伸ばした。
そこにいたのは自分のキメラ。目を覚まさせようと頬を舐めていたようだ。

起き上つて目に移つた光景は、悲惨だった。
ところどころ怪しい炎が立ち上り、形のあるものは全て壊れてい
る。炎に焼かれてパチパチと弾ける音がしていた。炎以外に動く影
は見当たらない。

随分と呆けた後、ふと自分の身体を見回してみた。至る所から出
血し、どこが痛いのか分からぬ位痛覚が悲鳴を上げていたが、ぱ
つと見てわかる重い傷はない。

なぜ、自分だけ無事なのか。

はつと気付き、キメラを見てみると、全身血まみれだつた。特に
背中の傷は酷い。おそらく自分を庇つた時の傷だろう。能力を出し
入れするときに見せる、異常な復元力でも回復しきれていない。

「大丈夫？」

キメラはクゥーンと鳴いた。その声は悲痛なものが籠つていたが、
声そのものに濁りはない。×××に纏わりついているのだが、その
動きも健康そのものといった感じだ。知らない内に、随分と強くな
つていたようだ。

ひとまず立ち上がり、空を見上げてみた。

三年ぶりの夜空は、こんなときながら美しいと思った。

これから、どうするか。

外に出たところで、自分の戸籍はもうない。戸籍がない人がどうやって暮らしていくかなんて、全くわからないし、もし自分の戸籍が残っていたとしても、再び連れ戻されるのはわかっている。キメラ使いなのだから。

どうしようもない。

とりあえずその場を離れようと瓦礫の上に足をかけると、そこに、小さなキメラの姿があった。腹が裂かれ、目は白く濁っている。死んでいるのは明らかだ。

となると、も死んだはずだ。パートナーと人は、命を共有している。

ほんの数時間だけの関係でしかなかつたが、仲間のことを思う。最後のほうは随分と人懐っこい顔をしていた。

そこでふと思いつき、ポケットを探る。

そこには、のエロカードがあつた。

2・4・5 キメラと事件（後編）

「めんなさい」、とか呼ばせてたのに、キメラに怒鳴つけてないとか呟つきました。まじアホでした……ハア

3・0 幼竜殺し？

「なんだあれは！ クズに負ける竜など、竜ではない！ とんだ無駄足ではないか！」

ハンス＝バーレは憤慨していた。

わざわざ全国七位の実力を持つ彼が足を運んだというのに、そこにいたのは竜と名乗るのもおこがましいクズと、そのクズに負けるただの木偶の坊だったからだ。

会場で木偶の坊が暴走したところで落胆し、その場を離れようとしたパートナーの背に乗つたはいいが、いざ飛び上がって見えたのは、人に昏倒させられる木偶の坊の姿。

竜が人に負けるなど、あつてはならない。名目上、相手が竜使いであつたとはいえ、パートナーは竜とは名ばかりのE級生物である。そんなものは竜使いとは呼べない。

またがつた己のパートナーに視線を合わせた。

ハンスが乗つてもびくともせず、空を悠々と飛ぶ翼竜。全国七位の空戦能力を持つ竜。勇壮に翼をはためかせ、大空を駆ける王の中の王。

「これこそ竜なのだ。

あのような、雑種とは違う。あれは、全くの別物なのだ。

そう考へても憤りは収まらない。
忌々しさは増すばかりだ。

苟立ちを隠せずにいると、正面からなにやら飛行する物体が見えた。

よく見えないが、大きな翼ではばたいている。大きさは先程の木偶の坊と同じ位か、かなり大きめだ。

舌うちをして、喉を張り上げた。

「そこ！ 道を開けよ！ 我は竜であるぞ！」

正面の影は序々に大きくなっているが、まるで避ける様子がない。なんたる不遜。

野良の魔物かとも思つたが、背中にはその主人と思しき姿がある。マントを全身に巻きつけており、顔どころか髪すらも見えないので、大きさや影の形からしておそらく人であろう。それも不遜な行為である。

私は貴族であるぞ！？

そう叫ぼうと息を吸つた時、気付いた。

正面のパートナーの異形な影。

その姿は竜のようでいて、竜ではない。ハンスにとって、竜使いにとつて最も唾棄すべき存在。

ハンスは幼竜殺しを思い出した。事前にもらつていた情報と、なによりハンスの勘がわざやいた。

やつだ。

無意識のうちにハンスの口元が歪んだ。

これだ。

「私はハンス＝バーレ！ 貴様を誅滅せしめる竜使いの名だ！」

返答がないが、それに対して思う物は何もない。こいつを殺す。それが竜たるもの役目である。

ハンスは、腰元の宝剣を抜き取り、相方たる翼竜、ミッヒに命じた。

「ミッヒ、やつを殺せー。」

足元で流れる景色が加速する。目の前の不埒者の姿がよく見える。その背には、全身をマントのようなもので覆った、おそらく人の姿。

ハンスは宝剣を振り上げ、顔を喜色に染めた。

その瞬間、視界が赤い炎で包まれた。

炎が全身を舐める、と思った直後、足元がぐらつき身体の態勢が崩れる。同時に足場になつてているパートナーも落下し始めるのが分かった。

なにかしきつたか。

ちつと舌うちをして重心を下げ、パートナーの身体に張り付かせる。炎が周囲を満たしていたが、竜使いたるものこの程度の炎はねるま湯にすぎない。

炎の嵐から抜け落ち、空が見えたと思ったたら、そこに何か赤黒い液体が舞っていた。

なんだろう、と思い手を伸ばす。

冷たい感触がつき手を引っ込めようとしたとき、その手がぐらりとゆらめく。続いて嗅覚が、ゆらぎすぐによくなっていく。なんとか嗅ぎとつたのは、妙な鉄臭さ。

赤黒い液体は血だ。

宙を舞っていた血液の量は、ハンスの身体を絞っても出でてくる量

ではない。

そしてそれは、自分の足元から出ている。

つまりミツヒがやられたのだ。そうなるとつまり自分の命も……

ハンスの意識はそこで消え失せた。

3・1 肉まさんと弁当

「歩、喧は黙つてきたか?」

「……おひ」

「わやんとアーレであるひな?」

「……おひ」

歩が開き教室に入つてきただといふを迎えたのは、アーサーの意地の悪そうな顔だった。

手のひらを上にして小さな手を差し出している。

嫌々、その指に歩が手にした袋をひっかけた。

それは、今さつて走つて買つてきた肉まん。

アーサーの好物である駄菓子屋のものだが、それは特別仕様で、アーサーの両手で收まる程度の大きさなのに、一つで昼食代の半分を占める代物だ。

それが目の前に十。

じつした昼飯生活は七口田。合計七十個。歩とアーサーの昼食代に一力用分の小遣いを足してもなお足の出る費用。

それは全て歩の負担だ。

つい泣きじとを漏らしつしまつ。

「どうしてこんなことに……」

「安易な賭けなど挑むからであろう。これに懲りて我に刃向かうことなどせぬことじや」

「結局戦つたのは俺だけなのに……」

「我があらすに勝てたといふか?」

模擬戦で、キヨモリの拘束から抜け出されたのは、間違いなくアーサーがいたからだ。

唯に炎を浴びせかけることで、キヨモリに決定的なまでの隙を作る。その発想は歩にはなかつた。

つまり、アーサーは立派すぎるほどの結果を残した。

となると、『仕事をすればなんでも言ひことを聞く』といつ賭けは歩の負けだ。

「なんでこんなこと?」……

要求を通して、ホクホク顔で肉まんにかぶりつくアーサーを見て、これほどこいつを憎たらしく思つたことはあつただろつか、と思つた。自分の飯はといつと、一番安かつた食パンまるのまま。おかげを着ける余裕はない。

悔しさに肩を落としていると、そこにはぽん、と手を叩たられた。

「一週間おつかれさまでした。私の弁当、少し食べる?」

「……みゆき、お前はほんとにいい子やあ……」

みゆきだった。

少し楽しそうに苦笑していたが、嬉しい。

救いの手が差し伸べられたと思った矢先、アーサーが口を挟んできた。

「賭けに負けた癖に他人に助けを乞うのか? 男らしくないの?」

「他人つっても、みゆきだし」

「どちらにしろ憐れみを乞うておるのは変わらん」

「別に私、憐れんでるつもりはないよ」

「いいやそれは憐れみだ。なあ、お前にもプライドの欠片程度はある?」

アーサーは歩を煽つてゐる間も、肉まんを手にし続けていた。

確かにその通りなのだが、ここでやめてもアーサーの手のひらで踊つてゐるようで気分が悪い。かといって、みゆきの「」飯をもつた瞬間、ささやかなプライドが消え失せる気がした。歩は悩んだ結果、みゆきに丁重に断りを入れた。ひもじく食パンにかじりつく。

敗者の味がした。

と、呆れたような声が聞こえてくる。

「あんたら、いつもこんななの?」

口に物を詰め込んでいた歩とアーサーに変わり、みゆきが愉快そうに答えた。

「面白いでしょう?」

「面白いとはなんだ。野郎の熱き戦である!」

「はいはい」

アーサーの言葉をみゆきが流したところで、近くにあつた机が二つ歩のそれにくつつけられ、そこに一人の女生徒が座つた。

一人はみゆき。後方には液状の栄養剤をもらつていつもより張りのあるイレイネ。

もう一人は

「唯さんも私の弁当つまらない? 今日少し量多めなんだ」

「あ……、ならちょっとだけ」

「どうぞ」

後に竜を控えさせた竜使い、平唯だつた。

キヨモリとの模擬戦から一週間が過ぎようとしていた。

その後、気絶したキモリは厳重に拘束され、檻の中に入れられた。暴走し、飛行禁止を破つた拳句、教師達のパートナーの拘束を解き、一歩間違えば歩の命を奪うことになつたかもしけないので、その罪は軽くないように思われた。

しかし、やはりそこは竜。相手が半端な竜使ったこともあり、特別扱いはここにも及んだ。模擬戦そのものも没収試合ということになり、公式結果は両者引き分け。なんとも言い難い結果に終わつた。

キヨモリは、歩のすぐ近くでのんびりと欠伸をしている。食事は既に済ませていたらしく、夢心地にうつらうつらしていた。

その主たる嘘はというと、差し出された弁当に手の伸ばし口に入

目を見開いた。

「美味しい。これ、自分で作つたの？」

「うん」

「すうじい！ 本当においしい！」

唯はわざわざみゆきの方を向いて言った。なんとも無邪気な様子で、模擬戦前となんら変わらぬ姿だ。

の端が軽く焦げていた位で、火傷一つなかつたらしい。

これは、竜使いであるからだ。アーサーの炎は見た目には巨大なものだったが、竜の堅牢さを受け継ぐ竜使いにとつて、それほど威

力のあるものではなかつたらし」。

それでも、炎に視界を埋め尽くされたことで唯はつい悲鳴を出してしまい、キヨモリの注意をひくことができた。

それでいて、唯に重傷を負わせてはいない。

もし勝利を収めたとしても、それはやはり模擬戦。相手を激しく傷つけて何も感じない、というわけにはいかなかつただろう。

アーサーの発想は完璧だつた。活躍していないとは言えなかつた。

「ふむ、みゆきの料理はなかなかのものだからな。我もこいつらがなければ、手を伸ばしておるところだ」

アーサーが乗つた机の上には、まだ肉まんがいくつか残つている。それを全て胃に納めるというのだから、余裕はないのだろう。

みゆきが少し照れながらも、さらに唯に進める。

一方の歩はといふと、ひもじく素の食パンをかじつている。言つまでもなく、アーサーは特製の肉まん。
ひもじい。

ふと唯を見ると、なにやらこちらを覗つてきている。

「あのさ、もしかしてこれつて水城の分だつたんじゃない? 私、食べてよかつた?」

見ると、確かにみゆきの弁当はいつもものより大きい。一倍はありそうだ。言われてみると、ひもじい一週間を過ごす歩を見てきたみゆきなら、そういう気遣いをしておかしくない。

みゆきが少し困つた表情をしたところで、アーサーが口を挟んできた。

「構わんよ。自ら招いた事態だ。むしろ今になつてよつやく気付い

た挙句に、今更手を伸ばすなど、ややつのは園子は粉々に打ち砕かれるといつものだ。安心してせりばらが良い

「こども」「

はつとみゆきの方を向くと、申し訳なれりといひながら見ていた。

申し訳ないのはこっちだ、と思いつめん、と言つた。

そこでふと気付いた。

「最初から気付いていたなら、お前はみゆきの心遣いを無視して

俺を煽つたんだろう？ 随分意地が悪いな」

「お前が喰わないなら、我が食えたから」

「お前、肉まんだけで腹いっぱいじゃねえのか」

「食おうと思えば食えるだ。みゆきの弁当は格別だから。母上殿のものも負けず劣らぬが、生憎このところ仕事づめのよつだで随分食つておひぬ。些か、上手い弁当が恋しくなつて追つたといひがじや」

「それなら、私食べてよかつたの？」

唯がすまなそつに言つた。慌てて歩が答える。

「ここつこここつて。この馬鹿のたるみになるよつ、食べちやつてよ。俺が言つのもなんだかじわ」

「やうだそつだ！ お前のこつひとでまないー」

「お前のこつひとでもねえよー」

みゆきと唯の二人がくすつと笑つた。ビツモアーサーとの会話はいつしたコントみたいになつてしまつ。

「みゆきー、それは我が食つー。いいであらひー」

みゆきは少し小悪魔的な微笑を浮かべて言つた。

「平さん、どうぞお食事始めなさい。」

「それ以上食べれば太っちゃうよ？」
「それだけ食べれば十分でしょ」

普通に考えれば肉まんだけでも食べきれない量がある。歩からしても、よく肩にのつかつて来られる身としては、太る「」だけは勘弁してほしい。

ついた。

「ほりほらアーサー、そんなすねないの。今度作ってきてあげるか
ら」

「本當か!」「噛一したるお前の孝もむそ!」「歩か」

かへて備考

「みゆきも乗らない！」

歩く、歩いたの感をついた。

「すまんな、色々」

いえ 家族みたいなもんたから

仲いしのね

唯がややノリに遅れながらも言つた。

「まあ、一緒に住んでたしね」「そうなんだ……」

ここでふと唯が考え込み始めた。

顔を覗うとなにやら迷っているのが見て取れた。数秒ほど考え込んだ後、顔を上げ言つた。

「あのや、私本当に混ざつていいの？ 家族の団欒邪魔してるんじやないかな？」

「そんなことないよ」

「それに、模擬戦であんなこともあつたでしょ？ キヨモリも私も、結局おどがめなしに終わっちゃつたし」

実際、普通に考えたら何らかの遺恨があつて当然だ。我を忘れ相手を殺しかけたキヨモリと唯。殺されかけた歩とアーサー。結果は何もなかつたとはいえ、やはり被害者からしたら、加害者に恐怖や恨み、少なくともこうして打ち解けることは不可能だ。加害者に何も罰が与えられなかつたらそれはより強いものになるだろう。次に日に誠心誠意の謝罪を受けたとはいえ、全てを水に流すのは難しい。ただ、歩の中に不思議と一人を憎む感情はなかつた。

ふとキヨモリに視線を向ける。

完全に眠りこけており、鼻ちょっとちんすらふくらましている。尾をだらりと伸ばし、巨躯を窮屈に縮める姿は、自分を殺そうとした姿とは似ても似つかない。

こうしたどこか可愛らしい姿は、謝罪に来たときも変わらなかつた。唯が悲愴なもの浮かべて頭を下げている横で、キヨモリも謝つていたのだが、その姿は悪戯をして叱られる子供の姿を思い起させた。大きな身体をしゅんと縮め、どこか泣きだしそうに見えた。そんなキヨモリの姿を見ていると、歩の毒気は抜けてしまつたのだ。普通なら怒るか、あきれてしまつたように思つ。だが、歩は違つたのだ。

それはアーサーも同じだつたようで、表向き唯を非難していたが、いつもほど舌鋒は鋭くなく、むしろ擁護するようでしたらあつた。

そうなると、逆に唯とキヨモリに対して同情の念が生まれた。

模擬戦以前は、どこか『孤高の龍』として、遠巻きにされながらも、雑に扱われることはなかった。実際に戦つところを田にしたことは誰もなかつたのだが、それでも皆敬意を持つて扱つていたのだ。

しかし、負けた。しかも相手はお笑い竜であるアーサーと歩。それまでとはうつてかわつて、クラスメイトは侮蔑のまなざしで見るようになった。特別扱いを受けてきている嫉妬も重なり、唯やキヨモリを見る時の顔は見るこちらの胸糞が悪くなるほど、おかしなものだった。

どちらにしろ、唯とキヨモリは苦境に立たされていたのだ。
そんな姿を見て、内心歎がゆく思つていた歩も、どうするかともできなかつたのだが、そこに手を差し伸べる人が現れた。
みゆきだ。

みゆきは歩とアーサーに相談した後、声をかけた。戸惑う唯を強引に誘い、歩達のところに連れてきた。歩達を見て、唯の戸惑いは更に増したが、歩達もみゆきと共謀して有無を言わせず、なあなあの内に習慣づけさせた。

そうして、ここどころ昼食を共にしていたというわけだ。
しかし、唯は、なあなあのまま済ませる気はないようだ。
再度、問い合わせてくる。

「やつぱり、私いない方がいいよ。誘つてもらつたのは嬉しいし、感謝もしてる。ただ、水城君もアーサーも、内心複雑だと思つんだ。水城君を殺しかけたキヨモリがいるのは団欒の邪魔になつてるよ。それを止められなかつた私もね。それに、アーサーはキヨモリのことを苦手そうにしてたでしょ？ 今も無理してるんじゃない？」

内心、歩は唯に好感を持った。

嬉しかったのは本当だ。毎休みになる度に誘われて戸惑いつつも、それを嫌がったところは見なかつたように思う。みゆきの弁当を食べた時は、ほんとうに美味しいだつたし、本当に楽しんでいるように見えた。

なのに、それを自ら手放すという。

それはおそらく、歩とアーサーに対する気遣いや優しさ、そして自分への厳しさから来ている。

本当にいいやつだ。

彼女を拒絶する理由はない。

だが、それを伝えようにも、気にしない、と言つたところで本人は真に受けないだ。恨んで当然の関係だからだ。

どうするか悩んでいると、アーサーが口を開いた。

「舐めるな」

ほんの少し、怒氣が込められていた。

「少しばかり痛めつけられたからといって、相手を恨むほど度量は狭くないわ。我には当然及ばぬが、その呆けておるアホもそれなりの度量は持ち合わせておる。そもそも、戦に臨んだ時点での命のやりとりの覚悟は必定。いくら安全を期そうと、心がけずに挑むは愚者である。殺されかけたからと恨むなど、竜どころか人の風上にも置けん」

「でも、アーサー、キヨモリ見て少し震えてたじゃない。今は大丈夫そうだけど、内心不快じゃないの？」

やうなのだ。ここは竜のことが苦手なはずだ。なのに、唯が、ひいてはキモツと共に毎飯をとることを許諾し、ここに擁護すらし始めている。

実は、歩は毎食の件について断ろいつと想っていた。アーサーが辛い思いをするのは、やはりためらうことだ。みゆきが一緒にいるだけで、唯は随分救われるだろうとも思っていた。

だが、アーサーは許諾した。そうなると、歩が断ることもできない。

それでもなお考えてしまつ。
本当にこのだらうか？

アーサーは言つた。

「何を言つ？ そんなことはない。もしあつたとしても、このアーサー様がいつまでもそこの中を下手とする、そんなことはあるわけはなかろうが」

「でも、

「でもではない。我を舐めるな」

アーサーの言葉は強い。話す内容がどんな詭弁でも、相手を信じさせるようなパワーがあるのだ。慣れるまで、歩が何度もこの竜にやられることか。

歩は最近になって、そのパワーはアーサーの自信から来るもののよう気がしてきた。

つまりこのパワーが出るといつゝせ、アーサーが今口にしていることは心から発せられたものだ。

歩はひとまず、アーサーを信じじることにした。

一方、唯はうろたえ始めた。まさか説教されるとは想つていなかつたのだろう。

「ついたえる唯に対し、口調を一転させてアーサーが言った。

「まあ、加害者意識に苛まれて、我らと食卓を共にできぬところの
であれば、仕方ない。まあ所詮竜といえど、幼竜。まだまだお子ち
やまには厳しいのかもしれぬな」

唯の皿に、燃え盛るモノが見えた。

「そんなことはない！ キヨモリは立派な竜！ それは侮辱だわ！」

「」で歩が口を挟んだ。

「なら、一緒に飯食べてくれるよね？ 僕もアーサーもなんとも
思ってないなり、当然できるよね？ 僕らはなんとも思っちゃいな
いからわ」

唯は顔を赤らめた。「うなると、ノーヒは言えない。
更にアーサーは追撃する。

「誇り高き竜と竜使いが、まさか断るなどありえまじ？ 乙の呵責
に負けるなど、まあまともな竜なら耐えられて当然だからな。ま、
幼竜なら幼竜だと認めればそれで済むがな」

唯の負けだ。

ふとアーサーを見ると、楽しそうに顔を歪めている。「じめっこ
の顔だ。言っていることは大層でも、その姿はどうも不供っぽい。
おそらく、これがキヨモリに毒氣を抜かれた原因だらう。大きさ
こそ違うが、キヨモリとアーサーはどこか被る。似たような竜だか
ら当然だろうが、子供っぽい仕草をさせると、本当にそっくりだ。
」でみゆきが言った。

「せつこい」と、かやつわやと食べかやつしよ」

「なんなら、我が食づぞ？ 幼竜じませいの味などわからぬであらうからな。食われるべきは我である」

「あ、でも自分の弁当もあるか」

唯の机には、どこかで買ったような味氣ない包装の弁当がある。小柄な唯がそれとみゆきの弁当両方を吃るのは難しそうに思えた。

唯は頬を赤くしつつも、しつかりと言った。アーサーに食われるのは勘弁、ということである。あれだけ煽られた相手に、悔しさが残らないわけがない。

「それなら大丈夫。キヨモリ！」

唯が包装をぱりぱり剥がし始めた。呼ばれたキヨモリは、腕をまくらに地面に横たえていた頭を起こして、唯の近くに伸ばしてきた。唯は弁当のふたを開けると、箸を手に持つた。

「はい、あーん」

キヨモリががばーっと口を開けた。巨大な口とそこには居並ぶ鋭い歯を視界に広がり、ぎょっとする。

その巨大な口に、弁当を持つていくと、唯は一気に傾けた。ぱさ、と竜の口の中に中身が落ちた。唯は更にその上で容器をひっくり返し、箸でこびりついたものもこしき落とす。その間、キヨモリは口を開け続けており、歩はカバの餌やりを思い出した。

「はい、いじよ」

唯の合図で、キヨモリは口を開じ、数回咀嚼しただけで一気に呑みこんだ。豪快すぎて呆気に取られるしかない。

残った空の容器を適当に脇に避けると、唯はみゆきに席を寄せた。みゆきも一瞬呆けていたが、すぐに我に返りみゆきの弁当を唯に寄せる。

みゆきの弁当に箸を伸ばし、嬉しそうに笑みを浮かべる唯。隣ではキヨモリが再び眠り始めている。

歩は食パンをかじつた。

少しだけ、先程より美味しく感じた。やはりひもじさあ残つたが。

3・2 不可解な指示

「うわさまでした」

唯とみゆきが食べ終えた。歩とアーサーは先に終えている。時計を見ると、昼休みは後三十分ほど残っていた。次の時間は、久々の模擬戦のはずで、移動して着替えを済ませるのは十分ほどかかる。自由な時間は二十分かそこいらだ。

「それにしても、みゆきも随分強いのね」

リラックスした様子の唯が尋ねた。この短い間で下の名前を呼び合つようになつていて、
みゆきは照れ半分、困った半分の笑みを浮かべた。

「私たち以外の格付け模擬戦で優勝したんでしょう？ 最低でもこの学年で三つの指にはいるつてことじやん。本当す」「によ」

「まあ△クラス模擬戦で最強の類だつたからな。おかしくはないが、それでもす」「」

「我も鼻が高いわ」

「そ、そういうえば、唯は模擬戦の間何してるの？」

みゆきが強引に話題を変えた。本当にこの話題は嫌なのだけれど、ねむりこけるキヨモリの背をなでながら、唯は答える。

「キヨモリと一緒に自主練。キヨモリはいつも一人で過ぐしている

からね。まあ遊びに近いよ

キヨモリは自分の部屋を『えらべて』いると聞いたが、裏を返せば、唯が授業を受けて『いる間ずっと孤独に待たされる』といつことだ。

考えてみれば、随分辛い状況なのかもしれない。

「訓練つてなつてるんだけど、相手もいないしね。たまに雨竜先生が相手してくれるんだけど、やっぱ人相手だと全力出せないから、いい練習にはならないのよね」

「随分豪気な話だ」

アーサーがいれた茶々に唯は眞面目に返す。

「いや、雨竜先生が弱いつていうより、キヨモリの攻撃が当たらないのよ。なんだかんだで小回り利かないしね。かといって飛んだりとかすると、今度は先生が危ないし。さすがに全力でぶち当たると、もし怪我したら洒落にならないだろ?」
「全部避けられるの?」

「うん、雨竜先生すごいよ。動きが全然違う。歩もすごいかったけど、雨竜先生はそれに輪をかけてるよ。本当、当たる気がしないもん」

雨竜が戦っているところを見たことはないが、確かに雰囲気なんでもできやうな気はする。

今度手合わせ願つてみよつかと思つていたところ、校内放送が鳴つた。

「中村です。水城歩君、アーサー君、能美美雪さん、イレイネさん、平唯さん、キヨモリさん、南校舎一階にある一番端の空き教室に来てください。繰り返します。水城君……」

丁度、ここに揃っている面子全員が呼ばれた。

心当たりはなかつたが、とりあえず向かうこととした。

食後の倦怠感が漂う廊下を通り過ぎ、一階へと降りていく。歩達が昼を取っていたのは同じ南校舎の三階で、そこが一年の空間だ。下つて二階は一年、上つて四階は二年。一階は様々な用途で使えるよつ、意図的に開けてある。

一年の喧噪を背に、更に一階へと降りた。放送では端としか言つていなかつたので右と左、どちらに行くか迷つたが、右側の端にこちらに手を振る雨竜の姿が見えた。おねりくわぢらだ。

歩いていくと、すぐに中に入るよう促された。

ドアを開けると、教卓に藤花がいて、教卓の前に椅子が五つ置いてあつた。

「どうぞ座つてください。キヨモリさんに合つ椅子はないので、申し訳ないですが床にそのままでお願ひします」

歩、アーサー、みゆき、レイネ、唯、そしてその隣にキヨモリが座りこんだ。

雨竜も中に入つてきて、ぴしゃり、とドアを閉めた。雨竜はそのままドアに身体を預けて絆つている。

視線を前に向けると、藤花が口を開いた。

「わざわざ休みに呼び出しをして申し訳ありません。お眞似はんはもう済ませましたか？」

頷くと、藤花は続けた。

「今回呼び出しがしたのは、一人に護衛をつけたから

です

「……はい？」

おもわず、間の抜けた返事をしてしまった。
藤花は表情をひきしめたまま、続ける。

「はい。護衛です。歩君、アーサー君、唯さん、キヨモリさんは
護衛を着けさせてもらいます。基本的には二十四時間、同行するこ
とになるので、どうかよろしくお願ひします」

「二十四時間つて、ご飯食べる時も、寝る時も？」

「基本的には」

「幼童殺しか？」

低くて深いアーサーの声が響いた。
はつと気付いた。そんなことを言つていた。

「はい」

「被害者は？」

「ハンス＝バーレさんです」

「たしか、この前の模擬戦で閲覧席に来ていたとかいつ、貴族様で
したつけ？」

藤花の返答に、みゆきが返した。

あの鼻もちならない、クソ貴族様の顔を思い出す。
直接会つている。

みゆきは話を聞かされていただけのようだが、歩達は模擬戦前に
正直、死んでも悔やむ気持ちは全くなかったが、それでも竜殺し
にやられたとなると話は別だ。

雨竜が説明を始めた。

「やられたのは、先週の学期末模擬戦の直後だ。どうやら飛んで帰つているところを狙われたらしく、ここからそう離れていない。貴族様は空から降つて潰れた蛙みたいな有様だったよ。あんなつては貴族も肩なしだったな」

「まるで見てきたみたいな言い草だな」

アーサーの問いに、雨竜は一瞬目を大きく膨らましたかと思つとすぐに戻し、答えた。

「まさか。聞いただけだ」

「竜はどうした？連れ去られたか？」

アーサーの質問は続く。やはり、竜殺しに對して並々ならぬ関心があるようだ。

「痕跡は散乱した血液だけだ。爪のかけらもなかつたらしく、全て回収されたと考えるのが妥当だ」

「それで、我らに護衛を？」

雨竜が頷いて返していく。

「ならば仕方があるまい」

「助かる」

アーサーは不満そくにしながらも承諾した。ちらりと見た唯の顔も、不満そうではあったが、何も言わないとこりを見ると、仕方のないことと受け入れるつもりらしい。

ここで、みゆきがおぞるおぞるタイミングをはかつて、といづ感じで言った。

「あの、質問いいですか？」

「どうぞ」

「何故私も呼ばれたのでしょうか？」

みゆきは竜には余り関係がない。強いていえば、歩と関係が深く、最近では唯とも交流があるといったところ位だ。といつても、歩と四六時中一緒にいるわけではないし、一緒に昼食をとるものも、唯とのことを除いたら稀だ。唯とはつい先程打ち解けたばかりだ。

それが何故ここにいるのか？

藤花が言いづらそうに眉尻を下げて、少し溜めてから言った。

「勿論、みゆきさんに護衛をつけるという話ではありません。かといつて、この話と関係ないわけでもありません」

「なら、何故じゃ？」

「その護衛になつてもらいたいんだ」

代わつて答えた雨竜の回答は、思いがけない内容だつた。馬鹿げているといつてもいい。

言われた当人はといつと、きょとんとしている。意味がわからないうのだろう。それは、藤花と雨竜以外同じことだった。

アーサーが尋ねる。

「何を馬鹿な」とを。みゆきはまだ学生だ。竜殺しと相対するかもしれないが、それぬ護衛などさせるわけにはいかない。それ以上に、学生に何させめるつもりだ？」

後にいくに連れ、怒氣をはらむようになつていた。

対する教師一人はといつと、苦渋の表情、といつた感じだ。

「実は、私達もよくわからないんです。ただ、校長から『上からの

指示だ』と言われ伝えてるだけで、言われたこっちからしても面くらつてる状態です』

『付け加えるなら、私達もおとなしくはいそうですかと受けたわけじゃない。さつきまで校長に怒鳴りつけてなんとか聞き出そうとしてたんだが、校長も知らされているわけじゃないらしく、何も出てこなかつた。ほんとふざけてやがる』

「先生が校長を怒鳴りつけた?』

「ああ』

呆れた。ただの平教師が校長を怒鳴りつけるとは、雨竜達の教師人生は大丈夫なのだろうか。

それをよそに、話は続く。

『なので、私達もどうこう理屈でそうなつたかは知りません。ただの仲介役に過ぎないんです。大変申し訳ないのですが、ひとまず受け入れてください、としか言えません。幸いに、あなた達には親交があるようですから、なんとか引き受けただけませんか?』

藤花の懇願には、学校と生徒の間に挟まれた苦惱がにじみ出ている。

これ以上攻めるのは気遅れしたのだろう、アーサーがため息をつきながら言った。

「みゆき、いいのか?』

「仕方がないでしょ』

「助かる。一応、仕事としての報酬があるから、それについても後で説明しよう』

雨竜の返答に、みゆきはなにやら複雑なものを浮かべた。 気を取り直して、アーサーは質問を続ける。

「みゆきの件はいいとして、まさか護衛がみゆき一人といふことはあるまいな」

「後一人つく」

「一人か。大した護衛だな」

アーサーの口調はいつになく皮肉に満ちている。

「それで誰だ？」

「私だ」

「……お前か？」

「頼り無くてすまんな」

「どれだけ内々ですませようとしてるんだ？ 本当に守る気はあるのか？」

驚きを通り越して、白けてしまった。
まるで話にならない。

だからといって、藤花や雨竜達教師陣が悪いわけでもなく、歩はただ呆れかえった。

それは皆同じようで、冷めた沈黙が流れる。
空気を変えたのは、アーサー。

一際大きなため息をついた後、言った。

「藤花、雨竜、それでこれからどうするのだ？」

「とりあえず、放課後まではいつも通りに。あなた達はできるだけ一緒に行動するようにお願いしてもいいですか？ それからのことは、また放課後に」

「わかった。みゆき、唯、それでいいか？」

「はい」「……うん」

「では、教室に戻るぞ」

アーサーの呼びかけを合図に、そろそろと外に出していく。
外に出る時に見た藤花と雨竜の顔が、頭の中に妙に残つた。

3・3 不可解は続く

「大丈夫？ 傷だらけだけ？」
「まあ、大丈夫。慣れてるし」
「たるんであるのだこいつは。唯も罵倒してやれ」
「何もしてないお前が言つくな

いつもの軽口だが、余りキレが良くない。
アーサーの悪口も歩のつっこみも、どこか散漫。
唯の心配そうな顔も、傷だらけな歩への気遣い以外にも向いてい
るのは明らかだ。

放課後になつて、歩達は昼休みの教室に集められた。

午後の模擬戦はいつも通りに過ごした。歩はアーサーに煽られつ
つパートナー達の攻撃を必死にかいぐぐり、隙を見つけては棍棒によ
る一撃を狙う。みゆきとイレイネは、主にイレイネが矢面に立ち
つつ、要所を狙いみゆきも参戦する。唯とキヨモリは、別室で自習。
戦績が完膚なきまでの全敗だったこと以外は、なんら変わらない
日常だった。

その場で軽く手当を受けた後、教室に戻りホームルームを終え
ると、藤花が声をかけてきた。

内容は昼休みの時と同じ。空き教室に集まつておいてくれ、との
こと。ただ、少し遅れるとのことで、適当に時間をつぶしておいて
くれ、と言われた。

仕方なく、適当に歓談している。

「歩、今日は特に注意散漫だつたね」

みゆきが言った。

「ふん、大方、放課後にことに気を取られていたのであらう。先のことに気を取られ、目の前のことをおろそかにするなど、何たる愚行。私は悲しいわ」

「まあ仕方ないよね。私もキヨモリと何したか覚えてないし」

アーサーの罵倒も唯のフォローも、どこかおざなりに聞こえた。大小はあるにしひ、皆これからのことを考えているのだ。

三十分ほどして、藤花と雨竜が現れた。

藤花は申し訳なさそうにしている一方、雨竜は何故かいらだつていた。

「ごめんね、遅れて」

「いえ」

昼休みと同様に、藤花が教卓、雨竜はドアの前に立つた。すぐに藤花がしゃべりだした。

「まず始めに、大変勝手なお願いになることを謝つておきます」「前置きはいいから、本題を頼む」

こちらも苛立つた様子のアーサーに急かされてか、藤花が一呼吸置いた後、言った。

「それでは单刀直入に。今晚から、学校で寝泊まりをしてください。

今から一手に分かれて家に戻り、当面の生活道具を準備してすぐに学校の宿直室に。そこで、男女それぞれ一部屋ずつに分かれて夜を過ごしてもらいます。食事は学校側が準備しますし、宿直室にはシャワーが備え付けてあります。服に関しては、後で私が回収し、クリーニングに出します。それ以外に何か不都合な点がありましたら、言ってください。できるだけのことはします」

ある程度は予想ができていた。護衛するなら、対象を一ヵ所に集めた方がいいに決まっているからだ。各自の家に配置するというのも考えられるが、護衛役に教師と生徒を選ぶ位だ。そんな手間をかけるとは思えなかつた。

だが、もやつとした不満は残る。

「護衛は生徒と教師。場所は学校の宿直室。本当に守る氣あるんですかね」
「私も知りたい位です」

藤花の口調は申し訳なさ半分、呆れ半分といった感じだ。藤花自身、じくじたる思いをしているのは同じなのだろう。
雨竜が割り込むように言った。

「とりあえず、これからすぐに家に行こう。平と能美には中村先生が、水城には私が付いていく。身の回りのものを持ち出して、宿直室に集合で。陽が沈む前に済ませたい」

誰も反論はしなかつた。
ただ、心中にある種のモヤを誰もが抱えていた。

宿直室は、教室のある棟の隣にそびえ立つ棟の一階にある。パートナーが休む大きめの棟の反対側に位置し、正式な入口はそちら側にあった。

歩は、適当に身の回りのものの回収を済ませ、母親である類に伝言を残してから再度学校に戻ってきた。幸か不幸か、類は今日から長期出張であり、出てくるのに面倒なことはおこらなかつた。連絡先もわからぬため伝言を残すことしかできなかつた位だ。

「いいだ

雨竜に先導されて連れて行かれた先は、一階の端。宿直室と書かれたプレートがかけられている部屋が三つある。

「一番端が私と水城、真ん中が平と能美の部屋だ。パートナーもそれぞれの部屋で頼む」

ドアを開けて中に入ると、部屋の中央にちやぶ台があつた。床は畳を敷き詰めてあり、入口の土間で靴を脱ぐよくなつていてるようだ。

パートナーが泊まる」とも考えてか、それなりの広さがある。キヨモリでも、なんとか過ごせそうだ。

「ここにあるものは好きに使ってくれ。冷蔵庫は中身がないけど、後で適当に補充するから。シャワーはいつでも使えるから。冷蔵庫の隣にある棚には皿や碗、コロコロもあるから、それも自由に使え。

ゴミはそこ

雨竜が入口の土間の端を指した。鉄色のバケツのようなものがあった。

歩は靴を脱いで畳に上がり、荷物を下ろすと、見回してみた。右

奥にシャワーと書かれた戸があり、手前にタオルが積まれて置いてあつた。更に手前には水場がある。淡い青色のタイルが貼られた、廊下においてあるものと同じものようだ。

部屋の反対側に皿をやると、冷蔵庫が木の棚と寄り添つように置かれてあるのが見えた。それに皿とコンロが置かれているのだらう。隣に布団が積まれてあつたが、遠目に見てもほこり臭そうに見えた。

「こじが、当分の寝床か。

案外、居住空間としては十分なように思えた。

「ふむ、これが飯か」

声の主はちやぶ台の上にいた。
置かれたあつたものの包みを外し、中を覗き込んでいる。

「ああ。それで頼む」

雨竜は土間から上がつて来ない。そちらに皿をやると、ちりつと壁時計に手をやつしていた。

「私はまだやることがあるから、席外すけど、できるだけこじから外に出ないでくれ。後で色々持つてくるから。頼む」

そう言つと、雨竜は出ていった。

残された歩はといふと、とりあえずもう一人の同居人の所に近付いた。

アーサーが近付いてきた歩を見た後、言つた。

「これを見よ」

包みを解かれた中身は弁当だった。ぱっと見、何もおかしくない
ように見える。

「これがどうした?」

「このよつな粗末なものを作にするのか?」

「粗末?」

注意深く見てみると、なるほど、米はべちゃべちゃして漬れているし、揚げ物はギトギトして容器の端に油が白く浮いている。匂いも生臭いとまではいかないが、余り食欲を湧かせてくれるものではなかつた。

確かに粗末といえば粗末だ。だからといって、特別びっくりすことには思えない。

歩はアーサーの不満を無視してアーサーに詰め寄つた。
少し懸念があつたからだ。

「アーサー、いいか?」

「なんだ」

「お前、キヨモツと一緒に住むよつになるけど大丈夫か?」

「このよつるキヨモツに対しても我慢をしてきたといつのであれば、それがこれが
も氣になつた。

もし昼食の時も我慢をしてきたといつのであれば、それがこれが
ら一日中になるのだ。部屋は別とはいへ、壁を挟んで隣でもきつい
のではなかろうか。

アーサーはあっけらかんと答えた。

「何がだ? 我のなにが大丈夫でないといつのか?」

「いや、キヨモツとずっと一緒に辛くないかなつて」

「ふん、そんなことはない。お前の見間違いであらう
『眞面目に答へる』

アーサーが歩の顔を見た。あきらめたよひに口を開いた。

「我が乗り越えるべきことだ」
「それはなんだ」「言わぬ」「なんで言わない」「お前には関係ない」

突き放して来るような態度に腹が立つてきた。口にいたつてまだ言わないのか。

昔は何度も聞いたが、そのたびにはぐらかされて終わつた。最近では、もつほとんど聞くことはなくなつていた。
だが、つい口に出してしまつた。おやぢく今まで最も真剣な雰囲気の中で。

「俺にも言えないのか」

アーサーの返答は、少し弱弱しくなつた。

「……今は
「俺のことが信頼できないか」「そうではないが　今は」

歩は悲しくなつた。

しばらく沈黙が二人を包む。

膠着状況を破つたのは、入口から聞こえてきた声だ。

「あ、もう来てたんだ」

「ねえ、早いな」

みゆきだつた。後ろに咲イレイネと唯の姿も見える。

「二人の家行くみたいだから、もうちょっと時間かかるかなと思つてた」

「私の家こつから近いからね。歩く距離としては、みゆきの家との往復だけみたいなもんだったから」

唯が遠慮なくずかずかと上がつてきた。

その後をみゆき、イレイネと続いてくる。キモリの姿はない。

「キモリはどこだ？」

「隣の部屋で寝てるよ。あいつねぼすけだから」

唯は上がつてくると、興味深そつにあたりを見回した後、クシャつとした笑顔を浮かべた。

「うん、あんま変わんないね。それでどうする？」

「適当に飯食つてシャワー浴びて寝るだけじゃない？」

そうか、と唯はまた笑つた。笑いの意味がわからないが、少し困つたような顔が輝いて見える。

「いいで、アーサーが口を挟んできた。

「我はこんなもの食えんぞ」

「ん？ そんなに美味しくなさそうなの？」

唯がちぢみの方に寄つてくると、アーサーの頭越しに弁当を見

た。

「うーん、まあ美味しいなれどではあるね」
「これが夕食などありえん

「こことこアーサーの食べた飯といえば、朝は類の作り置き、昼は特製肉まんだし、夜は類がいるのが続いた。舌が肥えてるのはわかる。

アーサーはけわしく皿をよせ歩いて戻った。

「まさか、我にこのような飯を食わせるといつのか？」
「かといつても、どうしろと？ 外に出られない以上、これ食うか食わないかしか選択肢がないか？ いつそのこと外に出て適当に買いだしする？」
「それいいね」

返答はアーサーではなかつた。

声の主は、唯二三の口とひとつ、言つてこることは過激だ。

「買いだし行こうよ。みんなで動けば大丈夫だつて…」「そうだ。行くぞ！ 美味しい飯が我を待つてゐる…」「お前らなんで息あつてんだよ」「美味しい飯の前では皆同胞となるのだ」

助けを求めようとみゆきを見る。

柔らかな微笑を浮かべており、止める気はないようだ。

「じゃあ行くぞ。今から行けばまだ店も空いてる…」「もう夜だけど、大丈夫？」

窓越しに外を見ると、もう真っ暗になつてゐる。
アーサーが鼻高々に言つた。

「大丈夫だ。ちょっとした伝手があるからな」
「本当?」
「本当」
「何故我を信用せん」

唯はみゆきに確認をとつた。

歩も伝手があるのは知つてゐる。むしろその伝手は、みゆきやアーサーよりも歩のほうが強い。

ただいまいち乗り切れない。

何故ここまで乗り気なのだろうか?

アーサーはまだわからんこともない、というか相方の横暴には慣れているが、唯の態度は奇異に写つた。少し興奮したように頬が赤らんでおり、竜殺しのことなど忘れきつているようだ。

本当に外に出ていいのだろうか。

学校側の対応にはまるで危機感が感じられない。適当にその場を過ぎ去っているようにしか思えないほど、甘さがある。

かといって、自分達まで適当に事を済ませていいか。

どう結論づけようと、燃えたぎるアーサーと唯は歩一人では止められそうにない。

「じゃあどうやって出る? 流石に表からは出られないんじやないか?」「そんなことは容易いことであるわ」

アーサーはぱたぱたと飛んで、窓際に移つた。

「いい夕闇だ。これなら、空を覗ければわかるまい」

「どうやって？」

「図体ばかりでかいやつがいるだら」

「あ」

誰の顔を見る。

きょとんとしていた。

「これ、気持ちいいねー。」

みゆきが楽しそうに言った。

風がうなり、その声もかすれて聞こえる。

全身を風が叩き、今にも吹き飛ばされそうな勢いだ。

歩達は今、キヨモリの背に乗つて大空を駆けている。
あの後、隣の部屋で寝転んでいたキヨモリを起こし、笛で乗つかった。

首の真後ろに唯、双翼にそれぞれ歩とみゆき、そしてそれぞれのパートナーがひっかかる形だ。邪魔になるのではないかとも思つたが、キヨモリはそれくらいでは何の負荷にもならないらしい。歩が昏倒させられたのが百に一つだったんじやないか、と今になつて思わせる程の呆れた膂力だ。

ぱさり、と大きな翼が動かされる度に、強烈な風が舞い起こつているのがわかる。いつもは肩に乗るアーサーを、歩は抱えなければならなくなつている位だ。

みゆきが再度言つ。

「唯！ これほんとに気持ちいいよー！」

「私もそう思うー。『竜は飛んでこそ竜』の意味もわかるつてもんよねー！」

「ほんとにねー！」

「ナビや、イレイネも空飛べるんじゃない！？ 飛んでるとこみたよー。」

「飛べるナビ、こんなに速くは飛べないよー。」

確かに、イレイネは身体を宙に浮かせることができた。それは歩達に見せた雨のような技からもわかる。ただ、流石にこれほどの速度は出ない。

風が耳をさくように流れ、大声でないとすぐ隣の声も聞こえない。すさまじいまでの力だ。

唯が鼻高々に笑顔を浮かべている。

確かに気持ちがいい。

見下ろすと、光が線となつて伸びている。風がうなる音や、皮膚の表面をけずるようつに流れる大気など、そういう体験できることではない。全てが洗い流されて行くような、そんな感覚だ。

女性陣二人ほどの盛り上がりはなかつたが、歩も楽しんでいた。みゆきの影ともいうべきイレイネも、ずっと微笑んでおり、心地よさそうだった。

ただ、むくれているのがいた。
アーサーだ。

「ふん！ 我も飛ぼうと思えばこれ位

どうもプライドが刺激されるらしく、不満げに鼻から炎を漏らしていた。漏らした炎も風に流され、鼻水を垂らしているかのような体たらくだ。

歩はまだ先程のやりとりから吹っ切れてはいなかつたのだが、それを見て笑ってしまった。笑つていると、ひとまづは忘れることができた。

楽しい時間は矢のようにな過ぎる。実際、数分足らずで田標地点に着いた。

場所は、森と住宅街の間の、ちょっとした空き地。降り立つたとき、砂地の足元が舞いあげられた。

「終わっちゃったね」

「また今度乗せたげるから。次は遠出しようよ！」

「いいね！ 楽しそうだ」

女子一人は既に次の約束をしていた。本来の目的を忘れているのではないかというはしゃぎっぷりで、竜殺しのことも頭の端から消えているに違いない。

時間ももう大分遅くなっているのもあり、歩は空氣を読まず割つて入った。

「ひとまず、買い物済ませようか。何食う？」

「鍋などいいの？ 酒をたっぷり入れてな」

アーサーはもう氣を取り直して、食い意地を張つてゐる。頬を上氣させたみゆきが返答してきた。

「そうだね。折角だから作りたいけど、手早くできるのがいいかな。大きめの鍋とかあつた？」

「それは流石になかったかな」

思い返してみたが、棚の中には小さめの手鍋しかなかつたような覚えがある。

アーサーにも聞いてみたが、ない、と端的な答えが返ってきた。

「なら買つてくれか。キヨモリ、まだ運べそう、それに、キヨモリどれくらい食べる?」

「あ、うん。キヨモリはまだまだ余裕で運べると思つ。食べる量はきりがないから、少し多めの一人分位で、後はいつも食べてるのが学校にあるから……だけど」

唯に話を振つてみると、何故か反応が薄い。先程までの余波で頬は赤いのだが、眉を下げて困り顔になつている

「どうした?」「

「あ、あの、私、料理できないんだけど……いいの? 私、包丁も握つたことないの……」

ほつと氣が抜けると同時に、微笑ましいだと思つた。

「関係ないよ。運んでくれるのはキヨモリだし、何もしてないってことはないからさ。それを言つなりこのクソ竜とか食つだけのつもり満々だしな」

「ふん! 我には味見といつ、唯一無二の仕事があるー。」

「ははは。確かに、アーサーは舌ついもんね」

唯はびくびくと覗つていたが、本当に歩達はどうとも思つていない。できるやつがすればいい話だ。

時間ももう大分遅くなつてきている。伝手の相手も、できるだけ早いほうがよからう。ただでさえ迷惑行為なんだから。

「とりあえず、行こうか。もう遅いしね」

「そうね。唯もさつあと行ひづー。キヨモリはひづで待つてもうつていー?」

唯の承諾を受け、キヨモリはその場で待機となつた。

残つた面子で近くの商店街に移る。

すぐに目標の場所にはついた。行つた先は、色々と世話になつてゐる商店街。多くの店のシャッターは閉じられており、閑散としていた。空いているのは、二十四時間営業の札の駄菓子屋と一二件だけ。

歩はまだ空いでいる店ではなく、既にシャッターが閉じられた店の前に進んだ。

そこから脇にそれ、人一人がやつと通れる位のスペースを通り抜けた先の、小さな勝手口のところまで行くと、戸を叩いた。

「すみません、水城歩です。いいですか？」

すぐに反応があった。戸ががらりと開けられ、そこから出ってきたのは無精ひげの伸びた、赤ら顔のおじさんだった。

歩を見て、破顔した。

「おー、歩ちゃん！ どうした？ つつても内に来たなら目的はつか！ よし、店開けるから待つてろ」

「わざわざすみません」

ガハハという笑いが店先に引っ込んでいく。その音についていくよにして店の表に戻つていった。

戻ると、困惑顔の唯がいた。妙に心配そうだ。

歩がついてそう経たない内に、シャッターががらりと上げられた。まだ野菜がいくつか残つており、閉店作業は終わっていないようだつた。

「おお、みゅあちやんも一緒にかい！　もう一人きれいに揃えてるなんて、歩も隅におけねえなあ」

「野菜、いいですか？」

「おうよ、何が欲しい？　何食つんだい？」

「鍋しようかと思ってるんですけど、いいあります？」

「おうひー。白菜とか春菊いいのが残ってるよー。」

「私、お肉の方行つてますね」

「調味料も一緒に頼む」

イレインを連れてみゅきが去つていった。それを見て誰がどうしたらいいか迷つてゐるようだが、そういうじてている内にみゅきは見えなくなつた。

もじもじしながら、結局歩の後でまつとじてくる。

それを見て、八百屋のおじさんはなにやら警り出した。

「いや、いこ子だね～ほんと可愛い。俺が後十年若けりや」

「犯罪ですよそれ」

それを聞いて、誰が顔をむつとさせた。

「いやいや、歩も見た田が幼いかつてことじゃなくつて、高校生に手出しこじがつて意味だからさあ」

「フォローになつてないですよ」

歩は手こした白菜の根っこの辺りを見ながら答えた。
わらにむくれる唯に、おじさんのが豪快に笑い飛ばす。

「いやいや、ごめん。おじさん飯が利かなくて。まあ内の野菜食つてりや胸も大きくなるさー。」

「下品つす」

両手で自分の胸を掴みあげながら、おじさんとおじさんが言つた。超重量級のおじさんの胸は、単純な大きさだけなり誰とは比べ物にならないだろ。

唯の顔が真っ赤になつていると、歩がせりと皿利きを終わらせた。

「これと、これも加えて、これでお願いします。あ、あと籠も貰してくだされ」

「おう、結構あるね。まあこの嬢ちゃんに一杯くわせてやりなー。」

「遅くにありがとう」

「類さんによろしく囁つとして」

「母さんは頭上がりませんもんね。奥さんにも尻に敷かれて災難つすね」

「つぬせえよ。せりやつれと帰れ、内の母ちゃんの飯が待つてんだよ」

「せりやすんません。では奥さんこもよろしく」

「はこはこ」

手早く余計を済ませてお釣りを受け取ると、おじさんが閉める前に歩がシャッターを下ろした。買った量は、大きめの籠四つ分になつた。キロモリの分もできるだけ、と考えるといつなつてしまう。ふと後ろを見ると、唯が顔を真っ赤にして肩を震わせていた。

「いや、「じめど」「めど。気はいいんだけど、一言余計なんだよね、

おじさん」

「じめ……」

そこで何か思い出したのか、はつと顔を上げて唯が尋ねてきた。

「それはともかく、八百屋さん、いちいち開けてもらつてよかつた

のかな？」

「ああ、見ての通り付き合い長いから」

「仲いいんだね」

「まあね、母親経由で俺も仲良くなっちゃったんだよ」

「そりいえば、しつかり野菜見てたよね」

少し照れくさいのもあり、歩は鼻の頭をかいた。

「母親がそこらへん詳しかったのよ。それで八百屋のおじさんと意氣投合しちゃって、一緒に着いてた俺も一人の講義受けながら育つたからさ。最近は俺一人で買い物に行くもの多いしね」

「へー」

唯の相槌は、妙に気持ちがいい。

「みゆきが言った肉屋も似たような感じで常連になつてて。みゆきも双方と仲いいんだよ」「だから一人に分かれたのか」

そこでみゆきが戻ってきた。相当量の物が詰め込まれた買い物かごを両手に持っている。脇にいるイレイネは、巨大な鍋を抱えていた。

「いいのあつたよ。キヨモリもそれなりに食べられそうな位あるよ

「あ、ありがと」

「じゃあ行くか」

「あ、私も持つよ

「ほい」

四つの籠の内、比較的軽そうなものを一つ渡した。唯はそれを軽

く持ち上げた。

「結構なっちゃんたね」

「まあね、大食漢の竜が一匹も、つて。アーサーどつした?」

そう言えば、アーサーの姿が見えない。ひどい話だが完全に忘れていた。

「覚えてる?」

一人とも首を振った。イレイネも覚えがないらしい。

「あの馬鹿どいつたんだ!」

「忘れてた私達もそれなりのもんだけどね」

「それは仕方あるまい。我が氣取られぬよう動いたからな」

声の方を振り向くと、小さな手になにやら籠を下したアーサーの姿があった。

ふらふら、と飛んでくると、その荷物を歩の籠の上に乗せる。

「おー、ゼニ行つてたんだよ。それに中身なんだよ」

「秘密じゃ」

「はいちょっと見るねー」

みゆきがさつと籠の蓋を広げた。

そこにあつたのは、

「酒?」

「つむ。とつておきがあつたのでな」

開き直つて、アーサーがうそぶいた。

「また飲む気か」

「孤独な夜に酒はつきもの」

「どこが孤独なんだよ」

「我の崇高さは誰にも理解できぬ。故に、我は常に孤独なのだ」

歩はため息をついた。

「そもそも支払いどうしたんだよ」

「母上殿にツケで。駄菓子屋のオヤジは物分かりがよくて素晴らしい

い

「……買ったのあそこか」

仕方がない。一度受け取ったものを返すのも悪かろう。
気を取り直して、女性陣に言った。

「とりあえず、帰りますか」

「肉どの位の大きさがいい？ 好みはある？」

「いえ、特にはないよ」

「同じく」

「あい。歩、野菜をお願い」

「おう」

まな板代わりの厚紙を退いて、果物ナイフが次々とより分けていく。地鶏の堅い肉質を、ちやちな果物ナイフで切れるか心配だったが、みゆきはなんなく捌いていっている。包丁の事を失念していた

のは失敗だったが、なんとかなりそうだ。イレイネが補佐をしながら、効率よくどんどん肉類を小分けしていっている。

歩も手早く野菜を水にさらしていく。きのこ類は表の汚れだけをぱっと拭い、葉物を適当にあきひては皿に盛り付けていった。

買い出しから戻ると、みゆきと歩は適当に分担してドレしらえを始めた。

果物ナイフしかなかつたのは失敗だったが、イレイネの補佐もありそれでもなんとかやつていている。その間、アーサー、キヨモリ、唯の三者は手持ちぶたさみみたいだつた。キヨモリの寝息がBGMに聞こえ、アーサーは先程からずっと後ろを飛びまわつており、うざつたいこと、この上ない。

そして唯はといつと、おろおろしていた。

ちらつと見ると、自分にすることは何かないか、と拳動不審になつてゐる。料理ができず、自分が役に立てていないのを、今になつても引きずつてゐるようだ。

丁度タイミングがあつたのもあり、用づけることにした。

「唯、これ持つてつて

「あ、うん！」

洗い場に置いていた、盛り付け終わつてゐる皿を唯に渡す。元気よく受け取ると、ちやぶ台の方にはばば、走つていき置いた。歩の受け持ちは終わつたので、自分で持つていつてもよかつたのだが、唯の顔を見ると、頼んでよかつたようと思つ。

「一ひとも終わったよ、唯、お願ひ

戻ってきた唯に、みゆきも皿を渡した。肉が山盛りになつたものと、切り分けた野菜の一ひとつ。洗い場にはまだたくさん残つてい

るが、ちゃんぶ台に置いておいては邪魔になるから、後で取りにくればいい、という判断だらう。

「じゃあ、私、鍋の方に移るから
「よろしく」

まだ大量に残っている具材の内、痛みそうなものだけ冷蔵庫に移した。使った厚紙や包丁を水で丁寧に流し、壁に立てかけておく。

ざつと後始末を終え、ちゃんぶ台に戻った時、既に準備は完了していた。

醤油と酢を混ぜて作ったポン酢の入った小皿と取り皿が並び、中央の鍋の中では、昆布で出汁を取ったのだろう、ほんのり色づいた液体がゆだつていた。既に、火の通りにくいものは投入されており、ぐつぐつと煮えているところだ。

「じゃあいただきますか」

適当に座る。歩とその隣にアーサー、角度を変えてみゆきとその後ろにイレイネ、歩と対面になる位置に唯と、皿をしづしづせているキヨモリが座っている。

「ではいただきます」

みゆきの掛け声で、一斉に箸が動いた。鍋に入れられた箸の数は四つ。イレイネとキヨモリを除いた数だ。
さつと豚肉を取り、ポン酢に着け、口に含む。
うん、うまい。

「美味しい！ ほんと料理うまいね！」

「あんま手はかけてないけどね」

イレイネにだし汁を注いだ器を渡しながら、みゆきが言った。

唯が美味しそうに鍋に箸を突っ込んでいると、唸り声が聞こえてきた。

キヨモリだ。

「ああ、『ごめん』『ごめん』

唯は忘れていた、と笑いながら立ち上ると、冷蔵庫の方に走つていった。

中から取り出したのは、巨大な肉の塊。帰つて来てから、キヨモリの待機室に忍び込み、中から取つてきました。歩が野菜を洗つている時にそれを持って戻ってきたのだが、その量を見た後、一分といつた唯の言葉に納得しながらも圧倒された。

それをキヨモリの前にじん、と置いた。下はそのまま皿になつており、キヨモリはそこに口を突つ込んでむしゃむしゃと食べ始めた。

「キヨモリの分も鍋あるから、食べ終わつたらあげるね。底の方は七割がたキヨモリのだから」

巨大な鍋は、今なかに入れている分だけでも四人が満腹になる量がある。まだ大量に残つた具材と考えれば、確かにキヨモリの取り分はそう少くない。

「『めんね、キヨモリが大食らいで』

「いえいえ」

「なればこそ我も思う存分食せるというわけよ。唯も早く食つがよい。その貧相な身体を多少はマシにするいい機会ではないか。まあ

貧相な身体もそれはそれで滑稽なものだがな

アーサーの煽り文句に、唯は一瞬顔を赤らめた後、激しく反応した。

「ふん、食べるわよ！ キヨモリ！ あの馬鹿竜に食べられる前に、全部食べちゃいなさい！」

「いや、なくなるから」

歩が突っ込みを入れる横で、アーサーがほくほく顔で白菜を口に入れた。至福そのものといった表情だ。器の隣には封を開けられたウイスキーの瓶があり、小さめのグラスまで用意されてある。

「これで飲み相手がいると最高なんだがなあ

「何言つてんのよ、未成年」

「こりにはお前以外いないつつの」

「ひ、ひどい……」うなつたらみゆきお前も

「残念、お一人でどうぞ」

アーサーがしょぼん、と肩を下ろし、熱い地鶏を口にして目を白黒させていた。それを見て、笑いが巻き起こった。

それからは和氣あいあいとした時間が過ぎていった。

途中、アーサーがイレイネにも酒を飲ませ、輪郭がぶよぶよになってしまったり、鍋の入れ替えを待てないキヨモリが残っていた弁当を、本人はこそっと動いたつもりのようだが、実際には豪快に一気食いして唯に怒られたり、次から次へと笑いすぎて涙すら出きた。

歩には、竜殺しに感謝する気持ちすら起こりはじめた。

それくらい、楽しかった。

3・4 わせやかな冒険と対（後書き）

10月24日 とつあえず今日はいいところで投稿終つわせていただ
きます

四回田の鍋を作つてこると、突然宿直室のドアが開けられた。
音にびっくりしそうに四回田をやると、副担の雨竜だつた。開けた先の喧騒にびっくりしてこようつで、脇には大きめのバッグを抱えている。

瞳だけ動かして部屋を見渡すと、じりり、といひちらを睨んできた。

「お前ら、外出たな」

それまでの喧騒が嘘のように静まつた。蛇に睨まれた蛙のよう、歩は一瞬にして硬直する。

おそらく自分以外もそつなつてこるみつに通つた。

雨竜は深く息を吸つた後、吐いた。

「お前ら、まあ色々鬱屈したものがあるの……」「まあまあそんなこと言つなかつて」

一人、まだ蛙になつていないやつがいた。
アーサーだ。

「そんな堅い」と言つながら、お前も内心上司には色々あるんだろ?
? まあまず一献
「いや、お前な、そんな」
「俺の酒が飲めんと嘗つのか? ほらほらおせわるぞ

雨竜に向かつてふらふらと飛んで行く。泥酔しており、いつもの厳めしい口調が消え失せる癖が出てきている。両腕で先程まで使っていたものとは別のグラスを掴み、今にも「じましそうになつて」。それだけでなく、アーサー自身も右に左にゆらゆらと揺れて、いつ墜落するかわかつたものではない。

それは雨竜も同じだったようで、慌てて両手を前に差し出し、アーサーを受け止めた。

「お、これは申し訳ない。ではお礼に一杯」
「いや、おま……」「飲めぬわけではあるまい?」「いや、飲めるけど、そういうわけじゃ……」「飲めるのか? ならしいではないか」「いやな、な」「いいから飲めやー!」

再度ぱっと飛びあがり、雨竜の口元に強引に注ぎ込んだ。ウイスキーが雨竜の中に一気になだれ込む。歩の見る限り、アーサーは水などで薄めず、ストレートで飲んでいるようだった。雨竜はいきなりアルコール度数の高い酒を飲ませたのだ。当然、むせる。

「げほ! げほ!」

むせる間に、アーサーは雨竜が落したバッグに目をやつた。

雨竜を放置して、そちらに飛び乗り、じりりとファスナーを開ける。

「なんだ、雨竜も遊ぶ気だつたんじゃないか。ほら、お前らも見てみ

バッグを横に倒し、歩達に中身を見せてきた。

そこにあつたのは、花火。線香花火だけのようだが、バッグ一杯に積みこまれている。

それはおそらく、歩達のためのものだ。

アーサーがこちらをちらつと見た。それで歩も気付き、動き出す。

「ほらう。雨竜お前も飯食え。上手いぞ～」

「コホツ。お、お前なあ……」

「先生、もうですよ！　今日は楽しみましょ～！　花火ありがとうございます！」

歩は走り寄ると、まだ少しうせている雨竜の腕を掴み、強引にちやぶ台の前に連れていく。ちやぶ台を囲む四方方向の内、唯一空いている席に座らせた。

そこにすかさずみゆきが新たな椀を差し出した。

「ほらほら雨竜、飯冷めちゃうぞ～　飯を大事にしないのは、教師として、子供を導く者として、足らないところがあるとは思わないか？」

「先生、どうぞ」

「いまならアーサーの買つてきた酒もありますから。先生が折角買つてきた花火もまず腹を満たしてからです！　花火も後で一緒にしましょうよ～！」

「……お前ら後で覚えとけよ」

雨竜は仕方なく椀を受け取った。すかさずみゆきがポン酢の入った器を滑らせ、雨竜の正面になるように置く。歩は新しいグラスを置き、そこにアーサーがそこにウイスキーを注ぐ。イレイネが腕を伸ばして箸を渡した。

四者息の揃つた、連携プレーの完成である。

困惑する唯をよそに、雨竜は一口つけた。

「クソッ、マジでうめえ」
「ありがとうござります」
「ほりほり、酒も飲めや。濃くて飲めないっていうなら、水で薄めてぐるべ?」
「そのままでいい」

雨竜は黙々と食べ始めた。

歩はほつと一息をついた。ひとまず、いますぐ説教といつのはなくなつただろう。うまく連携できた。

そこで一人取り残された唯のことが気にかかつた。
ちらりと横目で見る。

何がどうなつているのかわからないよつで、困惑が混乱に変わり、少し涙目にするなつっていた。

どうしようか、と思つていると、意外な助け舟が出た。

「……平、もう怒鳴る気は失せたから大丈夫。お前らが腹立つのはわかるし、花火も持つてきたし、私がいうことじやねえから。明日になつて中村先生に怒られて、それでチヤラだ」

雨竜がウイスキーで唇を濡らせた後、見回して言つた。

「お前らもつ飯はいいのか?」

「あ、はい」

「なら折角だから花火してこい。教室棟と囲われた場所なら、外部からは見えないだろ。あんまはしゃぐなよ。一応、こんなところで竜

殺しあおせつて来ないと思つたが、気を配つとけ

「はい！ ありがと「ひざい」ます！」

「アーサー、お前は残れよ。酒も残つてゐるし」

「当然でしょー。やつと飲み相手ができるんだから

「あんま早く潰れんなよ」

雨竜は黙々と食べ始めた。

歩は雨竜に向かつて軽く頭を下げた後、雨竜のカバンを掴んだ。まだ少し固まつている唯に向かつて言つた。

「ほら、先生もわう言つてゐ」とだし。花火しようぜ。キヨモリ！
お前も行くぞ！」

みゆきが唯の腕を掴んだ。一緒に行くよ、と笑顔で引っ張つてい
る。

それを見て状況が読めたのか、唯も雨竜に向かつて軽く一礼した
後、キヨモリに声をかける。

「キヨモリー外出るよー。」

まず歩が外に出た。続いてみゆき、連れられて唯、その後ろをや
つとイレイネ、そしてのつしのつしとキヨモリが続いた。

廊下に出ると、そこからそのまま庭に出る。ベンチや木が適当に
配置されており、規模は小さいながら遊歩道のようになつていて。
昼飯のときなど、ちよくちよく拝借している場所だ。キヨモリが自
由に動くには物足りないが、羽を伸ばす位はできそうだ。

草の生えていない砂地のところにいき、カバンを下ろした。中腰
になりカバンの中を探ると、うつそくとマッチが見つかった。用意
がいい。

「ほら、選んどいて
「唯、どれがいい？」

みゆきにカバンを渡すと、一人で中をじろじろと当たりだす。その間に歩はろうそくに火をつけ、平らな地面にろうを垂らし、そこにはうそくを立てた。それほど強度があるわけではないが、風もそんなに強くないので十分だろう。

さうそくが安定したのを確認し、みゆき達の方を向くと、一人とも選び終えていたようだ。

唯は赤と黄色のもの。みゆきは緑と青で、イレイネに淡い青色のものを渡していた。

歩も近付き、花火を選ぶ。一番上にあつた、銀色のものを選んだ。

「キヨモリ、どれがいい？」

唯がキヨモリに向かつて言った。身をかがめ、カバンの中をのつそりと覗くキヨモリ。

人間でいう人差し指の爪で、緑一色のものを指した。

唯がそれとつかんだところで、皆ろうそくの回りに移動する。

四方から伸びた花火の先がろうそくの炎に差し向けられた。
ちりちりと焦げる匂いが辺りを漂い始め、唐突に火花が散りだした。

「はい、キヨモリ」

キヨモリは向けられた花火を口の一一番先で掴んだ。本当に器用な竜だ。

色とりどりの火花がその場を満たす。

赤、青緑、銀。淡い青、そして緑。火花は一転に集うように向けられ、中心部では色の氾濫を巻き起こしている。季節は違つが、それでも十分に美しい代物だ。

花火の光は、女性陣を淡く映し出してもいた。

唯はもものような赤っぽい色に照らされている。みゆきは青緑で綺麗に、イレイネは海のような色を映し出していた。歩が思わず息を飲んでしまうほど、眩い光景だ。

それもすぐに終わる。

線香花火の先がぽつり、と地面に落ちた。同時に皆を照らし出していた光も消え、闇と戻る。花火の残光が目に残り、余計暗く感じた。火薬の匂いがふーんと臭う。

「次行」「一 次は三本まとめていくよ！」

唯が一気にはしゃぎ始めた。カバンの中に手を突っ込み、何本か適当につかんで、一気にろうそくに差し出した。

再び火花が散り始める。三種類の色が混じり合い、なんとも形容しがたい色で、それでも綺麗にはちきれしていく。唯の楽しそうに両目を広げる顔が、なんとも可愛らしい

「グルルルル」

いきなりの唸り声はキヨモリだった。自分のことを忘れるな、と言いたいのだろうが、巨躯に似合わぬ可愛らしい反応だ。威圧感すら漂う竜のそんな姿に、大笑いしてしまった。

「わかったわかった。ほら今度は五本一気にね」

唯が今度は五本持ち出した。キヨモリにはその位の大きさが丁度いいのかもしない。

それから、花火は加速度的に消費され、その度に歩達は笑った。

「お前も、あれは卑怯だろー。ああ言われたら私なんもできねえじやん」

「まあまあ。ほれ一献」

「あ、どうも。つつても騙されねえぞー！」

「いやいや、教師は大変だねえ」

「そうなんだよー、担任の中村先生はしそつちゅう出張出ちゃうし。竜関係の講演あるとすぐ行っちゃうわ、拳句の果てには自分で講演しちゃうわ。それはいいとしても、なんで私が穴埋めしないといけないのかっての」

「ほんと大変なんだな」

「そうそう、つて話変えるな」

アーサーが注いできたので、雨竜は舐める程度に口に含んだ。

「なんだノリわりいな、男ならばさうといナさばうと」

「……一応、私、護衛役なんだけどねえ」

「まあそう言わざ食えよ。鶏肉もうこじんじゃないか？」

「おつ、いいねえ。マジうめえ」

なんだかんだ言いつつ、やはり美味い。

本来ならこうしてのんびりしていてはいけないのだが、まあ今位はいいだろう。一応気をつけてもいるし。先程から時折、廊下をちら見しているのだが、全員揃っている。水城歩、能美みゆき、イレイネ、平唯、キヨモリ。雨竜の与えられた任務は、竜使い達の護衛

だけだが、かといってみゆき達を放置するのは教師としてどうかと思つ。

「教師として、か
「なんだ？」

つい独り言になつていたりしく、なんでもない、と慌ててしまかした。

「それにしても、よく花火持つて来たな。楽しんでるよひつなによりだが、良かつたのか？」

「ああいつ扱いは私も心苦しいんでね」

照れくさこ話になつたつで、話題を振つてみる。

「やつこいや、お前の相方見てたけど、ずいぶん強いな。百回やって一回勝てるかどつか、とは思うけど、あのキモモリと平倒したんだからな」

「我の加護を受けているからな。それでもまだ足りぬがな」

「ここのふと思いついたことがあり、口にしてみた。

「お前本性隠してんだろ。水城の身体能力って平も越えてるとか、鍛えてるとはいっても、パートナーの影響下のほうが大きい。実は口から破壊光線吐けますよーとかあつたりするだろ？ お兄さんにお話つてみろ」

茶化して言つたら、予想外の反応が返つてきた。。
アーサーがびく、と身体を震わせた。振り返つてこちらを見た顔は、驚愕に目を見開いているものだ。

まさか、本当に？

「……マジで言つてんのか？」

マジ、と答えてみたいが、その真剣な眼差しにセレヒまでの茶田つ
氣は持てない。

「まさか。お前こそ、本当にやつなるの？」
「んなわけねえだろ」

だよな、と雨竜は返した。もし万が一そんなものがあつたら、こ
いつがそれを隠すとは思えない。そんな奥ゆかしさはないだら。

しかしそれにしても、この龍の今後はどうなるのだろうか。E級
判定を受けた以上、最早龍ではないし、差別の目は避けられないだ
ら。こうなると見た目が龍であることは災いにしかならない。だ
れしもが龍に対して尊敬と共に嫉妬を持つてゐる現状、嫉妬の念は
どこかでこいつにぶつけられる可能性は低くない。あり体にいえば、
いじめの対象になることは多くなるだら。

どうすべきか。教師として自分になにができるのか。

セレヒで、自分のことを再度教師として認識してることに気付いた。

くく、と笑みがこぼれる。自分は何をしているんだら？
なんて、手段の一つに過ぎなかつたといつて。いつのまにか、教
師根性が身にしみついてしまつていた。

「どうした？ 何を笑う？」

アーサーが声をかけてきた。

「いつほど面白い竜はない。いつもは厳めしい口調で、小柄な身体に似合わぬ尊大な態度をとっているというのに、行動の端々に優しさが見える。色々な意味で特異なやつだ。

酔ったせいか、堅苦しい口調から若者言葉に変わった竜を見た。

「いや、面白い状況だな、と」

「ふむ」

アーサーは何か納得したように頷いた。

「まあ確かにお前といつして一人で話すことになるとは思わなかつたな」

「教師と生徒のパートナーが一対一になると珍しいわな。しかも酒飲みながら。とんだ不良教師だ」

「そういえば、お前のパートナー見ないな。どこのお嬢さんのか？」

痛いとこをつかれたが、何気なによつて装つて答える。

「秘密」

「何か理由があるのか？」

「黙秘権を主張します」

「いいから」

「さつきの仕返しか？ しつこい男はもてないぞ」

「いいから答えろ」

アーサーの語尾が確かなものに変わってきた。
こいつ酔っ払ってたんじゃねえのか？

「元から気になつてたんだよ。なんでお前のパートナーは姿を見せないのかつて。普通一緒に過ごすし、なんらかの理由があつても、

一年も姿を見ないことなんてないだろ。そもそも一緒に暮らせない仕事につくやつはない

酔っぱらっていたはずなのに、舌鋒が鋭い。
適当にかわすしかない。

「嫌だ。それより、このまえの模擬戦のこととか聞かせりよ。特等席で見てたし、いいとこかつさらつてったんだから」

アーサーは押し黙つた。

そちらを見ると、真剣にこちらを見つめている。そこに酔いは全く見えず、まるでこれから真剣勝負をするかのような顔だ。
雨竜は、目の前的小柄な竜に気圧されるのを感じた。

「何故そこまで嫌がる？ 何か特別な理由があるのなら、何故教師という職業についていた？」

「教師になりたいから。はい終」

「そもそも、お前の目的は何だ？」

背筋につゝ、と汗が流れ落ちた。
こいつ、気付いている？
おどけて答えるしかない。

「目的はお前らを立派な大人にする助けを」「
おどけるな」「
「そんなこと言われたってただの一教師に」「
ただの一教師？」

アーサーの声はどんどん淒みを増していく。

「違うだろ。お前は何かしらの目的がある。それも、教師としては
かけ離れた意図で」

「こいつは何を言つているんだろ？。いきなり、大した接点もなかつた相手に、陰謀論を振りかざすなんて、ただの電波じゃないか。適当に相手するに限る。

雨竜は必死でやう考えた。

そうでなければ 見抜かれる。

「なにがだよ。ほり、酒飲めよ。うまいぞー」

「黙れ

ふう、とため息をついて見せた。仕方がない、とでも考えて真面目な対応をするぞ、といつふうに装つて身体を動かす。

「何でそつ思ひづく？」

「勘だ」

「こいつはただの勘でそんなことを言つのか。意外な言葉にて、自分はこいつを過大評価していたのではないか、と思つた。

しかし、それは間違いであつた。

アーサーは滔々を語りだした。

「強いて言つなら、所作。口ではいいつつも、竜を特別扱いしないところとかな。我を前にした教師は、へりくだるか、邪見にするか、どちらかばかりだ。だとうのにお前にはそれがない。藤花もそいつた対応をしないのは同じだが、お前の場合は明らかに竜の扱いに慣れている。ただの一教師が竜の扱いになれることなどあらうか

ああそれに、校長を怒鳴つたとか言つてたのもあるな。一教師が、しかも新任教師が校長怒鳴つてただで済むわけない。なのに、こうして護衛役もやつている。貧乏くじひかされたのかとも思ったが、お前にそんな素振りはない。なにより、教師を首になるかもしれないとかいう危機感もない。お前が仕えているのは、全く別の何かだからだ

心臓がうるさい。徐々に徐々に加速し始め、存在を主張しはじめ る。

「模擬戦のときもそうだ。怒り狂う竜に対し、俺に任せろといった。そんなことは一介の教師は言えない。例え教師としての自覚が強く、犠牲心に溢れる人であつてもなお恐れるのが竜という存在だ。なのに、任せろ、と言つた。そこに気負いも何も感じなかつた。お前、竜と対峙することに慣れているな？」

アーサーの目が怖い。服も、皮膚も、肉も、骨も、全て透過して自分の核を見抜かれているような氣すらした。その位、指摘は当たつていい。

思わず田をそらしてしまつ。田を直視できない。

「どうした？ 答えぬか？ 貴様は何者だ？」
「私は……」

どうすればいいのか。答えは見つからない。教師と生徒の立場が逆転し、こちらが問い合わせられている。

タイミングが悪かつた。丁度、雨竜は迷い始めていた頃だつたのだ。本当に目的を果たしていいのかと。目的を果たすとは、教え子たちを亡き者にする必要がある。当初は何も思つていなかつたが、この半年ほどで教師としての自覚が時折出てきはじめ、ただの贊と

は思えなくなつてきていた。

本当に、いいのだろうか。

そんなことを考えているときに聞い詰められれば、じつして動搖してしまうのも仕方がない。

思考が散逸しており、ここをどう切り抜けるか考えないとならないときでも、下手な状況分析ばかりしてしまつ。

どうすれば

とそのとき、ふとももに冷たい感触がした。

見ると、何かがテーブルからこぼれおちている。更に視線を上げると、酒の入ったグラスが倒れていた。

その上には眠りこけるアーサーの姿。倒れたグラスによりかかって枕のようにして眠っている。どうやら寝落ちしたようだ。酔いつぶれそうな間際だったから、こんなにも遠慮なく色々聞いてきたのかもしれない。

ふとももにこぼれ続ける酒を無視して、天井を見上げた。深く息を吐く。

どちらにしろ、助かった。

三回ほど呼吸をし、落ち着かせる。

手を握り、開くを三度繰り返し、正常な動作をしていると自分に言い聞かせる。動搖はないと自己暗示する。酔いのせいだ、と必死でごまかす。

大分落ち着いた。

とりあえず、目的に戻る。

窓から外を覗つた。アーサーとの問答に集中してしまつっていたせい

で、全く注意を洗つていなかつたからだ。

そこにいたのは、三人だけ。水城歩、能美みゆき、イレイネだけだ。

慌てて立ち上がり、そちらに走る。

これは目的を果たす機会が来たのかもしれない。だが、本当にその目的を果たしてもいいのだろうか？

どう転ぶのが自分にとってベストなのか迷いながらも、雨竜は駆けた。

3・6 止めなければならぬ、でも止められない

七つの場所から、火花がこぼれおちてゐる。辺りを煙々と照らしていた。

それが照らし出すのは四つの影。

みゆき、イレイネ、唯、そしてキヨモリだ。キヨモリは三本を両腕と頭で、それ以外の歩達は一本ずつ垂らしている。

風が、火花を散らした。

初春の夜はまだ肌寒さを感じさせたが、胃の中でゆたんぽのように熱を発散する雑多な具材達と季節違ひの花火のおかげか、余り苦にならない。

ぼつん、と火のしづくが消え落ちた。
これが最後の花火だ。

「終わっちゃったね」

「そうだねー」

祭りの後、といった感じだ。花火は今ので最後になる。カバン一杯に詰め込まれていた花火も、ペースを考えず使えばそう時間はからず消費してしまう。

もう寝るか、と歩が言おつとした時、唯が声高に叫んだ。

「そうだ！ 私、買つてくるよー。キヨモリでひとつ飛びだし！
あの駄菓子屋ならまだ空いてるよね？」

確かにいつも世話になつてゐる駄菓子屋なら、一十四時間だし、花火も置いてあるだらう。

だがしかし、もう夜中で、人通りもほとんどないだらう。そこに唯とキヨモリを行かせるのは流石にどうかと思つ。実感は余りないが、自分達は幼竜殺しに狙われているのだ。

それがわかつてゐるのはみゆきも同じようだ、口を開いた。

「もう時間遅いからやめなよ。行くなら私とイレイネが行くから」
みゆきの弁が正しい。確かに歩が行くのもダメだし、まだみゆき達がいった方がいいだらう。そもそもここで終わりにすればいいのだが、唯が物足りなく思つてゐることで、ここで終わり、とまでは言いづらいのかもしない。

唯はおちやらけて言った。

「大丈夫だよ。私とキヨモリは竜殺しなんかに負けないって。歩とアーサーには負けちゃったけど、それまで一度だって負けたことなかつたんだからー。それに、出るとも限らないし

さすがに止めようと、歩は口を開こうとした。

しかし、止めた。唯の瞳が少し潤んでいたからだ。

「それにさ、楽しいんだ。本当に。ここで終わりにしたくないんだ」

それは、唯の心から言葉であるのは明白だつた。態度もあるが、なにより重みがある。

歩はのどから声が出なくなつた。それを止めるものを、歩は持ち合わせていないのだ。

みゆきが言った。

「それは私も同じだよ。だけど、私が行けばいい話だから」「私、何もしてないじゃん。料理の時も何もしてないし、運んだのはキヨモリだし。ただ楽しんでただけで、このままじゃお密さんみたいになっちゃう。私も何かしたいんだ」

みゆきも黙った。

おそらく、歩と内心は同じ。止めなければいけないのはわかる。
無謀な行動だとも理解している。

それでも、今の唯を止めることはできなかった。
それがわかったのか、唯は言った。

「じゃあ、行つてくるよー。キヨモリ、行くよー。」

ぞつとキヨモリに飛び乗ると、そのまま空に飛び上がった。影は
すぐに遠くなっていく。

「唯一、気をつけよー！」

歩の声が聞こえたかはわからない。

ただ、唯の顔は笑つていてるよつに見えた。

「行つちやつたね。良かつたのかな

「……さあな

「……ですね」

風が冷たく感じた。そう時間もたつていなければずなのに、危機感

ばかりが増大する。

唐突にみゆきは言った。

「唯とキラリと唾食食べさせたりして」「めんね。アーサー、苦手なのに」

「いや、あいつが決めたからな」

あいつに聞して俺は何も知らない、とは言わない。

「でもや、やっぱあのまま放置できなかつたんだ。孤高ならまだしも、孤独は辛いよ。前者はまだプライドで立つていられるかもしけないけど、後者はいつか必ず心が折れる。私もそうだつたから」

みゆきの話はどんどん飛び出している。おわりく、不安でいてもたつてもいられないんだろう。唯を今から追つたところで、追いつけるはずもないし、二次被害が出ないとも限らないため、自分達にできる」とは何もない。

歩もまた語る。不安なのは歩も同じなのだ。

「やつてみて、唯が楽しそうだつたからいいんじゃないか？ 今日も本当に楽しそうだつたし。だから止められなかつたんだけどな」

「……今日の唯は、本当に楽しそうだね。一回家に帰る時も、最初は学校に止まらなくちゃいけないって話に怒つてたけど、途中から逆に嬉しそうになつてたんだ。多分、修学旅行に行つてゐるような気分になつたんだね」

それで、宿直室で最初に会つた時、少し浮足立つて見えたのか。

「私も同じ感覚もあつたし、唯が楽しんでいるのもわかつたから、買ひ出しに行つたりしたんだけど、やっぱりやり過ぎだつたかな」

「……お福のやごじやなこと」

みんなは本物のものがある。金子を貰おうとしてしまつところが。

田原はいい面ばかりが見えるが、いつになると血縁の念で震れるんじゃないかと心配になってしまった。

レーベ、不意に雨竜の声が聞こえてきた。

「何とキラリつまびらした?」

声の方に振りむく。その顔は心なしか青い。
正直に話した。

「どうして止めなかつたんだ!？」
「すみません」

謝るしかできない。今となれば、なんとしても止めねばよかつた
と思ひ。後悔先にたたずとはまたこのことか。

雨竜に怒鳴られるかと思つたが、それ以上続かなかつた。

「とりあえず、私は追い掛ける。お前らは中に入つてくれ
「すみません、俺らが止めなきやいけなかつたのに」
「いや、悪いのは私だ」

雨竜は走つていつた。その速さは、おちく歩でも勝てない。
残された歩達は、ただただ待つた。

どうか、凶報だけは届きませんように、と祈りながら。

3・6・5 キメラと竜殺し

十年前

「いらっしゃいませ」

×××は元気よく挨拶をした。

場所は首都の雑貨屋。雑多な品物が並び、客層も様々で、中には怪しげな人物もいたが、×××にはまるで気にならなかつた。

品物を受け取り、値段を確かめる。出してきた札を受け取ると、細かいお釣りを返す。簡単な作業だ。ずっと立つていなければならないのも、余り苦にならない。時間ばかりが拘束され、給料はよくないが、それでも×××にとつては楽しい日々だ。

『家』となつていた場所の崩壊から一年がたつた。その後、×××は瓦礫の中から適当に金田のものを物色し、当座の資金を確保した。まず先立つものがないとどうにもならないからだ。

それからすぐにその場を離れ、おじさんから学んだ知識をもとに新たな人生を始めた。幸いにうまいこと入れ替わるそうな戸籍があつたので、それほど難しくはなかつた。保証人なしの住居探しが面倒だつたくらいだ。

それからこの店のバイトを始め一年。
キメラに似合わぬ、落ち着いた日々を過ごしていた。

「…………もう上がっていいぞ!」

「はい!」

×××は、と呼ばれて返事をした。のIDカードを利用して生活しているので、そう呼ばれているのだ。

時間になり、やつてきたもう一人のバイトと交代する。適当に談笑したりする相手なのだが、余りに可愛らしく思考の女性なので、余り長話をしたくない。会釈し、足早に事務室に戻った。

そこには店長の姿があった。黒いもじやもじやした髪に、小さめの瞳、いまにもハゲそうな頭。柔軟な雰囲気を醸し出していて、バイト皆から慕われている。

その隣で撫でられているのは、小柄な犬。真っ白な体毛に真っ赤な三つ目。不吉さを感じさせる外見だが、今はリラックスした様子でゆったりと背を伸ばしていた。

「おつかれさま」
「おつかれさまです」
「あのさ、ちょっとといい?」
「はい?」

更衣室に行こうとしたところで、呼び止められた。
申し訳なさそうに、くしゃりとした笑みを浮かべている。

「明日、シフト入ってくれない? 朝十時から五時まで」

本来なら、×××は明日休みのはずだが、別に構わなかった。

「いいですよ」

「本当? こいつもいつも気軽に頼んで悪いね」

「いえ、私は暇ですから」

バイト以外には特にこれといったことは何もしていない。いつも空いた時間は本を読むか、たまにバイト仲間に誘われて飲み会に行く位だ。飲み会といつても酒を飲むわけではなく、酔っ払い達の愚痴を聞かされながら飯を食べるだけだ。×××にとつてはそれも良かつた。

そのまま更衣室に入り、着替える。ファッショングにもこだわりがないので、適当にスーパーで買ったTシャツにジーパン、スニーカーだ。すぐに着替え終えると、荷物を抱えて事務室に出る。そこにはまだ店長と白い犬がいた。

「帰るよ」

「ほら、じ主様がお呼びだ」

白い犬が駆けよってきた。これが私のパートナーだ。キメラの擬態能力を生かし、可愛らしい姿に変えていたのだ。家でも生まれた時の姿に戻ることなく、ここ半年以上、ただの子犬として暮らしてきていた。

「名前付けてあげればいいのに。まだ付けないの？」
「ええ」

×××はパートナーに名前を付けていない。例の施設にいたときからの無名はまだ続いていた。

書類上は、名前はある。登録が義務付けられているからだ。だが、その名前は死んだあの子のパートナーの名前になっている。

名前を呼ぶ度に、息えた姿が脳裏に浮かんで、なんとなく呼べ

ないのだ。

それでも十分に意思の疎通はできるので、そのままでいいや、と思つていた。

店長のじいか寂しそうな顔に一礼し、事務室を後にした。

家に着くと、すぐにカバンをあらした。六畳一間でぼろぼろのアパートだ。コニットバスではあるが、風呂便所付きなため、十分満足している。

家具は布団と冷蔵庫、洗濯機など必要最小限のものしかなかつたが、代わりに様々な本が壁際に積まれてある。そこから一冊、抜き出すと、壁を背にあぐらをかくと読み始めた。

読書は唯一の趣味だ。色々な世界があり、実体験するよりは薄い感触しか得られないが、それでも知識としては積み重ねられる。施設にいたときにおじさんの講義を受けていたせいか、頭に何かを叩きこむ作業は、楽しかった。

今読んでいるのは、子供向けのファンタジー小説。

それほど面白い内容ではなく、作家もこれ一つしか書いていないようであつたが、×××は何度も読んだ。

ストーリーは、キメラに母親を殺された竜使いの少年の英雄譚。キメラの存在そのものを否定し、正義の名のもとに何匹も殺していく話だ。軍に入り、討伐に精を出していたのだが、途中で同僚と恋に落ち、結婚し、家庭を持つ。その過程で自分を見つめ直しだした。自分はただ虐殺しているだけではないかと。

息子が生まれたのが契機となり、キメラ殺しを躊躇していくようになる。軍もやめようか、というところまで至つた。

だが、悲劇が起る。今度は息子がキメラに殺されたのだ。そこで憎しみを爆発させ、キメラの存在 자체をこの世から消そうとあら

ゆることをするようになる。

妻と離婚するなど糺余曲折をたどりながら、最後までキメラを憎み続け、最後にはキメラを殺すための社会システムまで構築して死んでいく、という話だ。

これを読んだ時の×××の内面はいつも同じだ。

何度もキメラが殺されるのを想像し、キメラに殺された主人公の感情を感じ取る。それが×××の心を浮き出させた。興奮も湧きたてられた。

だが本を閉じると、途端にそれらが冷める。キメラに対しても、どこか他人事のように感じるようになる。それがよかつた。

この生活を始めた当初はキメラとしての本能に押され、適当なパートナーを食べたいという衝動にかられた。危険を承知で魔物を食べたこともあるが、魔物は全く美味しくなかつた。やはり、パートナーでないといけない。しかしパートナーを吃るのは、人を殺すことに繋がり、殺人ともなれば警察が動き出す。逃亡生活を送る×××としては、それはできるだけ避けたかつた。

仕方なく餓えを我慢していたのだが、今度はパートナーが擬態を維持できなくなつたのだ。生まれたときの姿とは違うのだが、明らかにキメラであるその姿は、この生活を送るのに余りに適していない。

どうしようか、と考えているときに、この本を読んだ。

すると不思議なことに、食欲が消えたのだ。全くない、というわけではないのだが、それでも薄れていつた。それはパートナーにも影響し、擬態も随分安定するようになった。

いづしてこの本は、必需品となつた。

物語は中盤にさしかかった。竜使いが母親を殺した仇のキメラを前にし、その子供に剣を突きつけているところだ。その子供のパー

トナーもキメラで、まだ成人もしない内に二桁の犠牲者を積み重ねている。

仇が懇願する。息子は関係ない。俺を殺せと。

主人公は言う。お前は関係ない。こいつはこいつ自身が殺人鬼で、殺される運命にあるのだと。正義の名のもとに、こいつを殺すのだと。

そこで仇が笑った。主人公に言う。顔を見てみる、と。主人公は巨大な剣に反射する自分の顔を見た。そこに「」る自分の顔は、これ以上ない醜悪な笑みを浮かべていた。

仇は笑う。ほら見てみろ。お前は私怨で殺そうとしているだけじゃないかと。仇の子供を殺すという倒錯行為に身を染めているだけだと。

そこまで読んだ時、不意に扉が叩かれた。

「 さん、 いますか？」

若い男の声だ。見知らぬ声で、自分の名を知つていて驚きつつも、とりあえず出でることにした。パートナーが寝そべりながらも、耳をたてて警戒していた。

木製の古びたドアを開けると、意外な顔があつた。

「 やつぱり、 ××× だつたか。ずっと探してたよ」

ひどく驚いた。まさかの人物だつたのだ。五年を経ても、あまり顔が変わっていない。

「 君……」

パートナーが生まれた時に一緒にいた、竜使いの だつた。

とりあえず部屋に上げた。 は入ってすぐに、何もない部屋に驚いていた。

「生活厳しいの？」
「まあ」

冷蔵庫から紙パックのお茶を取り出し、彼に手渡した。それくらいしかもてなすものはない。

×××はお茶の隅を手で裂きながら、心臓の鼓動が強く打つのを感じていた。

何故ここに？ 何故私のことを知った？ 私がキメラ使いだと知っているのに、何故来たのか？ そもそも、自分が昏倒させられた後、なんて説明されたのか？

そのどれもが、×××を危機に陥らせる危険をはらんでいる。

×××の焦りとは逆に、 は落ち着いた声で言つた。

「今どんな生活をしているの？」

×××は答えた。バイトして暮らしていること、学校には行ってないこと、平穀に暮らしていること。

はただ頷くだけだつた。

話しあふると、今度は逆に質問した。

「 君は、どんな生活？」
「 学生やつてる。中央第一竜学校に通つてるよ」

照れくさそうに は言った。

そう言われて、×××は思い出した。彼のパートナーは竜だ。そして、中央第一竜学校は、認められた竜使いだけが在籍できる、エリート学校だということを。

「すごいね」

「ありがと」

照れくさかったのか、いきなり話題を変えようとする。
寝転んで をじっと見ていた白い犬を見て、言った。

「これが君のパートナー？ 隨分可愛らしく変わったね」

『変わったね』

これはどういう意味か。確かに ×××のパートナーが、つまりキメラが生まれる瞬間を見ている。キメラに擬態能力があることを知っているのか？

問い詰めようとした瞬間、唐突に のお腹が鳴った。時計を見ると、もう七時を過ぎている。
顔を赤らめた が言った。

「夕食、どうかな？ いいレストラン知ってるんだ」

×××は従つた。

流石のエリート竜使いだと思った。

連れて行かれた先は、なにやら怪しげな感じのビルだ。

一見そつは見えないが、本当に秘密にしないといけない場所は目立たないようにしていると聞く。

案の定、古びたドアを開けて中に入ると、別世界だった。そこは全室個室になつていて、薄暗い廊下にいくつも枝分かれした道がある。話し声は全く聞こえず、よくわからないクラシックだけが耳に入つてくる。

一番奥の部屋に着くと、　　は中に入った。

それまでの薄暗い廊下とは正反対の空間だった。

×××のアパートの三倍以上のスペースがあり、中央に巨大なテーブルと十脚以上の椅子。そこから少し離れたところにソファが置いてあり、ゆったりとくつろげるようになつていた。

「二人にせよっと広いけど、いつも使つてるからこゝでお願ひ。俺のパートナーもこゝにじやないと入らないしね」

そういえば、彼のパートナーを見ていない。

「　　のパートナーはどうしているの？ やつぱ竜ともなると、なかなか外に連れ出せないもんなのかな」

「もうちょっとで来るよ。少し用事があつてさ。まあ座つてよ」

促され、入口から見て巨大なテーブルの奥に座つた。足元にパートナーがつづくまる。　　はその対角線の席についた。

「料理はおすすめがあるんだけど、それでいい？」

頷いた。おそらく、どんなものでも口に合つだらう。

それより大事なのは、疑問点の解消だ。

「このままだぐだやつても仕方がない、と率直に切り出す」といった。
した。

「私のこと、どうで知ったの？」

「たまたまさ。ここいらへん学校に近いからね。何度もここいらへん通りたとき、みかけてあれ？と思つてたんだ。それで少し調べたら、名前を変えて雑貨屋で働いてるっていうじゃないか。気になつてね、その後どうなつたか？」

「それは私も聞きたかった。私のパートナーがキメラだつてこと、知つてるよね？　あのおじさんからはなんて説明されたの？」

は少し眉を寄せて答えた。

「キメラだから隔離しないといけないって。このことを言つちやいけないって」

「それだけ？」

はちらりと壁に視線を寄せた。×××もそれにつられてそちらを見るべく、そこには壁時計がかかっていた。それも何やら品のよさそうな代物だった。

「君は今日から竜使いだよねつて。だから相応の特権と地位を引き換えに、義務と秘密を身に納める必要があるよね、つて」

「だから従つた？」

「それだけじゃない」

なにやら空気が冷えてきた。　の顔が、序々に硬質のものに変わってきたからかもしれない。傍らに寄り添うキメラの毛が逆立つていて。赤い目からは炎が揺らぎだしていた。

「僕を紹介してくれたんだ。ある組織に。そこは国に連なる、荣誉ある仕事をたくさん承っているんだけど、常に人手不足なんだ。優秀な人材が足りないせいだつて。その優秀な人材が集う組織に、僕も入らないかつて誘われたんだ」

「それで、どうしたの？」

「受けるしかないじゃないか。僕みたいな孤児でも、そんな立派な仕事ができるつていうんだ」

「あなた、竜使いだよね？ そんな危ない橋渡らなくとも、十分いい地位に付けるんじや」

は首を振った。口元がなにか忌まわしいもので歪む。

「ダメなんだ。今の学校に入つて分かったよ。竜使いだから偉いんじゃないって、貴族の家に生まれた竜使いだから偉いんだよ。僕が入れたのは組織のおかげで、個人だと全くダメみたいなんだ。

同じクラスにいるんだ。縁もなにもなくつて、竜使いになつたら入学したやつが。そいつ、みんなからいじめられてるよ。後ろだってがないから、みんな好きにいじめられるんだ。学校に來てるのが不思議なくらいだよ」

の顔が、歪んでいた。

×××は背中に冷たいものが垂れたのがわかつた。これは、あの施設で出会つた中でも、最も気味の悪いものと同種だと感じた。

そこで、ばん、とドアが開いた。何か大きな影がいる。

「ただ、組織にいるにもちゃんと仕事を果たさないといけない。特に、功績を残さなくちゃいけないんだ。特に、僕しか知らない情報源で、僕一人で動いて、危ないやつを僕一人で捕まえたりするといいんだ」

影が動いた。座った　の何倍も大きな背丈で、鱗の生えた身体をのしのしと動かし、近付いてくる。

証明に照らし出されて現れた姿は、竜。

は言った。

「だからさ、僕のポイントになつてよ。キメラ使いの逃亡者さん」「どうして、私を捕まえるとポイントになる?」

×××は質問を飛ばした。幼なじみの自分に、とは言わない。会話が続かないからだ。会話が途切れた瞬間、自分は襲われる。幸い、答えてくれた。

「君が逃げ出したからさ。キメラは普通、閉じ込められたまま一生を終える。なのにどうして外にいるんだ? 逃げ出したからでしょ」「逃げだした、と聞いたわけじゃないの? その組織から」「違うよ。僕がたまたま君がキメラ使いであることを知つていて、探し当てたからさ」

「組織に報告は?」

「しないよ。僕一人で済ませたほうがポイント高いでしょ。調べたけど、組織は君を察知していないみたいだし。組織も知らないお尋ね者を僕が一人で見つけるなんて、大手柄だと思わないか?」

幸運が重なる。こいつは馬鹿だ。紛うことなき馬鹿者だ。こいつを消せば×××は助かると、分かつた。

だが、相手は竜使い。できるか?

自分のバイブルとなっている小説を思い出す。いくつものキメラを殺した竜。殺すに際し、ほとんどこづつた話はなかつた。それほど特別な力を持つのが竜だ。

登場したキメラは成すすべなく押しつぶされたものばかりだ。

どうするか。

迷つていると、突然 が笑いだした。どうした？

「そんなにびびらなくていいよ。漏らすなら上からじゃなくって下からでしょ。よだれ垂らすなんて汚いね」

言われて、手を伸ばす。顎のあたりからぼたぼたとよだれが垂れてきていた。

これは、どうしたことだらうか？

否。

理解はすぐに終わつた。

例のファンタジー小説を思い浮かべた。

まるで意味はなかつた。落ち着くどころか、逆に目前の竜に対する関心が増していく。

「じゃあ、もう終わるうか。叩き潰しても、君たちがキメラだつてわかるよね？」

が一步引いた。竜が机を挟んでそびえ立つ。

×××は思つた。

なんて美味しそうなんだ。

つばを飲み込んだところで、足元の白い子犬が変体しだした。見ずともわかつた。五感を使わずわかつた。私達は一つで一つのキメラなのだから。

巨大化する。真っ赤に燃え盛る。尾が伸びる。羽が生える。

どれも×××は感じ取つた。まるで自分の身体がそうなつたよう

に。

田の前の竜を見た。

飛びかかった。

ぱりぱりぐちやぐわや「くくく。

ああ、美味しい。少し焦げた表面も、噛みちぎるたびに顎が外れそうになる肉も、蕩けそなほどに熱い血液も、なにもかもが美味しい。久しぶりの食事は、最高だつた。

ああ、なんて美味しいんだ。竜はこんなにも美味しいモノだつたのか。今まで知らなかつたことは罪だと思った。

もうやめられない。やめるつもりもない。

こんなにおいしいものはそつはない。これほど良いものはない。キメラも全身を真っ赤に染め、皮膚でも味わつかのように竜の臓腑にもぐつてゐる。

絶対にやめられない。

決めた。パートナーを、特に竜を狙つて食す。法を犯し、警察に追われる身になつてもかまわない。

それにしても。

この肉の堅さはどうにかならないのか。顎が痛い。
もつと柔らかい肉がいい。次は柔らかそうなやつを狙おう。
柔らかい肉、というと若い肉だろうか。

これより若い肉というと、数えるほどしかない。中学一年から高校二年までの五年間。パートナーで言えば、生後五年以内か。

それを喰らう、それもたくさん。

どうすればいいか。

ただ狙うのもいいが、やはり竜がいいのだが、そうなると難しくなる。竜といえば貴族達ばかりから生まれ、警護のものもつく。そ

れ以外を狙うとなると、着地を転々としなければならない。それもいいが、よそのに対する視線は厳しいものがあるし、そうなると警察に捕まる可能性が高くなる。それはできるだけ避けたい。まだたくさん食べたい。

何かないか。

そうだ。

学校の先生なんてどうだらう。
生徒達の近くにいれば、よつぞりみどり、それなりに転勤もある。
ベストだ。

学校の先生にならう。

そのためには、大学に行かないとならない。まあなんとかなるだらう。高校を経ずとも大学に行く方法はある。とりあえず、この場をどうにかすればいいか。食べ終えた後、何もかも焼き尽くせばいい。その前に、この竜をたいらげよう。
ああ、なんて美味しいんだろう。

3・7 そして……

唯とキヨモリが襲われたと聞いたとき、ああやつぱりとこいつ冷たい感覚と、まさかという熱くたぎる思いが激しくぶつかつた。藤花の制止もほどほどに、夜の学校を飛び出した。

歩は走る。

息は切れ、喉は冷たい外気でからからに乾いている。全身がだるく、足などは悲鳴すら上げている。

それでも脳だけは燃え続ける。もつと走れ、もつと全身を振り絞れ、もつと、もつと。

歩の後ろにはみゆきとトレイネ。肩にはアーサーが乗っているが、歩の動きの邪魔にならないよう、前に屈んで上手く身体の位置を調整している。目は、少し血走っていた。

田標地点が田の前に迫ってきた。

病院。まだ日が昇るには遠い時刻ながら、そこからは燐々と光が漏れている。

深夜用の入口から中にすべりこみ、正面を見た。雨竜の姿があつた。どこか達観したような、なにかが抜け落ちたような顔をしている。

「あ、廊下を走らないでください！」

看護師さんの言葉はほとんど無視した。

雨竜の傍に行き、息も絶え絶えに聞く。

「先生！ 唯は大丈夫ですか！？」

やはり、止めるべきだったのだ。もしくは、皆で行くべきだったのだ。後悔はいくらでも思い浮かび、浮かんだ分だけ脳を熱く燃やした。

本当に、何を考えていたのか。危ないに決まっているのに、もし、が起こったらどうしようもないことはわかつていただろう。元氣だ。

雨竜は田の前の部屋を指した。歩は祈りながら扉を押しあける。

そこには、傷一つない唯の姿があった。

「唯！ 怪我は！？」

みゆきの声が先に飛んだ。唯が頭を軽く横に振った。本当に傷一つなさそうだ。

ほつと安堵する。とりあえず、唯は無事だ。

だが、ふと気付く。唯の顔に一切の表情がない。無表情というより、感情が欠け落ちた、と言った感じだ。

もしや、キヨモリに何か？ でも、唯が生きているということは、キヨモリも生きているということだ。それはこの世界のルールだ。

「唯、キヨモリは？」

みゆきが聞くと、唯の腕がゅうりと上がり、カーテンに囲まれた一角を指した。

カーテンを勢いよく開ける。

そこにあつたのは、包帯で全身をグルグル巻きにされたキヨモリだつた。頭は目と鼻を除いた箇所が全てグルグル巻きにされており、口を開くことすらできそつにない。身体のほつも、といひどいり血のにじむ包帯が非常に痛ましい。

視線が背中のあたりまで進んだ時、背中があわ立つのを感じた。
背中の中央部分。
あるはずのものがない。
翼がない。

「キヨモリ、飛べなくなっちゃった」

唯の仮面のような顔から一筋の涙が流れた。

控室には重苦しい空気が淀んでいる。歩、アーサー、みゆき、イレイネ、だれも口を開くどころか、みじるぎの音すら立てない。不謹慎だ、ともいう風に。

あの後、狼狽していた歩達は、やつてきた看護師達に促され、別室に案内された。そこには雨竜も移っていたようで、そこで色々話を聞くことができた。

雨竜が駆けつけた時、既に犯人は逃げていたらしい。そこにあつたのは、翼をもがれ傷だらけのキヨモリと、泣き叫ぶ唯の姿。それから近くにいた人に病院に連絡してもらい、手当てをしていたとのことだ。

雨竜には、自分を責めるな、と言われた。お前達は学生で、それを守るのが大人の役目なのだと。おかしかったのは自分達で、目を

放した自分が一番悪いのだと。

おそらくそれは気休めだったのだろうが、歩には全く効果がなかった。

説明を終えると、雨竜は学校に戻つていった。色々仕事があるらしい。

沈黙がしばらく続く。その間、加速度的に歩の感情は乱高下していた。表面上は何も変わらず、ただ内面だけが混沌となっていた。感情が異常なまでに高まつた時、無造作に歩は右腕を振るつた。耳をつんざく音と共に、木製の壁に大穴があく。手の甲がひりひりしたが、その痛さが弱弱しく余計に腹が立つた。

「くそ」

「自分を責めないで。歩に責任はないよ。責められるべきなのは護衛役だから」

みゆきの声は悲痛の色を含んでいる。

再び腕を振り上げ、しばらく震わせた後、そつと下ろした。皮膚を血が流れる感触があった。

「いや、誰の責任って話じゃない。全員が悪かつたんだ。キヨモリと一人だけで行つた唯も、行かせてしまつた俺達も、それを見逃してしまつた雨竜も、全員に責任があるんだ」

自分に言い聞かせるように呟いた。答えるものはいない。

重い、本当に重い沈黙が部屋を満たしていた。木製の片づ苦しい椅子も、無機質な石の床も、全てが自分を責めているような気がする。

それを破つたのはアーサー。

「こまさら後悔しても仕方あるまい」

アルコールは抜けているようで、厳かな口調が戻つてきていた。

「過ぎたことは過ぎたこと。悔やむだけでは何も変わらぬわ

何だその言ひ草は。苦手な竜のキモリだから、どうなつてもいいのか！？

考えるまでもなく、口から激情がほとばしった。

「随分偉そうな口調だな！ 酔つて寝ていただけのお前に言われたかねえよ！」

すぐに後悔する。自己嫌悪する。物に当たったことも、なによりアーサーに向かつて暴言を吐いたことを。完全にハッ当たりだ。それも最悪の。

冷たく燃え広がる歩とは対照的に、アーサーは落ち着いて見えた。いつもと何も変わらず、淡々と口を動かす。

「物に当たつても仕方あるまい。重要なのは、これから句を成すか、

だ

「私達に何かできることがあるの？」

ため息のような、力のないみゆきの声が響いた。

みゆきが口にした言葉と同じことを歩は思つていた。

言いつけすら守れない、ただの学生にできることがなどあるのか。

アーサーは言った。

「今回の犯人は件の幼竜殺しで違いないと思つか？」

歩は頷いた。おそらく間違いない。あそこまでキヨモリを傷つけることができるものを持ち、即座に逃げ出すことができるものが多いとは思えないし、タイミング的にもそつだらつ。雨竜も恐らく、やつだと言っていた。

「ならば、竜殺しをやればいい」

「どうやるんだよ。相手は警察でわえて」ずの相手で、竜を何匹も殺してきたやつだぜ？ なにより、俺達がどうやって見つけるんだ

よ

アーサーはあっけらかんと答えた。

「見つけるのは簡単だ。我がいる

はつとアーサーを見返した。平然としていた。

「唯とキヨモリがちょっと一人になつた隙に襲ってきた卑怯者だ。我が少しでもそれらしい素振りを見せれば容易く襲いかかってこよう。我のこの姿ならば余計にな」

確かに、唯が一人になつた隙を的確についてきた相手だ。ハンスの時も、誰もお付きがいないところを襲っているからこそ、今まで正体不明なのだ。こちらの動きをなんらかの方法で掴んでいると考えていいだろ？

ただし。

「相手は幼竜殺しよ！？ キヨモリが成すすべなくやられた相手に、何ができるの！？」

模擬戦では一応の勝利をおさめたが、自力では唯とキヨモリと比べ物にならない差がある歩とアーサー。みゆきとイレイネが加わったところで、キヨモリ達以上の力はおそらくないだろう。そんな四人が組んだところで、何ができるのか。可能性は万に一つもない。

何ができるのか。

己に問づまでもなく何もできなこと答えが出てきた。

歩はアーサーの瞳を見た。
ひどく揺さぶられた。

アーサーの瞳には熱く滾る激情があった。

「何ができる？ 何を言っている？ 我はアーサーぞ？ 竜の中の竜！ この世の頂点に位置するものぞ！？ 何を恐れる必要がある！ 間に紛れ、不意打ちばかりの卑怯者に臆する必要がある！？ かような駄馬など我の障害になりえるはずもない！ やつの腕を折り、牙を砕き、脳髄を引きずりだすことなど容易いわ！」

アーサー得意の大言壯語だ。いつもなら笑つて済ませる部分だ。ただ、いつもとはまるで違う。

怒りだ。隠しきれない、煮えたぎるマグマのような深く、熱く、重い、全てを焼き溶かすような、感情の発露だ。

そこには思わず後ろ足をふみそうになるほど深い淵な思いがあった。

控室にいる全員がアーサーに飲まれてしまつてこる。

「奴を殺す。歩、まさか一の足を踏むまいな？」

ノーとは言えなかつた。

いや、言わなかつた。

少しづつ自覚がでてきた。

歩もまた、その思いがあつたのだ。力が及ばないから、黙つていただけだ。

何ができるか、いや、できない。

違う。

やらなければならぬ。

無謀だろう。馬鹿だろう。脳なしだろう。

だが、歩には否定する理由がわからなかつた。

歩は頷いた。それを見てアーサーは満足そうに鼻から炎を漏らした。

夕日で真っ赤に照らし出されてる廊下で、歩は慎一に声をかけられた。

「歩、今日も図書館行つたのかよ」

「まあね」

「何この優等生。この前の模擬戦勝つたからって、何真面目ぶつてんだよ~」

「まあそつ言つなつて」

慎一の隣に彼のパートナーであるマオの姿があった。その前に座りこみ、わしゃわしゃと首を撫でてやると、狼型のマオは嬉しそうに手を細めた。尻尾をぱたぱたと振つている。

「俺と昼飯食わなくなつたと思つたら、能美さんと平也さんと食つてゐみたいだし。何その美人エリートハーレム。黒ストと皿二ハイに縛られて御満悦か？ 俺も混ぜるよ、アリカラ」

「なんだそれ」

「平さんが退院したら紹介しちゃうことだ」

「気が向いたらな」

「絶対だぞ！？ あ、それとアーサーにもようじくつとこてくれ

「ああ」

「このところ色々あつたせいで、慎一とは疎遠になつていた。後で埋め合わせをしないといけない。」

だが

今はまだやることがある。図書館に通っているのも、そのための下準備だ。

そして本番は、今日の深夜。

慎一と二三やつとりした後、仮の宿になつてゐる宿直室に向かう。

心なしか、心音が高鳴つてしまつた感じだった。

歩達は宿直室についた。がらりとドアを開け中に入ると、ちやぶ台を二つの影が囲んでいた。

「ただいま」
「おかえり」

みゆき視線をちやぶ台の上に乗せた資料から動かさず言った。
歩は畳に上がり、ちやぶ台の空いている席につく。抱えている荷物を脇に下ろした。

「収穫はあつたか？」

アーサーもまた視線は資料に向かたまま質問してきた。歩はいくつか手応えのあつた資料をカバンから出して、答える。

「いや、ない。やっぱもつあらかた探しつくした感があるな
「大分読んだからね。もう当分活字は見たくない気分だ」
「やつかりはじつ？」

みゆきは持っていた鉛筆でモミアゲの辺りを搔いた。

「ちょくちょくって感じかな。同じ記事も丁寧に読むと見方が変わるのは驚いた」

「闇雲に量を追つても仕方あるまい。心眼を持つて一つ一つの記事に目を通すのもまた必要だ」「

アーサーはふうと息を漏らした。少し疲れているようだ。「ここのはじめずっと酷使してきたからか、目が少し充血している。

「とりあえずお茶入れるから、三人とも休め。決戦は今夜だぞ」

直接調べているわけではないが、イレイネもずっと動いていた。アーサーの手の代わりとなりページをめくつたり、みゆきの持つてきた新聞を運んだりしている。分かりづらいが、イレイネも疲れるということは知っていた。

部屋の端に移されていたコンロに近付き、火をつけた。その上にヤカンを置き、急須と茶飲みの準備をしながら、歩は今日の夜行う予定の決戦に思いを馳せた。

唯とキヨモリが襲われてから三日が経った。

唯達はまだ入院中だ。唯は特に怪我をしていないが、キヨモリの傍から離れようとしなかったからだ。パートナーが傷ついた人にはまあることなので、病院も学校も許可を出している。雨竜も病院に泊まり込んで唯達の護衛の任を果たしているらしく、この三日間授業も全て休んでいた。

一方の歩達はといふと、幼竜殺しについて調べていた。

囮になるといつても、そうなると相手方の情報が必要になる。幼竜殺しがこの場を去る可能性はわかつていて、それでも下準備は必要だ。

下準備の時間を歩達は三日と決め、幼竜殺しの調査を始めた。

調査したのは、図書館にあった新聞、雑誌の類。古いものは立ち入り禁止の地下書庫にあったのだが、竜の特権で見ることができた。昼間は普通に授業を受け、放課後から寝るまで新聞と雑誌に目を通す日々を一日続けた。

そして今日は三日目。
当初決めた期限だ。

歩は淹れたお茶を二者に出した。みゆきには濃いお茶を、イレイネには薄めのお茶を、アーサーには中間の濃さのものを小さめの湯飲みで。

お茶を軽くすすつたところで、切り出した。

「ひとまず、幼竜殺しの事件を追つてみようか。イレイネ、一番左端の頬む」

イレイネから受け取ったのは、大まかな幼竜殺しの犯歴と主な報道。歩が調べた部分はそこで、昨日までにおおかたまとめていた。

「最初の事件は今から十年前の、首都のレストランで起つた竜殺し。全焼したレストランから当時十七歳の竜使いの少年の遺体が発見されたが、そこに竜の身体が跡形もなかつたことから、竜殺しと認定された。

それから半年で竜使いの遺体が発見され、竜の身体が連れ出され

る事件が八件発生。その相手がまだ若い未成年であったこと、最初の一件を除いて、竜使いの死因がパートナーを殺されたことによるショック死だったことから、一連の事件は同一犯だと警察が発表し、

『幼竜殺し』と呼ばれ始めた

十年前というと、歩は小学校に入つたばかり。

それから十年も経つてゐると思うと、ぱつと思い浮かんだ幼竜殺しの姿は、おどろおどろしい中年の男になつた。

「幼竜殺しが特別なのは、人ではなくパートナーを狙うことにある。ファーデバックを受けていとはいえ、竜よりも人のほうが殺しやすいのは確実だ。金銭狙いで竜殺しをする人にとってもそちらのほうが商品になる竜の身体を安全に確保できる利点もあるしな。だから竜殺しは、基本的に人を狙うのがセオリーなんだけど、幼竜殺しは人には見向きもせずに竜を直接狙つてゐる。幼竜殺しはかなり変わった性質の持ち主だ。で、みゆきよろしく」

「はい、幼竜殺しそのものの説明に移るね」

変わつてみゆきが説明を始める。みゆきが担当したのは、幼竜殺しの像を浮かび上がらせるような部分だ。

「まず、幼竜殺しはその名の通り一十歳未満の若い竜を狙つたのが特徴。深夜の、それも人通りの少ないところで犯行がほとんどで、飛行の後を狙われた。当時、幼竜殺しが最も猛威をふるつていたときは、竜使いに飛行禁止令が出て、それで被害者が減つていった経緯があるね」

「飛行禁止令が出るの遅くないか？」

「どうやら竜使いの面子を保つため、公にはなかなか動かなかつたらしいね。その件については、社説でかなり叩かれてたよ」

「ふん、無能だな」

アーサーが眉間にしわを寄せながら口を挟んだが、そのままみゆきは続ける。

「歩も言つたように、幼竜殺しは必ず竜そのものを狙うんだけど、それで竜殺しの傾向がかなり絞れた。一般に、竜殺しの意図は四パターん。組織間のパワー・バランスのための政治的発想、竜の希少な身体を狙つた金銭狙い、特定の人物および竜そのものに対する怨恨、後は精神異常者による無差別テロのようなものとかだね。政治関連、金銭狙いは非効率な殺し方から除外されて、被害者に関連が見つからなかつたことから、個人に対する怨恨もなし。後は竜全般に対する怨恨と異常者の犯行。警察も、幼竜殺しは精神に異常をきたしている可能性が高いって発表した。

以上のことから、幼竜殺しは単独、もしくは少数による個人的な犯行であると断定されるに至つたわけだけど

「ここからはアーサーが言つた。アーサーは警察の捜査に関して調べたのだが。

「ただそこからはまるで進展がない。幼竜殺しの犯行が神出鬼没で場所も国内を転々としていて、先読みが不可能。遺留物も特定できるものではなく、目撃証言は一つ、二件目の犯行の際に、空を飛んで現場から去る影を第一発見者が見かけたもののみ。それも深夜のため、かなり大きめの身体で飛行可能なこと位しかわからなかつた。故に十年たつた今でも全く逮捕できておらぬ。賞金首にもなつておるのに、情報すら出てこないので大したものだ」

ほとんど情報がなかつたようで、調べている間、アーサーは苛立つていた。しかし、警察が捜査方法まで詳しく発表するわけもないし、幼竜殺しが捕まつていない現状を考えると、報道する側として

も情報は得にくい。結果が出てみてから考へると、初めから徒労に終わる可能性は強かつたのかもしれない。

歩は話を戻した。

「ひとまず、話しを戻そつか。最初の半年で九件の犯行が行われたわけだが、それからは比較的頻度は下がる。翌年が一件、その次が一件、四年目には事件が起こらなかつた。五年目に再び起るわけだけど、それも一件。七年目、八年目、九年目に至つては〇だつたんだけど、十年目、つまり今年になつて直後の一件、忘れたころに発生した。つい最近にまた一件あつて、直後にハンス＝バーレ、そして唯」

キヨモリのもがれた翼と唯の能面を思い出し、冊子をつかむ手に力が入つた。

歩の内面を知つてか知らずか、みゆきがいつもと変わらぬ様子で言った。

「三年ほど間が空いたことで模倣犯も考えられたけど、やはり人ではなく竜そのものを狙うのにデメリットが大きいことで、その可能性は余りないと警察は考えたみたい。捜査のかく乱だけじゃ釣り合わないから、私も模倣犯はないと思つ」

竜の強さを目の辺りにしたことがあるものなら、おそらく皆同じ結論に至るだろ？。歩も異論はない。

ひとまず、仇は十年前からの幼竜殺しであることは確定したわけだ。

だが。

「……二日調べてわかつたのはこんくらいか

調べて歩達の計画に使えそうなのは、幼竜殺しの犯行の手口位だ。深夜、人気の少ないところ、飛行すること、竜。その位のもので、初日にわかつたことばかりだ。残りの二日間無駄に過ごした気がした。

「まあ、詳しく調べたおかげで手口に關してはおそらく間違いないのがわかつたしね。それだけでも十分な収穫だよ」

「それはそうなんだがな」

「どうにも割り切れない。過ぎたことを悔いても仕方がないのだが、それでも、と思つてしまつ。」

ここでアーサーが突然言つた。

「一つ面白いものを見つけた」

アーサーが差し出したのは、雑誌の記事。新聞ばかりに氣を配つていた歩は、初めてみるものだった。

記事の内容は、パートナーが殺されたというもの。

犯行日時は三件目の少し前。二十代青年の機械型パートナーが殺された。犯行は深夜で、人気の少ないところであつた。被害者は当時大学を卒業したばかりの青年だったのだが、死亡原因がパートナー死亡によるショック死。機械型のパートナーの姿が竜を模したものであつたらしい。

「軽く調べてみたのだが、その殺された機械型パートナーとやらも軍に入る直前で、それなりの膂力を持っていたようだ。新聞のほうでも、竜殺しとは関係ないがそれなりの大きさで報じられておつた。被害者の種族と年齢以外は、かなり幼竜殺しの犯行と似通つてゐる

のは確かにのだ

確かに共通点は多い。被害者が竜ではないこと、青年であったことを除けば、幼竜殺しの犯行と断じてもいい位だ。

だが。

「この事件もてがかりがないな」「そこがネックだ」

もしこの犯人が幼竜殺しだったとしても、てがかりがなければ意味がない。それに姿が似ているとはいっても、機械型のパートナーは見ただけで竜とは違うとわかる。勘違いなどもしないだろうし、幼竜殺しがこの被害者を殺す理由もないように感じた。

「確かによく調べれば何か出てくるかも知れないけどな……」「時間がない、か」

「残念ながらそうだね」

アーサーが歩の後に続けて言った。自分でもわかつていたらしい。

みゆきがまとめる。

「ひとまず、この件も置いておこう。最低限必要な情報はあるからだ。

おおよその犯行時刻、現場の状況、襲われた被害者の共通点など

（深夜、人気のないところ）、それから未成年の竜であり、犯行直前に飛んで移動したこと。

実は、歩には他に調べていたこともあった。被害者の大きさだ。

アーサーのよつたE級の身体の持ち主も被害者に含まれるか、が気になつたのだ。狙われたのは全て竜とはいえ、アーサーのよつた竜ではないとも言えるE級も狙うのか、心配になつて一人調べた。だが、それをアーサーがいる前では流石に言えなかつた。

いまその結果は、持ち込んだカバンの中にある。五番田と六番田の竜は、どちらもE級とまではいかないが、アーサーより少し大きい位だつた。おそらく大丈夫だろつ。

本当に最低限だが、一応は情報が揃つた。
後は決行の時を待つのみとなつたのだが、みゆきはどうか不安そ
うだつた。

様子を覗つていると、みゆきは意を決したよつて言つた。

「本当に、今夜、やるの？」

歩は即答した。

「「当然」」

声が重なつてしまい、アーサーと顔を見合わせる。

アーサーの顔は、キヨモリとの模擬戦前のときと似た顔つきにな
つていた。

それを見て、みゆきは再度言つた。

「本当に、いいの？ 相手は幼竜殺し。多分私達が敵う相手じゃな
い。それに、本当に出てくるかもわからない。ばれたら大玉玉を食
らう位じや済まされない。それでも、やるの？」

黙つて頷く。みゆきは肩を下ろして、仕方がない、といったふうに諦めたようで、それ以上何もいうことがなかつた。

それから用意された弁当を食べ、風呂に入り、それぞれの七時に

は寝た。

4・2 そして戦場へ

歩は夜十時には目が覚めた。決行のときまで後一時間あつたが、疲れそうにない。

仕方なく眠ることを諦めたのだが、起きあがることはせず、暗闇のなかでひたすら時間がたつのを待つた。被つた毛布を熱く感じて足先だけを外に出した。まだ冬の寒気が残る気温の中、歩は一人汗をかいっていた。

なんとも言えない一時間を過ぎて、ようやく深夜十一時になつた。宿直室を含め、学校の全てが寝静まつたかのような沈黙の中、歩達は行動を開始した。

歩達は起き上ると、照明をつけずに着替えを済ませる。着替えるのは気慣れた戦闘服。ところどころほつれ、サポーターの表面はざらざらと傷ついているボロだが、模擬戦のときの豪華なものより頼もしく感じた。

着替え終わったころ、みゆきとイレイネが部屋に来た。みゆきも戦闘服に着替え終えており、長い髪を結いあげている。

それから小声でやりとりをしながら、携帯食糧と水を軽く口に含む。アーサーも何も文句をいわず、ただ胃に流し込むといった感じだ。

軽い夜食を終えると、宿直室を出て、まず個人武器ロッカーに向かつた。そこは生徒個人の武器を置いてあるところだ。武器の持ち

出しは基本的に授業のときのみで、鍵は職員室に置いてある。歩達は竜殺しに対しても素手で挑むつもりはないが、使いなれた武器は個人ロッカーの中にある、そこに忍び込む必要があった。

かといって職員室に忍び込んで鍵を盗むのは難しかつたのだが、そこを解決したのはイレイネだ。

歩達は体育館脇の少し小振りな建物のドアの前まで忍んで行った。軽くドアノブを回してみたが、当然鍵がかかっていた。

「イレイネ、お願ひ」

みゆきの指示に答えて、イレイネが前に出た。指先を鍵穴に付けると、そこから指先を液状化し、中に侵入させる。がちゃがちゃという音が数回した後、がちゃり、と鍵が落ちるような音が聞こえてきた。みゆきがノブを回すと、呆気なくドアが開いた。

「家の鍵を忘れた時のために練習した甲斐があつたね

みゆきの茶目っ氣を含んだつぶやきに、歩が小声で返す。

「全く、今は助かったけどそれ泥棒とかのスキルだろ。これでどうにかなる鍵つてどうなんだ?」

「まあ、イレイネの手先の器用さは群を抜いておるからな。さて、行くぞ」

アーサーの後に続き、中に入る。だだつ広い空間に、縦長のロッカーが全生徒分並んでいる異様な光景の中、歩は自分のロッカーの前まで進んだ。持ってきた鍵で中をあけ、槍を取り出す。昼間の授業の終わりに穂先はつけたままにしていた。鞘を外すと中の刃が見え、薄暗闇の中、きらりと光った。

歩を除く二者はすでにいた。みな合図せて外に出て、イレイネが鍵をかけると、足早に校舎に戻る。

校舎内に入り、音をたてないようにながら、できるだけ早く階段を駆けあがっていく。夜の校舎は、それだけで背中の毛を経たせるような雰囲気があり、巡回している警備員がいなくとも余りここにいたくはないな、と思つた。

階段の最上階まで上がり、屋上に出た。

風が吹きすさび、髪が目にかかつた。みゆきが結い上げた髪を抑えているのが見えた。

「こも余り長居はしたくなく、すぐにイレイネの横まで進んだ。

計画では、ここからイレイネに空を飛んで運んでもらう予定だ。イレイネも、キヨモリほどではないが飛行できる。アーサーが先導する形で先に飛び、歩とみゆきを掴んだイレイネが運ぶ形になる。ここから飛び立てば、三十分ほどで目的地に着く。

「歩、行こう」

「おひ。アーサー、注意しないよ」

「言われるまでもない」

「そこまでだ」

さあ行くぞ、といレイネの傍に寄つたとき、大きな声が聞こえてきた。

声の方を向くと、そこにいたのは眉を傾けた担任と誰についているはずの副担任だった。

「何をしてるのかわかつてゐるのか？」

雨竜は本気で怒つてゐるようだつた。眉が吊りあがつており、ぶらりと伸ばした手にはごついグローブが嵌められている。いつものスース姿ではなく、歩が着ているものと似た戦闘服姿だ。力づくでも止めるつもりなのがわかる。

歩は答えず、逆に問いかけた。

「なんでここに？」

「ここにいる中村先生に聞いてだ。お前らがなんかたくさんでるつて。多分今夜動くから、そのときに抑えたいのですが、私だけじゃ止められないかもしれないから、ってな」

雨竜の後ろ斜め後方に、藤花は立っていた。こちらも戦闘服姿で、手にはみゆきのものと同じ剣が握られている。その足元では、彼女のパートナーである燃え盛るような狼、ユウが背筋を伸ばして四肢を踏ん張つていて、あたりを煌々と照らしていた。

「一人ともやめてください。気持ちはわかりますが、どうかお願ひします」

藤花の声は悲痛なものだつたが、歩は半ば聞いていなかつた。心配をはねつけていることに申し訳ない気持ちはあつたが、どうしても譲れないものがある。

必死に思考を巡らし、この場をどうやって切り抜けるかだけを考える。イレイネに掴んでもらい、空に飛びあがるまでの間、どう時間稼ぐか。おそらくただ飛びあがひとつとしても、この距離では雨竜につかまってしまうだろう。

必死で策を練つてゐると、アーサーが言つた。

「唯はどうした？」

「一時的に他の人任せたわ。もうヘマはしない。それはお前ら

も同じだ。命を無駄にするな

雨竜の声には力がこもっていた。なんとしても行かせない、といふのが伝わってくる。

普通ならここでやめるべきだろう。自分達を心配してくれている人を振り払って、無謀な死地に赴くのは、ののしられこそすれ褒められるものではない。

だが、歩はやめるつもりはない。

「すみません。これ以上、幼竜殺しの被害者を増やすわけにはいきません」

「貴方達だけで何ができるの？ 囮になるといつても、簡単にひきちぎられる網では意味がないでしょう。お願ひだから、私達に従つて。なんならその囮作戦に私達も協力するから。ちゃんと機会を練つて。大人の力も大事だからさ」

「思つてもいないこと言わないでください」

意外なことに、藤花の言葉は歩を逆に焚きつけるように聞こえた。歩達を逆なでするような言い方なのだ。

歩は失望してそれ以上何も言わなかつたが、すぐにアーサーが追撃をかける。

「警察に何ができた？ 十年間も幼竜殺しをのさばらせ、拳銃に唯一被害者とさせた。我らの責もあるうが、誰も何もできなかつたのは同じだ。我が囮になるという作戦も、おそらく警察は承諾しまい。違つか？」

雨竜の顔が途端に曇つた。頬をひきつらせ、眉間にしわを寄らせる。悲嘆にくれるといつもそうな表情で、今にも吠えだしそうな雰囲気だ。

それをかみ殺してか、低く唸るような聲音で言つた。

「水城も同じか」

「はい」

歩は即答した。

しばりへりひをこひでいたが、雨龍さまとみゆきに向かつた。

「能美、お前はどうだ？　お前は違うんじゃないか？　どうにか踏みどりまつてくれないか？」

みゆきは最後まで何度も確認を取つてきた。本当にいいのか、ともしかしたら、ここでみゆきは降りるかもしれない。
そうなると、もう終わりだ。

その顔は涼しげだった。

「いいえ、私も同じ気持ちです。先生方の私達を思つての行動に申し訳ない気持ちもありますが、幼竜殺しを許すことなどできるわけもありません」

「お前らだと、まず間違いなく負けるぞ？　ただ死んで満足か？」

みゆき自身が歩達に投げ掛けた問いと同じだ。

即答した。

「やつてもいないことを断言しないでください」

「考えるまでもないでしょ。相手は幼竜殺しですよ？　万に一つも勝ち目はないんじゃないですか？」

みゆきの語氣が強くなり始めた。それまで抑えていたものが一気に吹き出すように、感情が吐露されていく。

「それでもやらなければいけないこともあります」

弓きづられるように、雨竜の言葉も荒くなつていった。

「それは命があつてこそだらう。お前らは、ただ怒りを発散したいだけじゃないのか？ 浅慮からキヨモリを傷つけてしまったうしろめたさを、责任感を、何かにぶつけたいだけじゃないのか？」

「そうかもしれません。ですが、誰も幼竜殺しを補足できていない現状、できるかもしれない私達がやつてはいけない理由がありますか？ 機会があるのに、友人の仇をただ黙つて見守ることなんてできますか？」 お願いです。私達を行かせてください」

「どうしてそこまでこだわる？ 能美には直接関係がないことだろ？」

「私は唯とキヨモリと、そして歩とアーサーの友人です。それ以上の関係がありますか？」

みゆきの声は穏やかで丁寧なものだったが、不思議な圧迫感が'affた。吹きすさぶ風に煽られて、髪が踊り狂っている。まるで彼女が押し隠している、彼女の内面を表すかのように。

雨竜達がすこし気圧されるのが見えた。

いけるかもしれない。

歩は一人打算的に行動していた。

「それでも、あなた達生徒は私達に守られるべき存在です。お願いですから、おさめてください」

「すみませんが、聞けない願いです」

藤花は本当にここにいる意味があるのだろうか。逆に歩達をいら立たせているようにしか見えない。

みゆきは藤花のお願いをむべもなく断り、代わってアーサーが口を開いた。

「雨竜、藤花、貴様らは何をもつて我らを止めん?」

唐突な質問に少し戸惑つたようだが、まず藤花が答えた。

「教師の役目です」

「雨竜、お前は?」

意外なことに、雨竜は「」もついている。視線はアーサーにむいているのだが、瞳に力がない。どうも、心中でなにかが揺れ動いているようだ。

数秒黙っている間に、歩は後ろ手でイレイネに触れた。手をつかみ、軽く引き寄せる。

やつとのことで、雨竜は言った。

「俺の正義だ」

アーサーはおだやかに言つた。

「それでは我らは止まらない」

アーサーが言い終えるのと同時に、歩はみゆきの腕をつかみ、イレイネに身体を預けた。すぐにイレイネの腕が伸びてきて、身体にまきついた瞬間、歩は叫んだ。

「アーサー！」

「おう！」

アーサーが飛び上ると同時に、歩は地を蹴った。初期加速をつけるためだ。軽く飛び上がった後、逆にガクリとイレイネに持ち上げられる。

あつといつまに上昇していった。足元には雨竜達の姿が見える。全く動いておらず、ただ歩達がどこかへ去るのを見ていた。

雨竜はまだ突っ立っていた。

歩達が飛び去ろうとした瞬間、咄嗟の一歩が出ず、ただ見ていた。動く気にならなかつた。

それはこちらのほうが都合がいいからだ。雨竜の本来の目的にとつて、こうなつたほうがいいのは分かり切つていた。だから、実力行使はしなかつたのだ。

だが

何故だろう。雨竜は喜ぶべきことなのに、どうも気が晴れない。

「行かせてしましたね」

すぐ後ろにいる藤花に向き直つた。丁度月が陰つたせいで、表情を覗うことはできない。

「そうですね」

「良かつたんですかね」

お前が焚きつけたんじゃないか、と怒鳴りたくなるがすぐに喉で止めた。

「こいつ言ひのほ逆効果だ。」

「さあ」

「ずいぶん冷たいですね」

藤花を無視して、雨竜は己の頭の中でも問いかけていた。
本当に、いいのか。

決めた。

「中村先生は学校で待つておいてくれますか」

「先生は何を?」

雨竜は藤花の返事を聞かずに階段のあるほうへ向かった。
返答代わりに口元でつぶやく。

「全て終わらせる」

予定通り、歩達は三十分ほどで目標地點についた。降り立つた場所は、キヨモリが襲われた場所。奥には森が広がり、比較的穏やかな魔物達の住処となっている。

歩達はそこを戦場と定めた。

「じゃあ

「気を付けて」

一言声をかけて、みゆきと別れると、歩は森に足を踏み入れた。肩にどさつと慣れた感触がのっかかり、アーサーが乗つたのだとわかつた。

足を踏み出す度に軽く地面が沈んだ。歩が踏み入れたのは獸道で、下はクッシュョン材のようにやわらかい。豊かな土壌を示すように、見上げる木々は青々している。

この森についても調べたのだが、国立公園に指定されていた。中で暮らしているのは一般にD級と呼ばれる猪、鹿などの野生生物であり、魔物はほとんどいない。見つければハンターが狩っているらしい。

当初、幼竜殺しをどこで迎えつかとは大いに迷った。人通りの少なく、思う存分に動け、周りに被害を出さずに済み、それでいて幼竜殺しが襲つてくるであろう場所、と条件を考えてい

つたのだが、どうも都合のいいところは思い浮かばない。当然だ。そんな甘い場所は存在しないからだ。

そもそも、幼竜殺しが何を狙い、何を手掛かりに幼竜を捕捉し、襲いかかるのかなどわかるわけがない。飛行した後、というのが共通点ではあるが、それで確実に見つけられるとは断言できない。

如何にして囮となるか。

結局採用したのはアーサーが提案した案。空を飛んで移動し、開けたところで待つ。相手が思わず狙うではなく、挑発的に待ちかまえるという手法だ。アーサーは、自身の見た目も利用した罠だと自嘲してうそぶいた。

正直、本当にこれで出でくるのか、という疑問はあったが、それしかなかつた。

みゆきと別れたのもそのためだ。別行動をとり、歩とアーサーの二人だけで行動しているように見せかけるためだ。勿論このまま別れたままというわけはなく、みゆきはいつたん町の方に戻つてから、別口で戻つてくる予定だ。合流場所を決めており、そこでアーサーと歩が待ち受け、みゆきが潜む、という形にする予定だ。道中狙われたときは、携行した閃光弾を上げることになつていて。これは学校でのサバイバル訓練の際に押借していたものだ。

足音が二つ、交互にリズムを踏んでいく。時折藪を手にした槍で払いながら、歩は案外楽に保てている、と思つた。キヨモリとの模擬戦からこちら、どうも緊張感が欠けているのではないかと疑つてしまふほど、竜殺しに対する恐怖心は薄い。

思わず、軽口を叩きたくなつた。

「ふくろう、いるな」

「そうだな」

ホー ホー といつ鳴き声があたりを木霊している。今は深夜一時。完全に夜の世界だ。木々に透けて見える月が、いやに美しい。

辺りを見回していると、肩に乗ったアーサーの顔が少し妙に見えた。

「どうした？」

「ん？ 何もないぞ」

返答してきたアーサーの調子はいつもと変わらないが、どうもおかしい。

興奮しているのか緊張しているのかはわからない。ただ、肩に伝わってくる熱は高い。そこだけ少し汗ばみ始めた位だ。アーサーの目もどこかうつらに見えるのだが、逆に時折、鋭い光を発したりしてもあり、どうも拳動不審だ。こうなしか、重心を入れ替える動作も多い気がする。

「お前、どうかおかしいのか？」

「何がだ？ まあ長いこと飛びすぎたのかもしれんな」

アーサーはここに来るまで飛んできていた。そちらのほうが竜殺しも察知しやすいのか、と何気なく思つての行動だったが、それも身体に響くほど体力が落ちているのだろうか。にやりと笑いながらアーサーが言つた。

「風邪でもひいたかの？ どうも熱いし、身体がだるい」「少し甘やかしすぎたか。これからもつと飛ぶ練習でもするか」「我に鍛錬などいらぬ。既に体躯は完成されておるのだ」

こいつもの軽口に笑つていると、ふと気付いた。

「まるで緊張感ねえな

こんな緊迫した状況だといつこのに、まるで自覚がなかつた自分に気付く。

「いつ幼竜殺しが出でくるかもしれないのにな
確かに、黙るか」

本当に緊張感が抜けている。なにかおかしく感じた。

少し考えただけで、自身の心境が不可思議なことに気付いた。これから唯とキヨモリの仇打ち、相手は幼竜殺し、爾竜達の制止を振り切つてここまで来た。なのに、まるで危機感がわかないのだ。己の中に緊迫感を感じられない。

あるのは、妙な浮足立つ感覺。首の後ろ辺りから頭に向かって、なにか昇つてくるような、そんな感触があるのだ。それが変に気持ちよく、緊張感を抜けさせる原因となつていて想ひ。

これではいけない、と氣を引き締めようとするのだが、どうも上手くいかない。

その時、がさつと音がした。それなりに大きい。

「アーサー
「ああ」

斜め前から聞こえてきた。アーサーに合図して飛んでもらい、歩は右手で槍を構えた。左手はポケットの中に突っ込み、いつでも閃光弾を投げあげられるようにしておぐ。

序々に近付いてくる。丁度その辺りは木々が濃く茂つており、月

の光も届かないせいで、雑な影しか見えないのだが、かなり大きく
見えた。

口元にたまつた唾を飲み込んだ。

影が月の差し込む空間に差し掛かった。

見えてきたのは

「猪？」

何の変哲もなさそうな、薄茶色の体毛で、鼻先に泥をまとった四足獸だった。特に敵意も見えず、じけりをそつと見ている。警戒はしているようだ。

歩は息をひそめ様子を覗つていたのだが、猪が踵を返し歩達とは逆方向に走つていったのを見て、はっと息をもらした。

幼竜殺しではなかつた。

「違つたな」

「ああ」

歩は再度氣を引き締めた。まだ夜は長い。

これから、どうなるか。

雨竜は病院に来ていた。

ひとつひとつと廊下にリズムを立てながら、迷わずに進んで行く。行き先は、平唯とキヨモリの病室。ドアを少し乱暴に開ける。

中で、平唯がびくつと肩を震わせるのが見えた。キヨモリの前足の上に自分の両腕を敷き、突っ伏すようにして寝ていたようだ。

「どうしました？」

雨竜は答える。

「すまない。何度謝つても謝り切れない。だがもう動いているんだ」

平唯は意味がわからないといった表情を浮かべた。それはそうだ。わからないように言っているのだから。覚悟を決めた。

「平、悪い」

平唯のそばに近寄り、強引に腕をとった。

4・4 火蓋は意外な形で切られる

「ノーノでいいか」

歩達は呆氣なく目標地点についた。

猪に一度あつただけで、拍子抜けしてしまつほど何も起こらなかつた。移動時間が十分程度だつたからかも知れない。

着いた場所はかなり開けた空間だ。以前、整備して気軽に遊べる場所にしよう、という計画があり、流れていた川をもう一本溝を掘ることで、一般に流した上で、その間の木を伐採されたのだが、財政面のため、そこで計画は頓挫してしまい、森の中にぽつんと虫食いができたまま放置されることになったのだ。

ここまで繋がる道も本来なら別の舗装された道があつたのだが、土砂崩れで塞がつてしまい、歩のように、けもの道をかきわけて来なければいけなくなつた。戦場にするにはうつてつけの場所である。

歩は足元を軽く濡らして川を渡り、中央の敷地に足を踏み入れる。そこは学校の運動場ほどはあり、十分に動きまわれそうだった。いくつか大きな切り株が放置されたままだが、それ以外は足首位までの雑草があるだけだ。もつと生い茂つているのかと思っていたのだが、予想が外れた。もしかしたら、鹿などの食事場所になつているのかもしれない。

開けた空間の中央あたりにあつた、切り株に腰を下ろした。学校のサバイバル訓練で、何度かけもの道で山登りをさせられたせいか、疲労は薄い。逆にハイキングみたいで楽しかった位だ。

そこまで思い至ると、やはりおかしな自分に気付いた。

本当にどうにかしている。何故か今、歩は猛烈に楽しいのだ。心が躍つているのだ。興奮しているのだ。まるで場に合わない。

何故そつなつているのか、全くわからなかつた。

思つところがあり、アーサーに声をかける。

「アーサー、体調はどうか？」

「ん？ ああ、いつもより良い位だ。今なら月まで飛べるな」

先程から肩の上に乗つたままの相方は元氣そつだつた。無駄に饒舌でもある。

やはり、おかしい。

「さつきまで具合悪そつだつたのにな」

「我の回復力をもつてすれば、一の程度は容易である」

確かに体調が戻つてゐる。むしろ本当に良い位ではなかろうか。肩にかかる重心の力加減も一定していて、目に写る顔の艶もいい。さつきまでと豹変していた。

「なんかおかしくないか？ お前」

「何がだ？ そんなことより、今は幼竜殺し戦に向けて心を整えよ。そう時間は空かぬぞ」

「どうしてわかる？ 来ないかもしれないのに」

「勘だ。そんなことより戦に集中しろ。どうも別なことに意識がいつていよいよ見える。我が慧眼をもつて幼竜殺しの動きは見逃さぬが、お前が腑抜けていていい道理はない」

どうもおかしいが、確かに今すべきことは異変の特定より、戦前

の心構えをすることだらう。どうも浮ついていいる自分を正さなければ、十全に戦えない。

ふーと、息を吐く。腹がへこみ、全身が引き締められるのを感じてから、今度は思い切り吸い込む。冷たい夜の空気が肺に入り込み、浮ついた精神を引き締める。鼓動を感じ、己の精神状態を確かめるが、やはり速い。

それを何度も繰り返していく、序々に呼吸を落としていく。意識を筋肉に、骨に、神経に行き渡らせ、身体と対話して、掌握する。

そうして身体を作り上げた。まだ浮ついている部分はあったが、身体はまともに動かせるだらう。

意識は幼竜殺しとの戦闘について。

もうみゆきはこの場についているだらうか？ おそらくいるだろう。時間的にそつかからないし、闪光弾も上げられていない。おそらくとしか言えないが、歩に居所が分かる位なら、そもそも潜む意味もない。

耳を澄ませる。ふくろうはまだ鳴いており、夜の帳が下りているのを感じさせた。川の流れる音と相まって、心地がいい位だ。氣を抜いたらすぐにでも腑抜けてしまいそうになる。

心地よさと戦っていると、不意に雜音が混じりだした。コンロで火をたいているときに起つて、耳障りな音だ。序々に大きくなつていき、次第に耳が痛くなつてくる。

「アーサー！？」

「わからん！ まさか幼竜殺しではあるまいが、構えよ！」

これほどの轟音を発するのが、幼竜殺しのはずがない。こんな音を発しながら暗殺するなどできるはずがないからだ。

しかし、誰がこんな音を発するといつのか？

音の方を向くと、そこの木々がざわついていた。特に上のほうの葉が押されるようにむらされていく。

その上に音の発生源がいた。

機械の竜だ。形はアーサーと似た竜のようで、やや前傾姿勢の二足歩行、脚が一つ、腕も一つ、伸びた細長の頭に、翼、尾と揃っているのだが、明らかに竜には見えない。硬質の鈍く光る表面で、角ばった身体。腕らしきものの先についた爪も、剣をそのままくつつけたようにしか見えない。背中からは炎が噴き出しており、それで飛行しているのだろう。目の部分には怪しく光る真っ赤なルビーのようなものが嵌めこまれていた。

歩達のいる広場に近付いてくると、機械竜は降り立つた。両足と触れた地面が陥没したかと思うと、軽い地震のような振動が伝わってくる。キヨモリよりも一回り大きな巨躯は、威圧感があった。

機械竜がこちらを見下ろしてきた。無機質な瞳がこちらを睨んでくる。

歩は槍を握りしめて、腰を下ろした。疑問は残きないが、ひとまず警戒するい越したことはない。アーサーも空に飛び立ち、戦闘態勢へと移行しようとした。

その時、聞きなれた声が聞こえてきた。

「構えなくていい。私だ」

機械竜の背中から人が降り立つた。

「雨竜先生？」

雨竜だった。少し前に見たときと同じ格好だが、目に宿る光は全く別のものだ。

強い、決意が透けて見える。

「能美もいるんだろ？」「出で！」

大声に答えるように、みゆきとイレイネが出てきた。川を越えた先にある大岩の裏に隠れていたようで、そこから用心深げに歩いてくる。

みゆきが川を越え、歩達の傍までやつてくる途中で、アーサーが言った。

「どうしてここに？　まさかお前が竜殺しでした、とでも言つのか？　そもそも何故ここがわかつた？」

すぐには答えなかつた。みゆきが歩の隣にやつてきたといひで、ようやく返答してきた。

「その前に、私のパートナーを紹介しよう。見ての通りの機械型パートナー、サコンだ」

ふとアーサーの言つていた幼竜殺しが犯人かもしれないという、機械竜の話を思い出した。

「それがずっと隠してきたパートナーか。随分な異相だな。何故今まで隠してきたのだ？」

「自分で言つのもなんだが、こいつは強力すぎるんだ。それに比べて問題が起きやすい身体でな、余り頻繁に外に連れ出したくないだ」

「過保護だな」

「なによりこいつの修理にもメンテにも金がかかる。言つならばケチだな」

先程からどうも話がずれている。それよりも、この状況を早くはつきりさせたかった。雨竜は敵なのか、はたまた味方なのか。歩は話を戻した。

「先生、どうやってここに？　あの後、すぐに追つてこなかつたなら、空を飛べない先生では後を辿るのは難しそうですが」「サコンの能力だ。レーダーを知っているか？」

歩には聞き覚えがなく、首を振つた。みゆきも同じようで、知りません、と聞こえてきた。

「ざつと言つと探知能力だ。原理は省くが、こつから学校位までならなんなく把握できる。今回はアーサーの姿がわかりやすいから、それですぐに掴めたわけだ」

「」でアーサーが酔いつぶれた寝ていた夕食の時、ラジオで聞いた内容を思い出した。たしか、第一陸戦部隊の隊長が言つていた気がする。

「ずいぶん強力な力ですね」

「確かに希少な能力ではあるが、無効化する能力もあるから、万能というわけでもない」

歩は核心に踏み込んだ。

「それで、先生は何をじこじこって？　いまさら止めに来たとか？」

雨竜は少しためてから、答えた。

「ああ、お前らを引きずり戻しに来た。そのためのサコンだ。力づくでも止めるぞ」

歩はサコンを見上げた。

キヨモリに負けずとも劣らない威容。これを相手にできるのか。槍を強く握った瞬間、雨竜がそれを身咎めてきて言った。

「水城、やめとけ。攻めに回ったこいつの破壊力は相当だ。怪我をしても知らんぞ」

「教師の癖に、生徒の怪我を知らんといつか」

アーサーの難癖に、雨竜は笑つて答えた。

「本当なら平を連れてくるつもりだつたんだが、戸惑つていたようで、なかなか返事で出なかつたんでな。仕方なくこうして実力行使に訴えることにした」

「キヨモリの傍に張り付いていた唯を？　とんだクソ教師ですね」

みゆきの声は辛辣だ。唯の内面を慮つてのことだらう。

「私はもう手段を選ばない。いや、もともと選んでなかつたのが、方式を変えた」

「どうも要領を得ない話だ。独白のような語り口調で、意味がわからぬ」。

「もともと選んでなかつた？ 何が目的だつたんだ？」
「それは後で教えよ。まあ、連れ戻させてもらひうべ

雨竜が動きだした。サコンも続いて足を踏み出し始める。一步伸ばすごとに空気が抜けるような音がして、地面が陥没していく。歩は構えたが、どうにかできるとは思えなかつた。それはアーサーとみゆきも同じようで、少しずつ後ずさりしている。
アーサーが愚痴るよつて呟いた。

「くそ、幼竜殺しもわかつたと来ればいいのに

雨竜がにやりと笑みを浮かべて言つた。

「レーダーで見えるが、ここに幼竜殺しはない」

そう言つている雨竜の後方から、何かが出てくるのが見えた。藤花だ。パートナーのコウもいる。猛烈な勢いで走ってきており、川を樂々と飛び越えた。

「藤花もいるのか。応援を呼ぶとは情けない」

アーサーが再度一人ごちた瞬間、雨竜がはつと表情を曇らせ、後方を見た。

藤花とコウがざつと地面に降り立つ。コウの額に、なにやら見覚えのない無機質なものが付いていた。

雨竜が叫んだ。

「サコン！ 後方転換九十度！ 粒子砲用意！」

サコンの口からなにやら光が漏れだし始めた。雨竜も歩達を無視するように後ろを向き、サコンの後ろに回り込もうとする。

だが、藤花は既に近くまでやってきていた。

サコンの身体に赤い閃光が走った。十にも及ぶ数の線が描かれ、そこからサコンの身体が崩れていく。右腕の付け根が、左腕は縦に、脇のあたりから股間に向かつて斜めに、尾は輪切りに、それぞれ分断された。

崩壊するサコンの上をコウが飛び越えてきたのが見えた。尾が体長の一倍以上に伸びて赤熱しており、それで切り刻んだようだ。怪しく光る目は、化生の様相を呈している。

だが、意図がわからない。何がどうなっている！？

崩れゆくサコンの口から上空に向かつて真っ赤な線が伸びた。途端に回りが明るく照らされ、雨竜と藤花が刃を交えるのがはっきり見えた。

サコンは口から線を伸ばしたまま倒れ、首ががくりと振られたのだが、それに従つて線も振り下ろされた。歩の人一人分隣、みゆきとは反対方向に走つたそれが、肌にささるような熱をもたらした。同時に何かが溶けるようなじゅつといづ音がした。地面まで到達したところで、サコンの田の光が消え、同時に線も止んだ。

振り返り線の後を見ると、森に真っ黒な道ができていた。燃えていると思ったのだが、それは違うことに気付いた。焦げているのだ。ぱちぱちと火花を散らしている木々もあつたが、それも含めてほとんどの木々は炭化していた。灼熱のトンネルと化していた。

歩の背中が粟立つた。なんだ今のは、歩達があらがつたところで、何ができたのだろうか。

しかし、今は状況が変わった。おそらく、もつと悪い方向へ。

雨竜と藤花の方に視線を送る。

剣と装甲を張られたグローブが交じり合っていた。雨竜は剣を直接受け止めることはせず、斜めですり上げるように受けており、刃の役目を全く發揮させていない。両手が次々と入り乱れ剣をさばき、不意に鋭い拳が藤花に向かって伸びたと思ったら、次の瞬間には右足の甲が藤花の足を払おうと低空を裂いている。どれも避けられてはいたが、歩では受け切れないだろう。

対する藤花は「**！」**と、雨竜に全くひけをとつていなかつた。決して大振りをせず、雨竜の拳の圏内には決して入らないし入らせない。時折飛んでくる拳も蹴りも、間合いを広げることで危なげなく避けしていく。卓越した戦術とそれを支える剣技であつた。

そこに、乱入する影が。

「**コウだ。**

燃え盛る身体をぶつけようと、烈火の如き速度で雨竜に迫る。雨竜は身体を投げ出すことで避けるが、そこに尾の追撃。

それを拳ですり上げて尾の描く線を「**」**からずらしたが、更なる追撃として今度は藤花の一撃。地面を転がつてなんとか避けた。

すぐさま立ち上がつたところに、コウが突撃してきた。なんとか捌くが、猛攻はやむ気配がない。余りにも一方的な力の差があった。コウの動きは獣の中でも特一級のそれで、雨竜も特一級ではあったが、所詮は人の動きであった。

三者の動作に、歩は壁を感じた。上の階層にいる者たちのやりとりだったのだ。それは模擬戦の際に感じる、世人やグリフオン達のそれより、さらに上にあった。

「ウと雨竜のやり合いを注意深く覗っていた藤花が言った。

「パートナーが崩れたというのに頑張りますね。ユウに勝てるといもお思い？」

「雨竜が藤花をにらみながら衝撃の一言を発した。

「幼竜殺しめ」

「幼竜殺し！」
はつと藤花を見るが、余裕の笑みを浮かべたままで否定しない。
つまり　藤花が幼竜殺しなのだ。

「イレイネ！　長田先生の援護を！」

確定するや否や、みゆきが動いた。歩も数瞬遅れて地を蹴った。

横でイレイネの両腕が伸びる。行き先は藤花のパートナーであるコウの方向。ということは、歩が行くべきは藤花。

槍を両手でつかみ、一直線。だらりと剣を下げるままの藤花の心臓めがけて、突いた。槍がうねりを上げて、藤花に迫る。

藤花は手にした剣を真上に放るように上げ、槍を跳ねあげてきた。狙いを誤った槍はむなしく空を切った。

しかし、これも予想の範囲内だ。さっきまでの雨竜とのやりとりで

力量差はわかつてゐる。ただの突きを喰らつてくれるわけはないのだ。

そのため、初めから歩は力を余り込めていない。突進してきた勢いも直前で殺した。

先が暴れる槍を強引に御し、さらに一一度突く。両腕の肉が悲鳴をあげるが、なんとか槍は従つてくれた。狙いはおおまかにしか付けられなかつたが、どこかで藤花に当たればいい。

藤花の表情に驚きが入つたところで、すぐに態勢を低くしながら後方に下がつた。暴れる槍は肩あたりを擦つただけで拳動をやめてしまつたが、さらに

最低限の目的は果たした。藤花を兩竜の元にはいかせなかつた。

「ずいぶんな荒技ですね」

藤花は余裕の笑みに戻つてゐる。ひとまず、落ち着いた状況に持つていけた。

ふつと息をついたところで、みゆきのうめき声が聞こえてきた。そちらを見ると、コウの尾がみゆきを捕えてゐる。イレイネと兩竜はどうしたのか。

「油断大敵」

急いで藤花のほうにむきなおしたが、遅かつた。前蹴りが歩の胸をとらえ、歩の身体は後方に放りだされた。草地の上を背中ですべつてしまい、途中でころん、と視界が一回転し、膝から落ちた。

痛みは身体を痺れさせていたが、急いで顔だけでも起き上らせ場を見る。

雨竜は片膝をついてしゃがみこんでいた。口の端から血を流しており、強烈な一撃を受けていることがわかる。ぱっと見だが、切り刻まれたわけではなさそうで、目は爛々と輝き藤花を睨みつけていた。

イレイネは「……」といふと、わからない。全身を打ち砕かれて地面でみずたまりになつていてるのかもしれないが、それでも姿が見えないのはおかしい。

と、コウとみゆきの足元からなにかが一直線に伸びた。イレイネの腕だ。先に腕の部分だけ形を取り戻したようだ。狙いはコウの首あたりか。

そのまま伸びていき、コウの頭にぶつかるか、と思つた瞬間。

コウの口が大きく開かれた。人間でいうなら口裂け女といったところか、コウの首あたりまで口の裂け目は伸び、赤黒い内膜をさらしている。

そこにイレイネの腕が入り込んだと思つた次の瞬間、再びガチンと閉じられた。

そして驚愕。「ぐくり」と喉が鳴つたのだ。コウはイレイネの一部を「ぐくりと飲みこんだようだ」。痛みも何もないらしく、けろりとしており、むしろ何故か嬉しそうですらある。不定形なイレイネが胃に納めても動き、中からなにかされるかもしれないという恐怖感はないのだろうか。

「コウ、おいで」

藤花の声に従い、尾でみゆきをとらえたままユウは地を蹴った。
みゆきは気絶しているようで、四肢をだらりと地面に垂らし、全く
動く気配がない。

みゆきが持ち上げられ、藤花のすぐ横に宙釣りにされた。そこに
藤花が首筋に剣の刃を当てた。

これで歩達は動けなくなつた。人質をとられたのだ。

「さて、改めて自己紹介を。どうも、幼竜殺しです」

藤花が微笑んだ。凄みの混じつた艶然な笑みだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8672x/>

DDS ~竜殺しとパートナー~

2011年10月29日21時23分発行